

諦観するのはもうやめた

万能型蛮族

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「仕方ない」が口癖の主人公、久世響希。

諦観が染み付いた少年は、悪魔召喚アプリを手にする。

諦観。

本質をはつきりと見極めること。諦観。

あきらめ、悟って超然とすること。

☆

デビルサバイバー2のセプトントリオン編を独自展開を混じえながら書いていきます。予告無しで内容の変更がされる場合もありますが、そういえば変更したなと思いついたら変更の告知をします。取り敢えずは他の小説に浮気せず完結まで。

気分で書いてる&TRPGのシナリオとの並行執筆なので書く速度はクソ遅いです。2日に1話〜1週間に1話程度を目安に。原作はブレイクレコード含め称号全獲得する程度にはプレイ済み。現在は3DS破損の為更新停止中。2021の夏までには再開したい所存です。

参考書籍&サイト

女神異聞録デビルサバイバー公式マテリアルコレクション

デビルサバイバー2 公式設定資料集

DEVIL SURVIVOR THE ANIMATION
くじら座のプリクエル

デビルサバイバー2 攻略サイト

目次

if & イベント

(if-1) 妖精の灯火 | 1

DAY 1 憂鬱の日曜日

(1) 仕方ない | 8

(2) 悪魔召喚アプリ | 13

(3) 死に顔動画 | 19

(4) 浅草寺の封印 | 24

(5) 白娘子 | 29

(6) ドウベ | 34

(7) ジプス | 39

(8) 報告 | 44

(9) 一時の休息 | 48

(10) 憂鬱の日曜日 | 53

(11) 日曜日の終わり | 60

DAY 2 激動の月曜日

(12) 日が明けて | 63

(13) やる事と出来る事 | 69

(14) 崩壊した日常 | 75

(15) 悪魔の目撃情報 | 81

(16) SL広場にて | 86

(17) 和久井啓太と水神茂久 | 91

(18) ハッカー | 100

(19) 誤解 | 109

(20) 西の洗礼 | 114

| | | |
|-------------|-------------------|-----|
| (21) | 九条緋那子 | 120 |
| (22) | 淀川 | 125 |
| (23) | 悪魔時々瘴気 | 131 |
| (24) | 激闘、なにわ魂! | 137 |
| (25) | 未曾有の危機 | 145 |
| (26) | 動揺、不安、思案 | 153 |
| (27) | メラクの出現 | 162 |
| (28) | 月曜日の侵略者 | 170 |
| (29) | 激動の月曜日 | 175 |
| (30) | 敵対者の考察 | 179 |
| (31) | 東京への帰還 | 185 |
| DAY3 不穏の火曜日 | | |
| (32) | 不穏の火曜日 | 189 |
| (33) | いざ名古屋へ | 195 |
| (34) | 追撃奮闘GIRL&GUY① | 199 |
| (35) | 追撃奮闘GIRL&GUY② | 206 |
| (36) | 追撃奮闘GIRL&GUY③ | 213 |
| (37) | デラデカ | 219 |
| (38) | ハッカーの正体 | 224 |
| (39) | 菅野史 | 230 |
| (40) | メモリを求めて | 237 |
| (41) | ダンボール大作戦 | 242 |
| (42) | 秋江譲という男 | 247 |

if & イベント

(if—1) 妖精の灯火

10/31。ハロウィン。

人々は怪物等の仮装を身にまとい、子供達はお菓子を貰える楽しい1日。日本のイベント好きが高じた

この行事の影響は、響希達にも――

☆

平和を取り戻して初めてのハロウィン。久世響希はなにか出来ないかと頭を悩ませ考えていた。

そもそも悪魔の存在が身近な仲間達が生半可な仮装で驚くとは思えない。どうせやるならインパクトを――

……そうだ。

響希の視線の先には、携帯があつた。

☆

ジプス東京支局。

志島大地は響希を遊びに誘おうと、支局内を探し回っていた。

「おーい、響希……って居ないのか」
久世響希と書かれた部屋にも響希は見当たらない。

外出しているのかもしれない。

「響希くん、一緒に出掛け――
……って志島くん？」

新田維緒も響希の部屋に現れた。

「あれ？ 新田さんも響希を探しに？」

「うん、ちよつと仮装に

必要な物を一緒に見たいな―って。

でも……出掛けてるみたいだね」

「そうなんだよ……ったく、

アイツたまにふらっと

居なくなるんだよなあ……

いつも何してんだろ」

「ははは……分かるなあそれ。

響希君って愛想は悪くないんだけど、

何処か一線引いてる、

みたいな所あるよね」

「そうそう、コミュ障とも違って

マイペースと言うのかなんというか――」

響希の部屋の前で談笑をしていると、

重い足音が聴こえてくる。

足音はどんどん

こちらへ迫って来ている。

「なんだ……？　この足音？」

「なんだろうね……」

でもどこかで聴いたような……」

自然と携帯を手に取る2人。

足音の主が姿を現す。

白い毛並みの虎、

久世響希の相棒の神獣白虎だった。

「白虎……？　なんで響希はこいつを

出したまんまなんだ……？」

首を傾げるダイチ。

「よしよし……白虎くん、

響希くんがどこに行ったか分かる？」

イオが白虎を撫でながら尋ねる。

こう見えて白虎は高い知能を持つ。

響希の相棒の白虎ならば響希の行方を

知ってるという考えでの質問だったが――

――ガウ

白虎の視線は響希の部屋の中へ注がれている。

「へ？ でも中には誰も……」

「待って、志島君。志島君が来た時、

部屋の鍵って元から開いてた？」

「え？ うん……開いてたけど……」

「それがおかしいよ。

だって、響希君が部屋の中に居ないのに鍵は開いてるんだよ？

それって――」

「部屋の中に響希が居る……？」

ジプスの部屋の鍵は特殊で、

室内に人物がいる場合は鍵を解除し、

室内から人物が居ない場合は

自動で閉まる仕組みだ。

就寝時は照明と連動し、

部屋の光度を認識して

自動で鍵をかけるようになっている。

響希の部屋の照明は点いている。

つまり、部屋の主は

この部屋にいるという事だ。

――バレたか。

久世響希の声が、

部屋の中から発せられる。

しかし依然姿を見せない。

「おいおい響希、

もうドツキリは終わりだろ？

出てきて一緒に出かけようぜ」

「うん、久しぶりに

みんなで出かけよう?」

……残念だが、ドツキリは
まだ終わってないよ。

その沈んだ声と共に、

天井から南瓜頭で魔法使いのような
服を着た悪魔が現れる。

「ジャックランタン……!?!」

「なんで……!?!」

思わず悪魔を呼び出そうとする2人。

……ドツキリ大成功、だな

眼前のジャックランタンから、

響希の声が聴こえてくる。

「……うえええええええ!?!」

「響希くん……なの……?」

残念ながら。

ちよつと仮装ついでに

俺とジャックランタンを

悪魔合体
邪教の館したら、

元に戻らなくなっちゃった。

「お前……天然かよ……」

「ど、どうするの?」

「史さんは今名古屋だよ?」

ジプス名古屋支局に勤める、

各方面の研究部門に才能を発揮する、

天才科学者、菅野史。

彼女ならこの事態を

解決出来ると思われるが、

平和になった今、彼女は

名古屋支局に戻っている。

「あの人なあ……絶対史さんの方からは
来ないよなあ……あの性格だし……」

……ターミナルも今は停止してるし、再起動できるのもフミだけだしね。

瞬間移動装置ターミナル。

嘗て東京、名古屋、大阪の

ジプスに所属する仲間達を

頻繁に運んだジプスの最先端技術の塊。

これも騒動の終幕と同時に

機能を一時停止させている。

「いやどーすんのこれ、

手詰まりじゃん!」

……どうしよう?」

「無計画! 響希の馬鹿! アホ!」

「ははは……でも意外と時間が

経ったら戻るかもよ?」

まあ、戻る算段は付けてる。

イオ、テイターニアに常世の祈りか

アムリタ付けてるよね?

「え、うん……あつ、なるほど!」

うん、そういうこと。

「……えっ? えっ? どういう事?

お、俺にも教えてくれよ!」

「ふふふ……どうする?」

響希君、早速元に戻る?」

それでもいいけど……

マコトを驚かせてからかな。

「ふふっ、分かった。

じゃあ早速行こっか」

「あのお……?」

ヒビキサン? ニツタサン?

さすがのボクちゃんでも

傷つくと言うか……」

まあ、戻る時になれば分かるさ。

☆

「っ……ふう……」

椅子の背もたれに体重をかけ、目の周りを少し解す。

現在大阪本局に峰津院大和が居る為、迫真琴の仕事は書類仕事と支局の防衛指揮が主になる。

防衛は新田や志島と響希が居るからある程度の緊急事態には対応できるとして……

書類仕事ばかりは

彼等にはさせられない。

彼等はいくまで協力者。

ジプス本来の仕事は局員がやるべきだ。

「なんて、オトメやフミが

聞いたら笑われるな……」

自嘲気味に笑うと

軽くノック音がしたのに気付く。

「開いている、入っていいぞ」

数秒待っても扉は開かない。

局員の誰かの悪戯か……？

扉を開いて、

外を確認しても誰も居ない。

聞き間違えたか……？

書類仕事で少し疲れているようだ。

振り返り、机に戻ろうとすると、

眼窩に火を灯した南瓜頭が。

「っ！——ジャックランタン!？」

咄嗟に距離を取り、携帯を構える。

——お菓子くれなきや

イタズラするホ〜!

「何をふざけた事、を……?」

気付いたか。

流石に声を出すとバレるな。

「響希!?…なんだその姿は!」

仮装で邪教悪魔合体の館

使ったらこうなった。

「……私はお前が聡明なのか

馬鹿なのかたまに分からなくなる……

人間には戻れるのか?」

アムリタとか使えばね。

さつき確認済み。

「なるほど……で、私に用事か?」

いや、マコトの驚く顔が見たかったから

これからイオに戻してもらおうよ

「なっ……おまつ、何を言っ……!!!」

HAPPY HALLOWEEN、マコト。

DAY 1 憂鬱の日曜日

(1) 仕方ない

仕方ない。

18年生きてきて培った、諦観の言葉。

無意識に口に出ているらしい、俺の口癖。

ダイチは俺が「仕方ない」と言うと、

笑いながら「またそれかよ」と言う。

俺はそのやり取りが、嫌いじゃない。

☆

試験の終わりの日。

ダイチが忘れ物をして教室に戻ってしまった。

先に帰る訳にもいかず、仕方なく校門前で待っている。

外気に晒される顔に冷たい風が吹き付け、

たまらず制服の上から着ているフードを被る。

ウサミミの白を基調としたパーカー。

普段は服にあまり興味は無いが、

何故だかこれだけは気に入っている。

ダイチが来るまで音楽でも聴いていようと、

学生鞆の中を漁っていると、

すぐ後ろの道路で車のクラクションが鳴る。

校門前の空気が止まったような感覚。

自ずと音の方向を見ると、

黒い高級車が横断歩道の前で止まっていた。

信号は青。疑問が頭に芽ばえる前に、

ウチの制服を着た女子生徒が

お婆さんの手を引いて歩道へ入って来た。

高級車はその後直ぐに発車し、

程なく校門前にはいつもの雰囲気に戻って来た。

あの女子生徒は……確か

新田維緒、という名前だった気がする。
多分、隣のクラス。

ダイチがはしゃいでいたのを、
ぼんやりと思いつく。

少し気になり彼女が去った方を見ると
彼女はお婆さんと二言、

三言話してから別れたところだった。

「おーい！ ヒビキヤーい！」

ダイチの声だ。

やっと落し物を回収したのか。

息を切らしながら駆け寄る黄色いマフラーの男子生徒。

この男子生徒こそが生まれてからの付き合いである

志島大地だ。多少お調子者な面はあるが、

場の雰囲気盛り上げるムードメーカーだ。

遅かったな。

「いやあ、悪い悪い、

先生が持つててさあ……」

それなら仕方ない。帰るぞ。

「本当はどっか寄りたかったけど……」

俺のせいで待たせちやっしたしな。

大人しく帰るとしますか！」

いつも通り、帰路につく。

☆

そこから先の記憶が曖昧だ。

地下鉄で電車を待っていたら、

地震が起きて……後は覚えていない。

何か、着信があつたような……

思考が加速するにつれて、身体感覚もはっきりとしていく。

そこでようやく自分が目を閉じていた事に気づき、

目を開くが、開いた後もそこはまた暗闇だった。

更に意識が覚醒して行く。

何故俺は倒れている？

背中に伝わる重さはなんだ？

ダイチはどうなった？

何が起きて――

テイロリンテイロリン♪

暗闇に光が差した。

決してそれは後光や

太陽の光のような物ではない。

市販の携帯から放たれる、文明の光。

上の画面が横になるタイプの、青い携帯……俺の携帯だ。

藁にも縋るような気持ちで、俺は携帯に手を伸ばし、掴む。

「――安心致しました。」

貴方様はまだ、諦めていない。

『仕方ない』と諦観を口に出しながらも、

その内心は『生きる意思』に満ちている」

落ち着いた男の声。知らない声だ。

誰だ？ 通話でも起動してるのか？

「アナタの強い『生きる意思』」

確かに受け取ったよ☆」

今度は媚びるような高い、女性の声。

これもまた、知らない声だ。

さつきから、何を言っ……

口に出し終わる前に

視界が光に飲まれた――

☆

目が覚めると、身体を押さえ付けていた

瓦礫が取り払われていた。

起きあがり、周囲を見渡す。

――駅は酷い有様だった。

電車がホーム内に寄りかかるように倒れて来ており、

電車内にいる人や電車を待っていた人ですら、

血を流して倒れている。中には臓物が出ている人も。初めて見る死体に、吐き気がした。

地上には、辛うじて戻れるようだ。

階段はまだその役割を損なってはいなかった。

暫く崩れた瓦礫を退けたりしていると、

ダイチが居た。その近くには、新田維緒も。

2人とも大きな怪我は無さそうだが、

気を失って倒れている。

ここもいつ崩れるか分からない、

二人を起こして地上に戻りたいが……

ダイチが身じろぎをした。

「いつてて……なんで俺こんな所に倒れ、て……

——は？　なんだ、これ、人が、死んで……」

ダイチ。

「つてうおっ！　ヒビキ!？」

脅かすなよな………とかなんだよこれ！

起きていきなりこれとかワケわかんねえよ！」

「んんう………」

新田維緒も起きるようだ。

のろのろと体を起こし、辺りを見渡す。

「ここ、は………きやあー！」

やはりこの光景は刺激が強いのだろう。

目を覆ってしまった。

見ない方がいい。

それより、早く地上に行こう。

「お、おう………つてヒビキ、

お前この状況でよく落ち着いてられるな………」

そんな事は無い、と答えようと振り返ると。

怪物がいた。狗頭の獣人が、

新田維緒の背後で棍棒を振り上げて

今正に、振り下ろそうと——

新田維緒は気付いていない。
ダイチも、気付いていない。
やる事は決まっていた。

手を伸ばし、携帯を操作する。

「悪魔召喚アプリ、起動」

仕方ないとは、言えなかった。

(2) 悪魔召喚アプリ

「悪魔召喚アプリ、起動」

自分でも驚くくらい、

この『悪魔召喚アプリ』の使い方を理解していた。
今まで何故使えなかったのかと不思議に思う程に。

「ビビキお前、急に何を——」

俺が喚ぶのは——

「——来い、 神獣ビヤッコ」

携帯の画面を中心として、

幾何学的な青い方陣が展開される。

それは扉のようであり、

正しく扉と言わなければならない。

方陣から駆け出^現して来^たのは一体の白い虎。

『神獣』白虎は、こちらが命令を下すまでも無く

狗頭^{コポルト}の獣人の首目掛けて爪を振るう。

「きゃ——」

真正面から大きな白い虎が

駆けてくるといふ事態に新田維緒は頭を抱えて蹲るが、

白虎は新田維緒を飛び越し、狗頭^{コポルト}の獣人へ向け、

丸太のような剛腕を振るう。

——グギッ……!?

頭部目掛けて薙ぎ払われた白虎の腕に、

棍棒を振り上げたままのコポルトは反応出来ず、

そのまま肩から上が消失する。

呆気ない、と言わんばかりにフンスツと鼻息を吐いた白虎は、

己を召喚した存在へと、視線を向ける。

っ……!!

思わず、圧倒される。

その見定めるかのような青い瞳には確かに理性の光があった。

同時に、殺気を孕んだ威圧感も放たれている。

沈黙が場を支配した。

ヒビキは何も言わず、白い虎の瞳を見つめる。

新田維緒も、ダイチも動けない。

——ガウ。

白い虎が一声だけ鳴いて、

ヒビキもそれに頷きを返した。

再び青い方陣を展開し、

白虎はその中に帰っていく。

重圧から開放された2人が、同時に息を吐く。

「ななな、なんだよ今の……い！」

「白い虎が、いきなり……」

混乱している二人には悪いが、

二人にも同じような事をして貰わなければならない。

生き残る為には……これも直感的に理解していた。

二人とも、携帯はある？

「け、携帯？ あるけど……」

「わ、私もある……」

携帯のアプリを確認して欲しい。

見覚えのないアプリを見つけたら、起動してくれ。

「な、なんでいきなり……」

必要な事なんだ。

「わ、分かった……つと、

これか？ 起動——」

「私も見つけた、起動——」

二つの青い方陣が展開される。

現れたのは猿頭ハヌマウシの武人マウシと

雌牛メウシの角トを持った女性メ。

思った通りだ。

猿頭ハヌマウシの武人マウシはダイチの正面に立ち、

見極めるかのように厳しい視線を向けている。

「な、なんだよコイツ……」

白虎にも見られた動き、

多分あれは契約者として相応しいかを見られている。
ここで契約者らしい行動をしなければ……

—— 殺される。

新田さんは

「あ、あの……」

雌牛^ハの角^トを持った女性^ホは

新田維緒に向かつて微笑んでいる。

基準は分からないが、新田維緒は認められたらしい。

問題はダイチか。

猿頭^{ハヌ}の武人^{マイン}は、

明確な殺意をダイチへと向けていた。

不味いな。

「ひ、ヒビキ、俺どうすれば……」

戦うしかない。

「たっ、戦うたって

俺らは普通の高校生なんだぞ!?

こんな怪物に勝てるわけ——」

さつきまではそうだった。

今は違う。

「何を言って……」

新田さん。

「う、うん……お願い、ハトホル!」

雌牛^ハの角^トを持った女性^ホが頷く。

おもむろに両掌をハヌマーンに向け、

雷撃^{ジョ}を放つ。

——

直撃寸前で、ハヌマーンが飛び退く。

やはり容易くやられてはくれないか。

ハトホルとハヌマーンは本格的に戦闘を開始したが……

チラリと携帯を見る。ハトホルは物理攻撃に弱い。

見た所ハヌマーンは物理攻撃を主体としている。
1体1となれば、そう長くは続かないだろう。

携帯を操作する。

弄るのはアプリの個人設定。

コマンドをセット。

火炎、衝撃。

俺は戦闘をしているハトホルと

ハヌマーンの方向に背を向ける。

新田さん。

合図したらハトホルを下げてくれ。

考えがある。

「え、でも……」

頼む。初対面で言うことでも無いけど、信じてくれ。

「う、うん……分かった」

時を待つ。

ハトホルがようやく飛び回るように動くハヌマーンに、

電撃を浴びせた。モロに受けたハヌマーンが怯む。

新田さん、今だ。

「戻って！ ハトホル！」

ハトホルが完全に戻るのも確認せずに

俺は火炎を放つ。

特に踏ん張りもしていなかった

俺の身体は火炎の

反動で容易に吹き飛ばされ――

電撃に怯むハヌマーンへと突っ込む。

吹き飛ばす中無理やり身体の方を変え、

数回、衝撃をハヌマーンに放った。

ハヌマーンは回避しようとするが、

時はすでに遅く、直撃する。

ハヌマーンが膝を付く。

――どうにか上手くいったか。

ダイチ。

「な、なんだよう……」

トドメを。

「お、俺え!？」

そんなの、ヒビキが——」

早く。

ハヌマーンは未だ力尽きた訳では無い。

ここで俺が仕留めてもいいが、

それでハヌマーンがダイチを認めるかと言うと、微妙だ。

何せ対話ではなく戦闘を仕掛けたんだ、

武を示さなければ納得はしないだろう。

「わ、わかった……!」

掌をハヌマーンへと構える。

「わ、悪く思うなよ!」

衝撃は放たれ、

よろけながらも立ち上がろうとする

ハヌマーンに命中した。

ピロリン♪

ダイチの携帯から着信音。

「——御膳立てされていたのは

気に食わぬが、従ってやろう。

今後とも、宜しく……」

これ、ハヌマーンから……?」

多分、そうだろう。

「と、と言うかこれ!なんなんだよ!

意味分かんねえよ! 急に化け物と戦わされたり……」

……俺にも、分からない。

この場の誰にも、

このアプリが何なのかは分からないだろう。

俺達は生き残る為に、これを使ったに過ぎない。

俺達が出来るのはこれを悪用しない事くらいだ。

上へ上がろう。

そして、休める所を探して……

そこで、ゆっくり——

世界が、傾いて——

意識はそこで暗転した。

(3) 死に顔動画

目が覚める。知らない天井だった。妙に思い身体を無理矢理に動かして、携帯を探る。

——ある。

ここは何処だろう。最低限の寝具と家具。

如何にも寝る為に帰る部屋、と言った感じだ。

地下鉄で気を失ったのは覚えている。

ベットに寝かされていたが、

一体誰が——

足音。

咄嗟に、携帯を構える。

ノック音の数刻後、扉が開いた。

「起きたか……そう警戒しないでくれ。

君をここに運んだのは私だ」

女性が入ってきた。

黒い制服、自衛隊でも警察でも無い。

見覚えの無い制服だが……それすらどうでもいい。

目の前の女性に問う。

……新田維緒と志島大地は何処だ。

「新田維緒はこちらで保護しているが、

志島大地は逃走した。今も捜索中だ」

ダイチが逃走した……？

いや、それは置いておくとして、

新田さんに会わせろ。

「……悪いが、それは出来ない。

彼女は今強いショックを受けている。

死に顔動画を見て、な……。

新田維緒の携帯に届いたんだ、

圏外であるにも関わらず。

君の携帯にも、届いてはいないか？」

——死に顔動画……？

急いで受信フォルダを開く。着信2。

動画ファイル「死に顔動画：久世響希」。

動画ファイル「死に顔動画：志島大地」。

俺の方の動画を開く。

☆

地下鉄が映し出される。

電車を待つ人でごった返す駅。

その中には談笑する俺と、ダイチ。

隣の列には、新田さん。

——嫌な予感がする、

これ以上見てはいけない様な、

そんな不安定で、不定形で、不確かな、

確信のない予感が——

地面が揺れる。

転倒する人、線路内に落ちる人、

地面を踏み締めて何とか立っている人。

やがて、天井が崩れる。

音が鳴る、響く。

人々が聞き慣れた音が、

電車の到着を知らせる音が。

音が迫る。歪な走行音。

鉄と鉄が擦れ合う金属音が。

駅は恐怖で包まれた。

視点が切り替わる。迫る、電車の側面。

視点がまた変わる。俺と、ダイチが電車に押し潰され——

赤が広がる。

☆

心臓の音が嫌に響いていた。

煩くて、でも止められない。

生きている証明。動画とは真逆の結果。

思考は確信に至る。
巫山戯た動画だが、多分これは、未来予知に近い。
事実、駅は崩れていた。
それを俺達は、
何かによつて回避した？
何かとは、悪魔だろう。
動画の結果は変えられる。
悪魔の力を使って、生き残れる。
間を置かず、ダイチの方の動画を開く。

☆
寺のような場所。抉れた地面。
立ち並ぶ狗頭コボルトの獣人と
見知らぬ白い着物の悪魔。
そしてそれに対峙するダイチ。
白い着物の悪魔が氷結フッを放ち、
ダイチを庇つてハヌマーンが凍る。
ハヌマーンの氷像に
狗頭コボルトの獣人が群がる。
殴り、噛み付き、氷像を砕いていく。
氷像は徐々に氷片へと姿を変えていく。
白い着物の悪魔がダイチへ狙いを定め、
氷結フッ、氷結フッ、氷結フッ。
腰の抜けたダイチは
避ける様子も無く、やがて完全な氷像になり……
ハヌマーンと同じく、
群がる狗頭コボルトの獣人によつて砕かれた。

☆
時刻16:34。

——動画では夕陽はそこまで出ては居なかった。
まだ、間に合う。
新田さんに会わせてくれ、

話さなければいけないことがある。

「しかし……いや、分かった」

付いて来なさい。

それだけ言い残すと、制服の女性は部屋を出た。

大人しく着いていくと、連れてこられたのは

案外近く、二つ隣の部屋だった。

視線でここだ、と示す女性に目礼してからノックする。

——新田さん。

パタパタと扉越しに音がして、ドアが開く。

「えっと、ヒビキくん……でいいんだよね？ 名前」

そういえば名乗ってなかった。

そうだ、久世響希だ。

「どうした……の？ 身体は大丈夫？」

ダイチを、探しに行こうと思う。

身体はもう動けるようになった。

だからこそじつとしていく訳には行かない。

「動画、見たんだよね？ 志島くんが、その……」

ああ。

遮るように答える。

確実に、あの悪魔とは戦闘になる。

だから、無理はせずに待っていて欲しい。

「……ううん、行くよ。」

私がここで行かなくて、久世くんも死んじやったら、

私、絶対後悔する。少しでも力になれるなら、行くよ」

……なら、急ごう。

「うん……！」

全て、1人でやろうとしていた。

ダイチを救うのも、新田さんを守るのも。

だが、守ろうとしていた相手に

手伝うと言われて……

凝り固まった認識が

するりと解けていくような感覚がした。
時刻、16:40。
タイムリミットは迫る。

(4) 浅草寺の封印

問題はダイチが死ぬ場所が何処かだ。

それにすら間に合えば――

頭を悩ませていると、視界の端で制服の女性に同じような制服の男性が小声で話しかけているのが見えた。

耳を澄ませば会話も聞こえてくる。

「……分かった、そこは私が対処しよう」

「然しそうなるならこの守備が――」

「幸い、現在は局長が居る。それでは足りないか?」

「いえ、充分過ぎます」

「なら手早く済ませそう。車の手配を」

「了解しました」

男性が小走りで去っていく。

俺の見る視線に気づいたのか、

女性が胸に手を添え、真っ直ぐな視線を向けてくる。

「そう言えば名乗っていなかったな。」

迫真琴だ」

手を伸ばして握手を求めてくる。

断る理由もないので握手をすると、

迫は一瞬微笑み、真面目な顔に戻る。

「君達にも関係のある話だ。」

君が探している志島大地だが……

浅草寺付近で局員から目撃情報があった。

私も丁度浅草寺に用事がある……と言うより、

志島大地を殺害するのは恐らく

浅草寺にジプスが封印している悪魔だろう。

地震の影響で封印が緩んでしまっている

可能性がある。私がするのはその対処だ」

――貴女達は一体、何なんだ。」

「^J気象庁・^P指定地磁気^S調査部」

君達とは別の方法で悪魔を使役し、秩序を保とうとしている機密組織さ。

「それだけ言うとは迫は俺たちに付いて来るように伝えた。」

☆

迫真琴の運転で浅草寺へ向かう。

その道のりで見えた景色は、酷いものだった。

車は横転し、車体は燃え上がっている。

揺れる炎の中に、事故では到底着きようなない

鉤爪で引き裂かれたような破損痕があるのが見えた。

——地震だけじゃない。

「……その通りだ。」

君達は悪魔の使役を成功させたようだが、

失敗した者は悪魔に殺される。

召喚者を殺した悪魔は解放され、

欲望の限りを尽くす。このようにな」

——何なんだ、このアプリは。

「私達の調査でも正体が分かっている。」

前々から存在は確認して調査も行われたが

悪魔を召喚する機能は確認されなかった。

——今日まではな」

「あの、アプリなら製作者とかがいるんじゃないんですか？

その人に話を聞けば……」

「……ダメだったよ。どれだけ調査を進めても、

分からない事が分かるばかりだ」

……多分、制作したのは悪魔か、

悪魔に近い存在だろう。

そうなのだとしたら調べても無駄だ。

「その推論はジプス内でも出た。」

現在はアプリ管理者の捜索ではなく

悪魔災害の防止を中心に動いている」

悪魔へ対処出来るという事はジプスも悪魔を？

「そうだ。我々は局長の家系に伝わる

召喚陣を利用して、悪魔を使役している。

研究者の見立てでは、ニカイアの召喚方式と

ジプスの召喚方式はほぼ同一らしい」

内通者……いや、そもそも

召喚できる方式が1つしかない？

それともルーツが同じ……？

「内通者は……あまり考えたくないな、

局長もこの件に関してはあまり

多くを語りたがらないように見えた。

そう出られるとこちらとしても追求はし難くてな

——つと、そろそろ浅草寺に着くぞ」

思わず唾を飲み込む。

時刻は、16:55。

☆

志島大地は罪悪感に追われていた。

偶然出会った新田維緒と、

現在気絶中の親友で幼馴染みの久世響希と

はぐれてしまったのだ。

黒い制服の女性から携帯を見せるように

要求されて逃げ出したのはいいが、

ヒビキと一緒に担いで疲れ切った新田さんに

水を買ってこようと一時的にその場を離れたのがダメだった。

奇跡的に売れ残っていた水を持って元の場所に戻ると、

新田さんとヒビキの姿は無かった。

「多分、追ってきてきたんだらうなあ……」

心当たりが黒い制服の女性しか無い。

そもそも、気絶した男と女の子1人を

置いていくのが間違っていた。

心中で自分を責め続ける。

街中を探し回っても見つからない。

本拠地に連れ去られたか、殺されたか。

嫌な想像ばかりが浮かぶ。

荒れ果てた街並みを歩く足取りも遅い。

「俺が……何をしたって言うんだよ、カミサマ……」

地震に見舞われ、怪物と戦い、

謎の女性に追われ、仲間とはぐれる。

踏んだり蹴ったりにも程があつた。

「クソッ！」

苛立ちが募り、石柱に拳を叩きつける。

無力だった。響に頼りっぱなしの現状が悔しかった。

ハヌマーンという力を手に入れても、

俺は新田さんや響希を――

ふと、拳を押し付けていた

石柱の感触が消える。消失したのでは無く、

ゆつくりと沈むように石柱が下に落ちる。

「へ？」

石柱は台座ごと地面へ引っ込み、

代わりに黄金色に近い、

奇妙な機械のようなものが飛び出してきた。

「うわぁ！　なんだよこれ……時計、みたいな……」

そう口に出して漸く気づく。

吐き出す息が、白い。

温度が急激に下がっている。

地面が揺れ、黄金色の機械から

立ち上るような禍々しい光が放たれる。

光は参道をなぞるように移動し、雷門の提灯にぶつかる。

「提灯が……いこ、今度はなんだよ！」

光が直撃した提灯は爆発し……

爆風や爆煙の代わりに禍々しい赤黒い雷が放たれ、

自体を認識する前に、浅草寺に妖艶な女性の声が響く。

『フッフ……ようやく出られたわ。

ああ、長かった。有難う、坊や。

ワタシはハクジヨウシ。貴方が封印をといたのね？

お礼に——殺してやろうか』

悪魔白娘子が解き放たれた。

(5) 白娘子

殺害宣言と共に鋭利に尖った氷の杭が迫る。

「うわああー！」

咄嗟に避けたはいいが、尻もちを着いてしまう。

(どこだ……どこだ携帯……！)

ポケットや鞆の中を探りながら

携帯を探す。この状況を打開するのは、

ハヌマーン悪魔しか無い。

『何をしている？』

「っ……！」

地面を転がりながら放たれた氷結ツラツラを躲す。

「——あつた……！ 頼む……来てくれハヌマーン！」

携帯を見つけ、名を呼ぶと青く光る方陣が展開される。

——契約に従い、主の元へ馳せ参じた。

主が敵は即ち我が敵、『顎骨ハヌを持つもの』が

御相手をしよう。

『召喚者……！ 小癩な人間風情が……！』

拳と氷塊が激突する。

☆

ハヌマーンとハクジヨウシが

戦っている中、俺は見ているしか無かった。

単なる学生でしかない俺が、あんな化け物の戦いに

混ざれるわけ無いだろ……！

「——やあ、少年。ひよつとしてあそこで

戦ってるどつちか君のお仲間？」

声を掛けられる。

白と黒の縦縞模様のスーツを着た男だ。

胡散臭い笑みを浮かべている。

「……あの猿頭が俺の悪魔だよ」

「なある程ねえ……ところで、キミは戦わないのかい？」

「俺が……？俺はつい昨日まで学生だったんだぞ!!
それが急に……た、戦えなんて……」

無理に決まってるだろ!」

スーツの男は薄っぺらい笑みを浮かべながら、
共感するように頷く。

「うんうん、君の気持ちも分かるよ。

でも、今君は普通の学生じゃない。

普通の学生で居たいなら、

今すぐその携帯を壊した方がいいよ。

それは『普通の学生』には過ぎた力だ。

それを、悪魔を持っている以上、

君はもう普通では無いんだよ」

「そう……してえよ！ けど……アイツが、響希が！

俺と同じ立場なのに頑張ってるんだ……!」

今、これを捨てたら……何より響希への裏切りだ……!」

アイツだけにやらせる訳には行かないんだ……!」

思わず携帯を握り締める。

男はより一層笑みを深める。

「何だ、キミ……戦う意思は

あるんじゃないか。なら、あと一歩だ。

君自身が戦わなくていい、悪魔の手助けから始めよう。

多分、そろそろ君の悪魔は——」

ぬう……!」

ハヌマーンの右腕が氷に包まれ、もげて落ちる。

『漸く腕一つ……手こずらせた罪は重いぞ、猿風情が……!』

「ハヌマーンっ……!」

ハクジョウシは所々傷は見えるが

そこまで大きなダメージは見られない。

状況は明らかにハクジョウシが有利だ。

「——カマプアア!」

スーツの男が叫び、

——脇がガラ空きだぜ、お嬢さん！
赤い豚の姿をした悪魔が、
ハクジヨウシの脇腹に見かけに反した
とてつもなく重い一撃を放つ。

『ぐっ……邪魔しおって……』

——猿の御仁、無事かい？

——なんの……！ まだまだ……！

痛みに喘いでこそいるが、

ハヌマーンの瞳には未だ戦意が充ちている。

——強がりはいけねえな？

それ、単体全回復ディアラハンだ！

カンプアアよりハヌマーンに向けられた光が、
もげ落ちた右腕が急速に再生していく。

——猿の御仁にはくたばって

貰われちゃ困るんでな……オレからのサービスだ。

再生した右腕の調子確かめるように

ハヌマーンは腕の握り開きを繰り返す。

——有難い……！

『何を……ぐちやぐちやとー！』

ハクジヨウシが苛立ちと共に

広範囲氷結を放つと、

2体の悪魔は示し合わせたかのように同時に飛び退く。

「な、あ、アンタも悪魔使い……!?!」

「あれ？ 言ってなかったっけ？」

まあいいや。取り敢えずここ、片付けちゃおっか」

あくまで飄々とした態度を保つスーツの男は

携帯を片手に衝撃を放ち、

ハクジヨウシの逃げ道を限定する。

志島大地は立ち上がり、ハクジヨウシを見据える。

「——アキ火炎！」

『なっ——』

直撃。

戦力として見られていなかった故の、
弱者の特権。
不意打ちの一撃。

「よっしゃ……い。やるぞ、ハヌマーン！ 会心の予言！」

——承知！

ハヌマーンがダイチに向け強化を施し、
ダイチはハクジヨウシへと駆ける。

ハクジヨウシは火炎を受け怯んでいる。

畳み掛けるならここだ。

「うおおおおお!!」

捨て身の一撃。

顔面に打ち付けられた拳は、戦闘で弱った

ハクジヨウシを消滅させるに十分な威力を持っていた。

☆

「はあっ……はあっ……」

——どうだ！ 今回は響希の力無しだぞ、ハヌマーン！
人差し指をハヌマーンへ指す。

ハヌマーンは一瞬呆け、顔に手を当てて笑い始める。

——くっ……はははっ！

そんな事も言つたな、そう言えば……

良いだろう、主が武功は確とこの目に焼き付けた。

護られる立場に甘えず、己の意思で敵を粉碎する……

認めるには十分過ぎるという物だ。

これより我が忠誠は主に捧がれようとも。

改めて、今後とも宜しく。

「お……おう……？ よ、よろしくっ！」

一礼と共にハヌマーンが消える。

——クク……猿の御仁、

無骨な武人かと思つたら……

随分機嫌よかつたなア……んじや、

俺もそろそろ休むぜ。

「うん、お疲れチャン、お陰で助かったよ」

気障に片手を振りながらカマップアアが消える。

「さて、怪我は無さそうだね」

「あ、ああ……つてか、アンタ何物だよ……？」

「ん？ 俺は秋江譲……ジョーつて

呼ばれてるからそう呼んでよ。

境遇は多分君と同じだと思うよ？」

それに——と続けようとして、口を閉じる。

「それに、なんだよ？」

「んーん、やっぱなんでもないや」

とおどけたように言う。

「調子狂うなあ……でも、助かったよ」

「いやいや、人として当然さ。」

それより、他の悪魔が来る前にここから離れよう」

「あ、そ、そうだな……」

響希と新田さんも探さないと……」

「おや、お仲間がいるのかい？」

「ああ、2人とも悪魔使いだよ……」

2人とも何処に——」

爆発音。

「——まさか」

「——そのまさかかもねえ……急ごう」

2人は浅草寺を後にした。

(6) ドウベ

浅草寺は目前という地点まで
響希達は車でやって来た。

「止めている時間も惜しい、君達は先に降りて浅草寺へ！
私は適当な所へ車を停めてくる！」

「わ、分かりましたー！」

早速浅草寺へ向かおうと駆け出すと
背後から爆発音が響く。

「え——」

なっ——

振り返り、それを見る。

一目見て人間では無いと悟る。

同時に、悪魔でも無いと察する。

それ程までに、それは異色な姿をしていた。

ふざけた配色の逆三角錐。

そこから完全に分離して浮かぶ毒々しいピンク色の海綿体。
心做しか海綿体が少しずつ膨らんでいるように見える。

更に視線を下げると俺達が乗ってきた

車が横転して黒煙を上げている。

恐らくアレの攻撃を受けたのだろう。

ふと思いつき、携帯を奴に翳す。

——『貪狼星 ドウベ』

と映った表示を見て、冷や汗が垂れる。

……アレは俺が抑える。

新田さんはマコトを……！

「わ、分かった！ 気をつけてね！」

逃げるよりもまず、マコトが危険だ。

車の横転程度で死んではないと

思いたいが、生きているとしたら

現在1番ドウベに近いのはマコトだ。

☆

海綿体の膨張は既に限界近くまで来ていた。

白虎と俺がボロボロなのに対し、

ドウベには傷一つ無い。

此方の攻撃は全て無効化され、

一方的に俺達がドウベの攻撃を受けている。

上がる息を無理矢理整えて、

その場から飛び退く。

数瞬後、これまで立っていた場所に

炎の柱が立つ。直撃は避けたが、

流石に熱気までは防げない。

離れても伝わる熱気に、

熱さとは別の汗が流れる。

——当たったら不味いな……

正直、これ以上は厳し——

「うお〜い！ 響希やーい！」

思考が遮られ、

聞き覚えのある声が耳に入る。

浅草寺の方向から手を振りながら

ダイチと見覚えのない

縦縞柄のスーツの男が来ていた。

ダイチ！ 無事だったか……！！

「おう！ 危なかったけど、

このジョーさんが助けてくれてな……

って今どんな状況？」

ダイチは呑気にそんなことを聞いてくる。

「いやあダイチくん、

お喋りしてるヒマは無さそうだよ

——そらっ！」

ジョーと呼ばれた男が突然ダイチの服を掴み、

その場から飛び退くと、

やはり先程まで立っていた場所に炎の柱が立つ。

「うおあつ?! つつつ……び、ビビったあ……」

なんか一言言ってくれよ!」

突然服を掴まれて引つ張られた

ダイチが抗議するも、

ジョーと言うらしい男は

薄い笑みを浮かべて受け流している。

「ははは、メングメング……」

でもそう言つてられないよねえ……

全属性無効だなんて……ズルでしょ」

ジョーは口元こそ笑っているが

目は冷静なまま、携帯を翳しながらドウベを見据えていた。

倒す必要は無い、今新田さん……

仲間が味方の治療をしてくれてる。

それが終わるまでは……

「味方つてあそこに寝てるあの黒い制服の……!?!」

大丈夫なのかよ!?!」

事情は聞いた。少なくとも、

俺達より悪魔への対処は慣れてる。

「へえ……宛ら秘密組織つて感じで

カツコいいねっ、と……」

僕も厄介になっちやおっかな?」

ジョーが炎を躲しながら答える。

「響希くん!」

新田さんの声。

「すまない……失態を晒した……!」

マコトの声。

同時に。

ドウベが奇怪な音を上げる。

いち早く動いたのはマコトと俺だった。

マコトは自らの悪魔を召喚し、

俺は近くに居たダイチとジヨーより
前面に出て携帯を構え——爆発に飲まれた。

(7) ジプス

爆煙が風によって流れる。

「これは……」

爆風や爆煙は前面に出た俺の少し前を避けて流れていく。

——間に合ったか。

☆

響希達の場所から少し離れた

車の残骸近く……ドウベに近い地点。

地面は亀裂や砕けた場所が

大部分に及び、焼け焦げている場所もある。

新田維緒が迫真琴を介抱した付近も

例外では無かったが——

イオとマコトを囲うように、

以前と変わりなく亀裂も無い地面が保たれている。

マコトの傍らには旗を持った金髪の乙女が立っていた。

「助かったよ、ジャンヌダルク」

——危ない所でした。

ご無事で何よりです、マコト。

英雄、ジャンヌダルク。

オルレ안의聖女によって

齎された^{英雄の印}守護の力が

ドウベの爆破から2人を守ったのだ。

「いや、それより——」

響希達の方は無事だろうかと

視線を向けると、無傷の響希達が見える。

(無傷……? どうやって

あの爆発を耐えた……?)

——アレは……

護りの盾、のようです。

ジャンヌダルクが答える。

「あの瞬時に……ただの召喚アプリを
手に入れた子供と侮っていたが……」

——マコト！ 退却する！

原因は分からないがドウベは行動を停止した！今のうちに！
響希の声。

「了解した、直ちに全員東京支局へ帰還する！ 付いて来い！」
車は残念だが、あそこまで壊れてしまった以上
ここに置いていくしかない。

響希達は急いでその場を後にした。

☆

国会議事堂。

その裏口から建物内に入り、
エレベーターに乗り下へ降りる。

「にしても、国会議事堂が秘密組織の本拠地だなんて
全然知らなかったなあ……」

「当然だろう、我々はそもそもそれが

気象庁に所属していると言うように処理されている。

ジプスの存在は日本という国が秘匿しているのだから

……一般人々が知る由もない」

しきりにエレベーターの中を

キョロキョロと見て驚くジョーに、

威張るでも無くただ当然の事実を告げるように

マコトはそう語る。

「な、なあ……アンタの組織

本当に大丈夫なのか……？」

俺たち何よりアンタに追いかけられたから

不信感持つてるんだけど……」

「……すまない、言い訳臭くなるが

今現在、アプリの悪用者の報告が後を絶たん。

だから君達も悪用してないか確かめようとしたのだ……」

それなら仕方ない。

「ええ!? でもよ……」

「まあ、パツと見でコイツが悪魔召喚者だ!

なんて分からないからね、許してあげなよ、ダイチくん」
「と、言うかお前は何なんだ……」

久世の話には出てこなかったように思うが……」

怪訝な目でマコトがジョーを見る。

「俺? 俺はね、ダイチくんの

死に顔動画を見たんだ。

それで急いで駆けつけたってワケ」

「は……? 俺の……死に……?」

……ダイチ、ジョーとの面識は?

「え? いや、無い……と思う。」

というか会ってたら覚えてるだろ、こんな適当な人!」

「ヒドいなあ……俺の方も

ダイチくと知り合いではないよ、

会ったことも無い」

「つて言うか……」

死に顔動画って何だよ!」

——これだ。

ダイチにダイチの死に顔動画を

写した携帯を見せる。

「響希くん、それは……!」

——実物を見せた方が早い。

それに、これからダイチに届く事もあるかもしれない。

「あ……そう、だね……」

ジョーは置いておくとして、

新田さん、ダイチ、俺のアプリ

取得時期や状況は同じだ。

俺や新田さんに動画が届くという事は

ダイチにも届く事が有り得る……

「なんだよ、これ……俺が……」

「……それは未来だと俺は思うね。」

……でも確定はしてない未来だとは思う。

だから僕が来て、ダイチくんが助かった。

死に顔動画の未来は多分、変えられるんだよ」

「そうだな……」

この動画は俺達の生命線になる。

携帯の充電は成る可く切らさないようにしよう。

マコトへ視線を向けると、

意図を理解してくれたのか一つ頷く。

「現在東京以外の都市でも

地震の影響で停電が続いている。

だがジプスの各支局では発電施設が設置されている。

携帯の充電程度なら出来るだろう」

「お、おお……」

「でも、なんか申し訳ないな。

他の人は停電で私達だけ……」

申し訳なさげな新田さんに、

ジョーが薄ら笑いを浮かべながら返す。

「んー、まあジプスもタダで

電気使わせてくれるわけじゃないと思うよ？」

「……その通りだ。」

ジプスの各支局長の上に立つ

峰津院大和局長がそれを許さないだろう。

あの人はその……実力主義でな」

……この状況だ、

俺達は戦力として見られるだろう。

エレベーターが到着し、扉が開く。

「……よく決断して選んでくれ。」

ここから先は機密機関……

足を踏み入れたら一般人には戻れないと思ってきていい。

君達は、我々の保護下に入り、ジプスに所属する事を望むか？
決断の時が迫る。」

(8) 報告

「私は……入り、ます……！」
「ここまま何もしないで、じっとしてるなんて、
ダメだと思うから……！」

新田維緒が意志を固め。

「お、俺も……！」

折角ハヌマーンに認められたんだ……！
だったら、この力を人助けに使いたい……！」

志島大地が勇気を出し。

「僕も入るよ。機密機関に入れるなんて
二度と無いだろうし、面白そうだね」

秋江譲が飄々と宣う。

そして。

「……君はどうする？ 久世響希」
入るよ。

久世響希が選択する。

☆

ジプス東京支局の中を歩き、
裝飾が施された木製の扉の前に到着する。

「……ここが局長のお部屋だ。」

くれぐれも失礼のないように」

「だってさ、ダイチくん」

「あれ絶対ジョーさんに言ってるって……」

「あはは……」

マコトがノックをする。

「峰津院局長、お話が」

『——報告は聞いている、入れ』

若い男の声の中から聞こえる。

マコトが扉を開き、中に入る。

「ふむ……報告より、1人多いようだが」

「はっ、それを含めてお話をと」

「いいだろう……話したまえ」

堂々とした男が居た。

歳は同じか少し下だが、雰囲気は帝王の如く鋭い。

白髪で黒い軍服のような制服の男

——峰津院大和がそこには居た。

「まず当初の報告にあった

悪魔召喚アプリ使用者への協力要請ですが……

志島大地、新田維緒、久世響希と、志島大地の

救出に協力した秋江譲を加えた

4名との協力関係を結びました」

「では『死に顔動画』は」

「実際に確認した訳では無いですが

浅草寺がK地点として登録されているのは

局長もご存知の通りです。

そしてその悪魔が白娘子である事も」

「信憑性は高い、か……」

「はい」

「いいだろう、

4名のジプス所属を許可する。

次だが——貪狼星^{ドゥ}と接敵したらしいな」

「はい……久世、ドウベのデータを」

どうぞ

携帯を操作してドウベのデータを表示させ、

峰津院大和に渡す。

「ほう……悪魔召喚アプリ『N i c a e a』か……こんな機能もあるとはな」

携帯の画面に目を移すと、

峰津院大和の表情が固くなる。

「成程……よく帰還したと言っておこう」
手を挙げる。

……発言しても？

「ほう、許可しよう」

ドウベは数段階に及ぶ

上部に浮かぶ海綿体の膨張状態がある。

その間はそのこのデータに

ある通りの攻撃しかしてこない。

問題は膨張が最大になった時。

膨張が最大になるとドウベは広範囲に及ぶ爆発をする。

この爆発は恐らく、悪魔でも一撃で死ぬ。

「――続ける」

爆発した後は暫く行動を止める。

俺達はその間に退却したが、

多分、そこで防御性能に

何らかの隙が発生すると推測する。

「……根拠は？」

海綿体だ。ドウベは攻撃を

海綿体で受けるように行動する。

事実、下部の逆三角錐には

1度も攻撃が当たっていなかった。

正しくは、そうなるように動かれた、と言うべきだ。

だから奴を倒すなら、爆発の後の隙を狙うべき

……と、思います。

峰津院大和の肩が震えていた。

顔も伏せ、表情も伺い知れない。

怒らせたか、と冷や汗を流すと

「ククク……ハハハ！ 迫、面白い人材を拾ったな」

「は、はあ……」

堅物のようだった峰津院大和が声を出して笑う。

「久世響希と言ったか。」

貴様の案だ、当然お前がドウベと対峙して

戦う覚悟があるのだろうか？」

勿論、そのつもりで提案した……しました。

「ああ、敬語はいい。」

どちらにせよこの騒動が終わった後は
お前達は一般人として普通の生活に戻る。

言わば民間協力者だ。普通の局員なら兎も角、
敬意を持つことを強制はしない。

後ろの3人も同様だ」

「あら、そう？ 敬語とか

ちよつと怪しかったから助かるなあ」

「いやいやいや……」

ジヨーさんはいつも通り過ぎでしょ……」

「えと……ありがとうございます……？」

「それで、報告は終わりか？」

「はい、以上で全てです」

「なら下がっていい、」

ドウベへの対処は追って知らせる」

「はっ……戻るぞ」

響希達は局長室を後にした。

(9) 一時の休息

局長室を出た。

「つつつはあああ……！き、緊張したあ……！」

何なんだアイツ……」

「その……なんて言うか、私たちと同年代くらいなのに、
凄い威厳っていうか……風格があったね」

「そうだねえ……うちの社長よりおっかなかつたよ」

「まあそう言うな。峰津院局長は

若年ながら優秀な人物と有名なんだ。

つと……私も仕事がある。君達の部屋に案内しよう。

君達はここに泊まる事になるが……構わないか？」

「んく、どうせ電車も動いてないし、

悪魔だらけの所を歩いて帰るのもねえ……

僕はお世話になっちゃおっかな？」

「そう……だよな……」

電車動いてないんだった……」

「悪魔も居るし……危ないよね……」

「どうする響希？」

俺とダイチは家も近い。

だがこの状況だ、家に帰っている暇はないだろう。

家もだが親も安全か気になる。

ジプスでそこら辺は調べられないのか？

「……っ！」

「あ……！」

新田さんと響希が息を呑む。

「……可能だ」

ならここに泊まろう。

「浅草寺から国会議事堂まで

ぶつ通しで歩いて来たからねえ……」

「そうだな……疲れたよ……」

「そうだ、ね……」

皆1回部屋で休もうか。
連絡が来たら集合するって事で。
全員が頷く。

「……では、案内しよう」

☆

時刻19:00。

ベットに倒れ込む。

……疲れた。

体力的にも、精神的にも。

……色々な事があった。

何故、俺がこんな事に。

そう思わなくもない。だがやるしかない。

俺が世界を救う……なんて言ったら自惚れだが、
出来ることはあるはずだ。

携帯を見る。

悪魔召喚アプリ。

峰津院大和は『N i c a e a』と呼んだ。

携帯の充電ケーブルを

鞆から取り出し、充電する。

生命線となる大切な物。

どうせ圏外だ、悪魔召喚以外に

使う事もないだろう。

少しでも休んだ方がいい、

ドウベとの決戦は……確証は無いが、多分今日だ。

今日でなくとも、いつ来るのかわからないのは事実……

ならば休める時に休んだ方がいいだろう。

そう考えて瞳を閉じ、微睡みの中に身を投じた。

☆

「みんな、無事かなあ……」

不安が胸に募る。

外にいた時は気にする余裕も無かったが、

こんな状況なのは響希達だけではなく東京、

下手すれば日本中の人間が同じ目に遭っているのだ。

「気軽になんで俺だけ、って言ってたけど……」

こんな様子じゃ、俺だけじゃないんだよなあ……」

溜息が口から溢れ出る。

気を引き締めなければいけない。

幸い、心強い相棒も出来た。

「頼りにしてるぞ、ハヌマーン」

☆

「お母さん……お父さん……」

涙が流れる。

そんな事してる場合じゃないのに。

戦うって、決めたばかりなのに。

抑えられない不安と、

今すぐ探しに行きたいという衝動。

それを抑えるのがとても大変だった。

「どうか……無事でいて」

少女の願いは果たして。

☆

「……家族、ねえ」

少年達の前で見せていた

笑顔の仮面を削ぎ落とす。

「名古屋は、どうなってるかな」

窓の外を眺める。外は既に真っ暗で、

どの方向が名古屋なのかは知る由もないが、

それでも外を見ずには居られなかった。

圏外の状態では、

病室の彼女に連絡を取ることすら出来ない。

自分の無力さに思わず、壁に拳を叩き付ける。

「……僕らしくない」

そうだ。

お前はもつと笑う男だろう。

お前はもつと適当な男だろう。

彼女が教えてくれた通りに。

失うのが怖くて、彼女から、

名古屋から逃げた僕なりの償い。

男は笑顔の仮面を付ける。

☆

パソコンとの睨み合いを終え、自販機でコーヒーを買う。

時刻は20:00の少し前。もう少しで彼らを起こす時間だ。

「『N i c a e a』の悪魔召喚者、か……」

ジプスの召喚システムはN i c a e aと殆ど変わりはない。

が、決定的に変わるのが適性だ。

N i c a e aが召喚適正を全く無視して

悪魔を召喚できるのに対し、

ジプスの召喚システムでは召喚適正が最重要視される。

召喚適正とはつまり悪魔を召喚するのに適しているか。

これを満たせなければ召喚したそばから悪魔に反逆され、殺される。

一定の値であればいいという訳ではなく、

適性が上であればあるほど、強力な悪魔を従えられる。

悪魔に好かれる、とでも表現しようか。

事実、高い召喚適性を持つ者が

討伐対象の悪魔を仲間にしたという報告は幾つか存在する。

——その悪魔を使ってジプスに牙を剥いた者が、

局長手ずから殺された事件は、今でも局員の中で

密やかに語り継がれている。

彼らもそうならないといいが。

缶をゴミ箱に捨て、

彼らの部屋へ向かう。

☆

私は憂う。

きみたち人間の行く末を、

ポラリス北極星の選択を。

私は憂う。

輝く者の誕生を、

その行く道の先にある苦難を。

私は憂う。

(10) 憂鬱の日曜日

警報音が鳴り渡る。

……来たか。

携帯を充電器から外し、

身支度を終えて外へ出ると、

同じく部屋から出たばかりの新田維緒が居た。

「あ——おはよう、久世くん」

おはよう。

「その、いよいよ……だね」

力強く頷き、ダイチの部屋をノックする。

『お、起きてるって！ もうちよい待ってて！』

隣では新田さんがジヨアの部屋をノックしていた。

「あの……ジヨアさん？ 警報が……」

『え、もう来たの？ もう少し布団を堪能させて……って言ってる

暇はないね。準備は終わってるよ』

驚いたな、遅れると思ってたのに

『その声は響希くんかい？ ま、いつもだったらそうだね、でも今は

ほら……「違う」だろ？』

……そうだったな

扉が開き、ジヨアが答える

「そうなんだよ。で、ドンケツはダイチくんかな？」

『ちよ、ちよと待って……』

勢いよくダイチの部屋の扉が開く。

慌てて服を着たのか、奇妙な着方になっているが

本人は気にしていないようだ。

「よし……準備OKだ！」

「全員、準備は終わっているようだな」

カツカツと靴音を鳴らし、マコトが歩いてくる。

「君達も察している通り、ドウベを観測した。

場所は新橋、SL広場だ」

☆

新橋へ向かう車内。会話は殆ど無い。

あの気楽そうなジョーでさえも、

一言も話さず口を噤んでいる。

「……現在、ジプス局員がドウベを抑えているが、
どれ程まで持つかは分からない。

——つと、そろそろだ」

車が停車する。

『！？』
『！！』

人々の悲鳴。

そして肉の焦げる臭い。

「酷いっ……っ！」

「うっ……っ！」

吐く。

「ぐっ……お、おう！」

これくらい……なんてこと……っ！」

……急ごう、ここで躊躇ってても

被害が増えるだけだ

「そうだね……」

歩を進める。

☆

「クソっ！ クソっ！」

「協力者はまだか……っ！？」

このままでは——ぐあああ！！」

炎の柱が局員に直撃する。

局員だったものは燃え盛りながら炭になり、崩れる。

風は無情にも黒い炭の塊を塵に変えてしまう。

「あ、ああ……も、もうダメだ……っ！」

もう1人の局員が頭を抱えて蹲る。

ドウベが近付き、炎を——

「——来いッ！ ハヌマーン！」

召喚されたハヌマーンはドウベに向かって駆け出し、拳を振り上げて思いつ切り殴り付ける。

下の逆三角錐に向かって放たれた拳は、惜しくも寸前のところでドウベが身体の向きを巧妙に操作し、海綿体によつて受け止められる。

「くそう……やっぱりダメかあ……！」
下部分を狙いながら爆発を待とう。

新田さんは治療を。

「うん……！ やるよ、ハトホル！」

ジヨートとダイチは俺と遊撃しながら、狙いを新田さんに向けないように。

「おう！」

「おーけーおーけー」

マコトは新田さんに付いていてくれ、治療中はどうしても無防備になる。

「心得た……！」

全員、生き残るぞ。

☆

「この人はもう……次、見ます」

「そうか……」

一人一人、しっかりと見ていく。

「……新田、辛かったら見るのは代わるぞ」

「いえ……！ 逃げていたらダメ、ですから。」

この人はまだ息が……！ ハトホル、お願い！
地道な治療が続く。

☆

——覚悟の挑発！

ドウベの注意をこちらに引き付け、飛び退く。

「今度はこつちだ化け物！」

ハヌマーンの捨て身の一撃。

これもまた海綿体で受けられる。

「もうちよつとで爆発しそうなんだけど……そらー！」

ジョーが衝撃ザンを放つ。

またもや海綿体に当たる。

ドウベの逆三角錐の回転速度が上がる。

そろそろ来るな……

新田さんから離れるように誘導しよう。

「おう……！」

「お〜！」

じりじりと少しずつ移動していると、

突然ドウベの動きが切り替り、

一直線に新田さんの居る方向へ向かっていく。

なっ……！

「なんで……!?!」

「これはちよつと不味いね……！」

マコト、新田さん！　そこから逃げろ……！

☆

「ツ!?!」

寒気を感じ、その場から飛びずさる。

直後に炎の球がすぐ近くに着弾し、

局員だったものの数体に引火する。

原因はなにか、周囲を見渡すうちに気付く。

浮遊しながら接近してくるドウベの姿に。

「馬鹿な……！」

久世達が抑えているはずでは……!?!」

もしやドウベに殺されて……

そんな考えは遠くから聴こえる

久世自身の声によって打ち砕かれる。

そこから逃げろ……！

久世響希の声。

ドウベの背後から走って

追いかけてきているようだった。

直ぐに新田に声をかける。

「新田！ 今すぐここから離れるぞ！」

「待ってください……！ 後少しで……！」

「くっ……！ ジャンヌダルク！」

——心得ています。『英雄の印』！

ジャンヌダルクが手をかざすと、

マコトとイオを包むように

緑の光が現れる。

——大した時間は稼げないでしょうが……

これくらいはさせてください……それでは。

ジャンヌダルクが抜剣し、

ドウベへ向かって駆ける。

途中、ドウベが炎の柱を放ち妨害するが、

その全てを軽やかに躲し、

ジャンヌダルクはドウベに到達した。

——これが私の、全身全霊の一撃です！

使用者の生命を燃料代償とする、最期の一撃。

ジャンヌダルクの生命の炎は、

彼女の髪と同じく綺麗な金髪をしていた。

最期の一撃を海綿体で受けたドウベが初めて、

一撃の重さ故か、身体を仰け反らせる。

——ご武運を、マコト。

ジャンヌダルクはその一言を残し、

金の塵となって消えた。

☆

状況が悪かった。全員が焦っていた。

ドウベが行動を停止したのは、

ジャンヌダルクの一撃のおかげだと思っていた。

それは違かった。

ドウベが急に動いたのは、

ドウベが急に停止したのは、

『追い掛けてくる俺達と、離れた新田さん達を

確実に爆発の範囲に入れるため』

停止したドウベから光が溢れ――

う……おおッ！

ダイチとジョーを力任せに投げ飛ばし、

マコトと新田さんを白虎に任せろ。

――爆炎が広がり、爆音がその場に響く。

☆

「うっ……そだろ……」

死の恐怖で身体が固まっていた

俺とジョーさんを助けて、

響希が爆発に巻き込まれた。

「なんで……なんでだよ……！」

なんで俺なんか助けて……！！

自分を蔑ろにしてんじゃねえよ！

クソッ……バカ響希い――！！！！

「まさか、助けられるとはね……」

爆煙は、何も答えない。

☆

「そ、んな……響希くん！！！」

「くっ……久世……！ 動けるものは

総員ドウベに総攻撃開始！

久世響希が作った隙を無駄にするな！」

「「おおー！」」

新田維緒に回復されたジプス局員が

揃って携帯端末を構える。

「ま、待って……！ まだ、響希くんが……」

「新田……ッ！ 久世の生存は、絶望的だ……！」

「そんな……なんで……」

膝から崩れ落ちた

新田維緒の瞳から光が消えかける。
然し、その時確かに、瞳に写った物がある。
空を翔る白虎と、久世響希を。

☆

ぶちかませ！ 白虎！

——ガオオオオオ!!!

白虎の咆哮に大気が震え、

天空からドウベを押し潰す。

海綿体の爆発を終え、

今度こそ本当に活動を一時停止させたドウベに、

この一撃を避ける術は無い。

グシヤッ。

ジプス局員や東京の街に大幅な被害を出した

ドウベの最期は、そんな間抜けな音で締められた。

貪狼星を下した白虎が、夜に吼える。

己こそが最強であると誇示するように。

(11) 日曜日の終わり

ドウベの死骸が暗い光の爆発となって消える。肉体のその全てがこの場から忽然と消え去り、ドウベがこの場に居た事を示すのは、爆発で抉れた地面と不快な焦げる臭いのみだ。恐る恐るといった様子で、ダイチが話しかけてくる。

「ひ、響希……!? 幽霊じゃないよな……?」
生きてるよ

「そ、それじゃどうやって……」

見せた方が早いな……白虎、『瞬天の舞踏』
呼びかけると同時に、白虎と俺の位置が入れ替わる。

神獣の種族スキル、瞬天の舞踏。

効果は仲魔と自分の位置交換。

俺は白虎にマコトと新田さんを運ばせた後、
建物の上に行かせて、そこから瞬天の舞踏。

白虎はそのまま自力で爆破圏外に逃げさせた。

……爆破まで少しのタイムラグがあるのは、

前の爆発の時で分かってたからな。

——ガルル……

唸り声を上げる白虎に小突かれる。

少しでも逃げるのが遅ければ自分が爆発に巻き込まれていた事が
気に召さないようだ。

痛っ……悪かったって……

——ガウツ!

未だ不満げではあるが一応の納得はしたのか、
一吼えして白虎が消える。

さて……全員無事か?

「お陰様でね……一応ありがとうと言っておくけど、

あんな無茶はダメだと思うなあ」

「お前が爆発に呑み込まれたと思った時は肝が冷えたぜ……」

「うん……心臓が止まるかと思った……」

「まあ何より、無事ドウベを討伐出来たんだ。今は喜ぼう」

「——ほう、私が助力するまでも無かったか」

戦勝の雰囲気満ちるその場に、聞き覚えのある男の声が響く。

普通の声量であるにも関わらず、強大な存在感をありありと示すその声は、その場の全員の意識を強制的に向けさせる。

「ご苦労だった、後処理はジプスで行う。」

君達は明日に備え、東京支局長で休んでくれ」

峰津院大和が、蒼く燃えるような

鬣を持った白い巨大な狼を連れて現れた。

比較的無事な局員が全員敬礼の姿勢を取る。

彼らの中には負傷して倒れたまま敬礼する者も見られた。

「局員達にも甚大な被害が出たようだが……」

よくやった。君達のような優秀な配下を持ってて

私は誇りに思う。これからもよろしく頼む」

「「はっ……！」「」」

マコトが大和に向かって一歩進み出る。

「局長、私は彼らを支局まで連れて行きます。」

それまでの間現場指揮をお願いしたいのですが……」

「迫か、君も今日はもう休め。ここからの現場指揮は私が行う」

「あ、ありがとうございます……」

話は聞いていたな、今日はもう休もう」

ああ……そうだな……」

俺達は車に乗り込み、ジプス東京支局へ戻った。

☆

支給された部屋着に着替え、布団を被る。

ドウベは倒した。

だが、これで終わりだとは思えない。

峰津院大和が発した『明日に備えて』

『これからも』という言葉。

あれは明日以降もあの様な怪物が

出ることを示しているのでは無いか？

——峰津院大和は何かを隠している。

……所属したからと言って気を抜くのは
まだやめておいた方がいいかもしれない。

ティロリンティロリン♪

着信。出ようと携帯に手を伸ばすと

勝手に聞き慣れぬ声が喋り始める。

「やほほ、ティコリんだよ☆ お昼ぶり！」

「こんばんは。就寝前に失礼します」

バニーガールのような服装の女性と、

執事服の男性が携帯の画面に写っていた。

電車の時の……！

「覚えててくれて嬉しいな☆」

「光栄です」

はしやぐ女性と落ち着いた男性。

対称的な存在だが放つ言葉の意味は同一。

何か用か。

「特に用って訳じゃないんだけど☆」

「此度の貪狼星、ドウベとの戦い、

見事でした。我が主も驚いておられた……

残り6日、貴方のその輝きに曇りがかからない事を

我々も願っております……という労いの言葉をお伝えに」

6日。6日もこんな事が起きるのか。

「そだよ☆ でも、今ティコリン達が与えられるヒントはこれだけ
！ それじゃね☆」

「次がある、と確信していらしたのはお仲間の中でも貴方だけでした
ので……私達からの少しばかりの助力でございます。それでは……」

男女が画面から消える。

Nicaeaというアプリがますます分からなくなってきた……。

そのままベットに倒れ、俺は睡眠を貪る事にした。

DAY 2 激動の月曜日

(12) 日が明けて

目が覚める。

寝惚け眼で時計を見ると、

午前7:00だった。

もそもそと起きる準備をしていると、

部屋の扉が開く。

「久世、……つと、すまない。

起きたばかりだったか」

別にいいよ。

そう言つて振り返る。

「それは何よ、り……く、久世！

ふ、服……！」

マコトが勢いよくこちらに背を向ける。

服？ と思い自分を確認すると

着替え途中だったので上半身が大気に晒されていた。

手早く服を着て、マコトに問い掛ける。

それで、何か用？

「あ、そ、そうだな……」

君と秋江だけ姿が見えなかったので、

安否確認に……この状況だからな」

ダイチと新田さんは？

「ん、ああ。両名とも護衛を付けて自宅へ向かわせた。志島の護衛が

戻れば次は君の番だが、その……」

マコトは黙り込んでしまった。

察してはいるよ、だから大丈夫。

「つ……そうだ。少しだけだが我々の下に情報が入っている。正直、

彼らの家が無事であるとは考えにくい。……無論、君の家もだ」

頷く。

そんなことは分かっている。
寧ろ今このような場所を
与えられているだけでいい方だろう。
仕方ない。

マコトのせいでも無い。

だから気に病むな。

それより、詳しく教えてくれ。

「すまないが、こちらもまだ情報が掴みきれていない。詳細は追って伝えるよ」

そうか。他には？

「ああ、一応伝えておこう……君が気絶している間、新田から携帯を借りてな。その時のデータを解析して、取り敢えずN i c a e aには実害は無い事が判明した。その結果、試験的に我々の数人が例のN i c a e aを使用する事になったよ。やはりこれまで使ってきた召喚端末より性能が高い」

携帯を取りだし、画面を見せてくる。

確かに今使っているアプリと同じ画面だ。

そう思っているとふと思いつく。

そうだ、ジャンヌダルクは？

「戦闘後、リカーン^{蘇生}で復活させたよ。

やはり悪魔は我々と根本から違うみたいだ——」

マコトの携帯から独りずに

ジャンヌダルクが現れる。

——マコト、私の事を悪魔と呼ぶのは控えていただけると……

「あ、ああ……すまない、失念していた」

ジャンヌダルクはふふふと笑い、

響希の方を見る。

——貴方は確か……ヒビキ、でしたか。

ああ。久世響希だ。

——ドウベの討伐、お見事でした。

実際に見てはいないのですが、マコトから聞きましたので。

それはどうも。

貴女の最期の一撃も、見事だった。

——あのまま近付かれていたら不味かったですからね……それでは、お喋りはこの辺で。

ジャンヌダルクがマコトの携帯に戻る。

……もつと堅物かと思っていた。

「救国の乙女等とは言われているが、

彼女は英雄である前に1人の少女でもある。

年相応な所は当然あるさ」

逸話を利用して悪魔を倒す、

なんて事も出来るかもしれないな。

「そうだな……可能性はある」

それにしても、悪魔を召喚するアプリ……

謎は深まるばかりだな。

「ジプス内での調査も難航している。

運営しているサーバーすらも掴めていない状況だ。我々も国家組織としてあらゆる情報技術を駆使しているが進展は思わしくないな」

Nicaeaの運営者、か……

どんな奴なんだろう。

「さあな。随分と手を焼かせてくれるよ……」

案外悪魔だったりして

「フ……あるかもな？」

さて、志島を送った護衛に戻るまで、

君は自由時間だ。楽にしていってくれ。

外出は自由だが、外には悪魔の出没が増えている。節度を持って行動するように」

マコトはそれだけ言うと、

軽く挨拶をした部屋から出ていった。

☆

軽く歩こうと国会議事堂の外へ出ると、

ダイチが深刻そうな顔で佇んでいた。

どうした？

「あ……ああ、響希。

驚かせんなよ」

家はどうだった？

「あー……マコトさんから聞いたか？

でもお前にもちゃんと伝えないと……悪い。」

……ジプスの人たちはさ、ちゃんと護衛してくれて、家まで行こうとしてたんだよ。でも……ダメだった。ビルは倒れてるわ火事は起きてるわで……近付けもしなかった」

近所の俺の家もまた同じ、か……

「ああ……」

重い沈黙が流れる。

「で、でもよ！俺の親もお前の親も、死んだって決まったわけじゃないしさ！もっと明るくいようぜ！そのうち会えるよな！」

そうだな。

「だよな!? きつと……きつと大丈夫だよな……はははっ……！
……よし！ 湿っぽいの終わり！とにかく頑張っていこーぜ！」

ああ。

「んじゃ、俺マコトさんに呼ばれてっから！

また後でなく！」

ダイチは国会議事堂の中へ去っていった。
さて……どこへ行こうか。

☆

道中出てくる悪魔に対処しながら
街を白虎に乗って駆けていると、

新田維緒を見かけた。

新田さん。

「……！ あ……久世くん。と、白虎くん。

あのね……マコトさんから、私と志島くんが家に向かったのは聞いてると思うけど、

家、ダメだったよ。うちのマンション、斜めに倒れちゃって……。

部屋には入れたんだけど……お父さんとお母さん、居なかった」
良かったな。

「え……う？ あ……い！」

……やはり新田維緒は頭がいい。

ダイチならここで怒るところだが、

新田維緒は言葉の本質を見極めた。

この頭の良さが別方向に使われている気がするの、気のせいだろうか……

「そう、だよ。誰もいなかった、誰もいなかったなら、お父さんとお母さんは生きてるかもしれない……！ 久世くん、ありがとう……！」

役に立てたなら嬉しいよ。

ジプスに戻るなら、白虎で送るけど。

「じゃあ、お言葉に甘えて……よろしくね、白虎くん」

——ガウ

特に不満げな様子も無く、白虎はジプス東京支局へと駆け出した。

☆

「やく、おはよう響希くん」

新田さんと一度別れ、支局内を歩いているとジョーに声を掛けられた。

ジョーは家に帰らないのか？

「あー、家ね。どうせ一人だし、親も両方亡くなってるからねえ……地元もこつちじゃないし。でもスーツは変えたい……でも仕事じゃないからいいか」

携帯も繋がらないし、連絡のしようがない、か。

「あー、そうそう、そんなカンジ」とジョーと話していると。

ダイチと新田さんが小走りで近付いてくる。

「響希〜！ 局員の人から聞いたんだけど、マコトさんが泉岳寺で戦ってるらしい！ どどど、どうしよう……!?!」

「助けに行こう……!?!」

「若者は元気でいいね、じゃあおじさんは後ろで応援しようかな？」

サボるな、行くぞ。

(13) やる事と出来る事

泉岳寺へ近付いて来た。

聞き覚えのある声が聴こえてくる。

『待てっ……！ 貴様ら、逃がしはしない！』
急ごう。

「うん……！」

「あつ、おいあれ……！」

マコトが数人の男を本堂前に追い詰めている。

「あれ、僕達これ要らないんじゃない……！」

「……もう逃げ場はない。

召喚アプリを悪用した件、

詳しく聞かせてもらおうとしよう」

「く、クソ……ここまでか！」

何なんだよ、この女……！」

マコトは油断無く携帯を男達の方へ構えているが――

「あ……！ 後ろに……！」

マコトのちようど真横に悪魔が召喚され、

無防備な横っ腹を殴り付ける。

「ぐあつ……！ まだ、仲間が……いたのか……！」

「ハッ、油断したな！」

お前ら、今がチャンスだぞ！」

させると思うか？

「何ッ!？」

新田さんはマコトを。

ダイチ、ジヨ。やるぞ。

「えっ？ あ、おう！ 行くぞハヌマーン！」

「わく気が進まなくい……」

代わりに頼むよ、カマップアア！」

――手に入れた力で暴虐を尽くすとはな。従えている悪魔もさぞ低俗なのだろうな。

——まあまあ猿の旦那、どうせぶちのめすんだから悪魔同輩の素性とかそこまで関係ないと思うぜ？

——それもそうだな。手早く終わらせるか。

「あ、悪魔をどう使おうと、俺たちの勝手だろうが！ 来い！ 俺の悪魔！」

「クソ……！ 形勢逆転かと思ったのに……！ 来い！」

「おい！ 戦っても勝てねえよ！ 悪魔で時間稼ぎして俺らは逃げるぞ！ 寺の外まで行きやあ逃げれるはずだ……急ぐぞ！」

「……！ 久世、コイツらを逃がすな！」

召喚アプリの悪用者だ……気をつけろ！」

了解。白虎、退路を封じるぞ

——ガウ。

白虎が駆け、逃げ出す男達の前に立ち塞がる。

言っておくが、白虎は強いぞ。

携帯を構える。

「クソ……こいつさえ倒せばッ！」

男の1人が殴りかかって来る。

命中するも、傷すら与えられていない。

——ガルア！

白虎の前脚が男の顔面を捉える。

「なっ——ふっ——」

猛反撃。白虎の自動効果スキルだ。

殴りかかって来た男は気絶したようだ。

「ぶ、物理がダメなら！ 魔法で——あぎやあ！」

電撃ジオ。させるかよ

魔法を使おうとした男を麻痺させる。

「こ、降参する！ 降参するから！」

携帯は捨てるから見逃してくれ！」

残りの1人が懇願する。

チラリとマコトを見ると

首の横振りが返ってきた。

ダメだつてさ、氷結^{フッ}。

「つ、冷たい！ やめてくれ！ クソっ……こんなアプリに手なんて出さなければ……！」

男を氷で拘束していく。

後悔が遅いな。

さて、あつちはどうなったかな。

☆

「おりゃあ！ とうっ！ ど、どうだ!?!」

ダイチが悪魔を殴って消滅させ、

「はいやく、そーれー、はいそつちもー」

ジヨーは広範囲氷結や広範囲衝撃で薙ぎ倒していく。

「えいつ！ っこつちも！」

新田さんは電撃^{ゾオ}で近付く悪魔を牽制している。

「はあッ！ ふっ！ 砕けろッ！」

マコトは三人をカバーするように縦横無尽に駆け回っている。特に問題なさそうだな。

——ガウ、ガウ！

白虎が吼える。

その視線の先には携帯へ手を伸ばす麻痺していた男。

「クソ……舐めやがって……来やがれ！ ガギソン！」

赤黒い稲妻の球体から、

毒々しい桃色の鳥頭の悪魔が現れる。

——へへへ……！ 俺を呼び出すなんざ、中々度胸があるじゃねーか。

んで……。どいつをぶち殺して欲しいんだ？

この俺が殺つてや——

——ガルア！

白虎が一瞬で間合いに入る。

鳥頭の悪魔は首に噛み付かれ、

地面に押さえ付けられる。

———どの口がオレを殺るって？
地から鳴り響くような声が轟く。

———ヒ、ヒイ……………!

———死ね。

骨が碎け、肉が舞う。

鳥頭の悪魔が肉塊となり、

光の塵となって消える。

「お、俺の悪魔が……………」

白虎の声初めて聴いたな。

———フン……………喋るのが億劫なだけだ。

それに、お前には人の言葉でなくても

意味は伝わるだろう？

それもそうだな。

———ガウ。

満足気にそう一鳴きし、携帯へ戻る。

「……………携帯は全て破壊して、後は少し話を聞こう」

そこら辺はマコトに任せる。

「ああ、助力感謝する。皆、ご苦労だった」

色々大変そうだな。

「いや……………これはジプスの存在意義だ。

私たちがやらねば。……………我々の予想よりN i c a e aにアクセス

した人間の数は多いようだ。こんな事態でなければ悪用する者も容

易には出ないだろうが……………。或いは、彼らの方が正しい反応なのかも

しれないな……………」

そうかもしれない。

「ああ……………だが哀しいな。

私はもう少し、人を信じて生きてみたかった」

マコトは男達の元へ歩いて行った。

ダイチが張り詰めた緊張を解くかのように

大きく息を吐く。

「さて……………無事に終わってよかったぜ。

そんじやどうするか、この後俺達……

そつか……俺たちつてさ、

もう……する事ないんだな……」

「……そう、だね」

「こういう時に、やれる事も出来ることも全然無いつつーか……。なんか、俺って思ったよりも何もしてこなかったんだなーって」

暗い顔でダイチが言う。

が、ジョーが頬を掻きながら

気楽に笑う。

「あく、まあ。

そう気負うなって、少年。

君たち高校生でしょ？ まだピチピチじゃない。なんだかんだ言つてさ、人生つて先は長いぜ？ ……もつと力抜いていけよ」

ジョーは抜きすぎだろ

「あ……そう？ 心外だなあソレ」

「ふふふつ……あははつ……」

「そつか……そうだよな!？」

凹んでもしやーねーじゃん！

何マジになつてんの、俺！」

一同に笑いが起き、

重い空気は消え去っていた。

「つと……そうだ、忘れてた。

あのさ、なんか俺、

君たちを呼んで来いって言われてた」

「……は!？」

「……?？」

誰に呼ばれてた？

「あくえつと、何だっけ？」

ジプスの局長の少年だよ」

「峰津院……大和だっけか？」

俺アイツ苦手なんだよな……

響希、どうする？ 行くか？」

行くしかないだろう

「そうだね……どっちにしろ、

他に行く所無いから」

「まく別に食べられる訳でも無いんだしき、行つとけばいいじゃない。

一宿一飯の恩ってヤツ？」

「まあそっか……そうだな。

何の話かは知らないけど……

一応行つとくか！」

そうだな。

その場を後にし、

全員で議事堂に向かう事にした。

(14) 崩壊した日常

トウルルルル……

電話が鳴る。

振動からして俺の携帯のようだ。

「え……？　だって今は圏外じゃ……」

死に顔動画関係かもしれない。

出よう。

「そう……なのか？」

だっていつもはメールじゃん？」

電話に出る。

『久世か。……峰津院だ』

何故電話が？

『ああ、私の判断で君の携帯電話を、

我々ジプスの基地局に登録した。

志島、新田、秋江の携帯も同様にな』

俺達だけか？

『……我々は国家組織なのでな。

保険は用意してある。

ところで秋江に言伝を頼んだが。

伝わったか？』

今行くところだ。

次からはジョーに伝言はやめた方がいいぞ。

忘れるから。

『……そうか、覚えておこう。

それはそうと、君たち全員に大事な話があつてな。では議事堂で

待っている』

ツー……ツー……という音と共に、

一方的に電話が切れる。

「あの……誰だった？」

峰津院大和だったよ。

呼び出しの件と、俺たちの携帯電話が使えるようになった。

「えっ!? うおっ! マジで圏外治ってる!」

ダイチがすぐさま携帯を確認する。

「お、ホントだ。アンテナビンビンだわ」

「良かった……でもどうして……?」

ジョーと新田さんの携帯も無事繋がっているようだ。

俺達の携帯限定みただけだな。

「え……それって局長さんがしてくれたってこと?」

「何だ、アイツ良い奴じゃん!

どれ……」

ダイチはどこかに電話をかけ始める。

多分繋がらないと思うぞ

「……マジで繋がらない。」

なんだよ、全然ダメじゃん!」

「え、じゃあ俺もかけてみようかな」

「あの……2人とも……多分それって、その……」

基地局に登録されたのは俺たちだけだから、俺たちの間でしか通話は出来ないと思うぞ。そう言いたいんだろ?

「あ、うん。そういうこと」

「あくなるほど、なるほど。」

つまり電話が通じるのって

ジプスの連中だけか」

「え、なんだよそれ!」

全然役に立たないじゃん……」

それでも無いぞ

少なくともこの4人の携帯は繋がるから

別行動した時に死に顔動画が送られてきたとしたなら連絡を取れる。

「そうだね、そういう点ではめちゃんこ助かるよね、これ」

「あ、そっか。死に顔動画は自分には送られてこないから……」

「うん……私たちが常に一緒に居れるとは限らないから……」

さて、峰津院を待たせても悪い。
国会議事堂に急ごう。

☆

ジプスに戻ると、峰津院が声を掛けてきた。

「……戻ったか。遅れたな。」

すぐ司令室に集合してくれ」

「あらく、俺ちよつとメシ食いたかったんだけど……」

「ばっかジヨーさん！ アイツ怒らせたらメシどころか寝床も無くなるかもなんだぞ！」

いいから行くぞ。」

司令室に進む。

図書館よりも膨大な本が四方に並び、

部屋の奥には豪華な時計が複数縦1列に並んでいる。

「さて……では話を始めよう」
頷く。

「今朝我々は約束通り、君達に護衛を付けて家まで送らせた。……結果は知っての通りだ。君たちの日常は破壊され、

戻るべき場所はない」

「……」

ダイチと新田さんが俯く。

「さて、私から提案だ。」

先程、ジプス大阪本局と連絡が取れた。

私はこれから大阪へ向かう」

大阪は無事なのか？

「どうだろうな。自分で見た方が早い」

……まさか。

「結論から言う。」

私へ同行し、大阪へ来い」

「えっ……!？」

「……あく、ちよつと待って。」

大阪って言うのは……俺達が？」

「そうだ。私は君達に話している」

「な、なんで俺達が大阪へ行くんだ？」

「では聞こう、志島。」

待っていれば助けは来るか？

元の日常を取り戻せるのか？」

「そ、それは……知らないよ、そんなの……」

「東京の様子は見たな？ ……どう思った？」

自分たちではどうしようもない、

国がなんとかするのを待とう……と、

大方、そんなところだろう」

「う……そ、そうだけど……だって仕方ねーじゃん……！」

「……仕方ない、か。」

これまでの世界ならば、

それも構わないだろう。

だがこれは普通の災害ではない。

君達が直接目にし、体感した通りな。

ただ待てば誰かが解決してくれるという状況ではないのだよ。淡

い期待は捨てる。

「……もはや君の人生に一切の保証はないのだ」

「……！」

「もし生き延びたければ……」

自分で考え、行動しなければならん。

そして、この災害の原因を探り、

解決しなければ我々に明日は無い。

……大阪へ行けばここに留まっているよりも、新しい情報が集まる
だろう。

その中には、あるいは災害の真相に近づく手がかりがあるかもしれない
ないな」

「ん……。それで大阪に来たってこと？」

でも、どうして俺たちなの？」

「君たちはドウベを倒した。」

有能な人材には、それ相応の機会を与えたい。評価しているのだよ、君たちをな。

「……さて、私からは以上だ。」

自ら行動を起こす気があるならば10時頃に新橋で待つ」

時計を確認すると今は9時……

覚悟を決める時間は1時間もない。

「……いいな？」

君たちの結論に期待しているよ」

ヤマトはそう言う与会議室を去っていった。

この場の誰もが黙る。

「あ……えっと、参ったな……なんて言えばいいんだ？」

「ま、行くしかないかな？」

別に俺はいいけど、他にやることも無いしねえ」

「私も気になる、かな。」

出来ることがあるなら、

行動した方がいい……かも。

でも、大阪で何が分かるんだろう……？

災害の原因の手がかりって……？」

ヤマトは大阪『本局』と言った。

何かがあるのかもしれない。

「あ……そうだね。」

そこで原因を確かめれば、

解決の方法も見つかる……かも」

「……あくやめだ、やめっ！」

グチャグチャ考えても、

今は何もわかんないっしょ！

いいよ、もう。行こうぜ、大阪！

そんで色々調べりゃいいんだろ!?

そうすりゃ分かるって！

アイツが何考えてるかも、

何がどうなってるのかも！

そしたら……。それ見てから、ちゃんと考える！ ……それでいいじゃん！」

「うん……そうだね。」

そうかもしれない。

みんなで大阪を調べよう？」

「あく……つてことは何？」

全員、大阪行く？ んじゃそうしよう」

最初から行く気だが……

覚悟は決まったな。

「おうっ……！」

「10時頃に新橋、だね。」

忘れないようにしないと」

「あくなら荷物とかも纏めないと……

1回ここで解散しようか」

その後少し話してから

全員が会議室で解散した。

(15) 悪魔の目撃情報

ジプスの自分の部屋から荷物……

と言っても衣服類も無いので少ないが、それらを纏めて白虎に乗り東京を散策する。

行く先を白虎に任せ着いたのは、

新宿のチネシテイ広場。

そこには新田さんが居た。

……白虎、新田さんを気に入りでもしたか？

——グルルル……

思いつ切り威嚇された。違うらしい。

御機嫌取りがてら白虎を撫でながら

新田さんに近付くと、

相手もこちらに気づく。

「あ……久世くん」

よく会うな

「ふふっ……そうだね」

何故ここに？

「あ……うん。」

大阪……行くでしょ？

色々必要だから、

買えるお店無いかなくて。

でも……ダメだね。お店殆ど開いてない」

何が欲しい？ 良ければ一緒に探すけど

「え……あ、うん。」

大丈夫……大した物じゃない。

久世君はどうしてここに？」

白虎と散歩がてら悪魔が居ないか、な

「そう、なんだ……」

私のハトホルはあんまり戦えないけど、

白虎くんや久世くんが傷を受けたら

すぐに言っただけ。回復してあげるから分かった。」

「……いつになったら、買い物とかできるようになるんだろうね」
先程の話だ。やはり新田さんのような女子にとってはこの状況はかなりキツいらしい。

「ここに向かう道で色々耳に挟んだんだけどね、都心から離れた所だとまだ火災とか危険らしいよ……
救助活動も進んでないって。でも、言ってる人も噂話程度で、

誰も正確な情報を言っているようには思えなかった。こういうのって普通、政府の人が被害状況とか説明したりしないのかな……？」
停電がある。

「あ……そうだよね。
テレビもラジオもダメだから、説明できない……？」

……お父さんとお母さん、大丈夫かな……友達も今頃……」
そんなことを話していると、通りの先に人集りが見える。
あれは……

「久世くんも気になるよね、あれ……
なんの人だからだろう……？」

あの、すみません……！」
人だからから抜けるように歩いてきた女性に、新田さんが話しかける。

「え……？ す、すみません。
ちよつと……」

近付いて初めて分かるが、女性の顔は蒼白で、

明らかに気分が良いとは言えない。

大丈夫？

「あ……大丈夫。」

あなた達……見た？」

「あの……人だかりのところですか？」

まだ、見てません」

「そう……行かない方がいいよ。」

あそこ……死体があるの」

「……！」

「もう……グチャグチャで。」

人かどうかもわからないくらい……。

犯人は噂の化け物じゃないかって……」

悪魔は死ぬと死体が消える。

今でも死体があるなら

それは十中八九人間だろう。

それにしても——

「あの、化け物って……？」

「あの地震の後から

色んなところで見たって人が居るわ。」

知らない？ 東京を駆ける白い虎とか」

心当たりがありすぎると思わないでもなかったが、

化け物を怖がっている女性を

これ以上怖がらせるにも行けないので口を閉じる。

「あはは……ちよつとそういうのは聞いたことない、ですね……」

「とにかく、あなた達も化け物とかを見たら逃げるといいわ。絶対そ

ういうのとは関わらない方がいいと思う。それと……化け物だけ

じゃなくて人間にも気を付けてね」

最後の言葉を新田さんを

じつと見てからそう言い、

女性は去っていった。

「化け物って……悪魔の事だよ……」

あんまり、普通の人の前で悪魔を使うのはやめた方がいいのかな……」

そうだな……悪魔を使うしかない
っていう場面は悪魔を出すしかない。
けど逆に不必要な場面で悪魔を使えば
助けようとしている人を
怖がらせてしまう……

こればかりは見極めが大事になる……
ダイチやジョーにも伝えないと。

「そうだね……」

それと、白虎に乗りながら
進んでいる時に分かったが……

野生の悪魔の数自体も増えている。

「野生って……契約者に勝った悪魔……？」

ああ……増えた悪魔の数だけ、
人が死んでいると見ていいだろう……

「でも……悪魔に人が殺されるとか、

そんな映画みたいな事が

本当に起こるなんて……現実味が無いよ……

今まで私たちが暮らしてきた『現実』って

何だったんだらうって思う。

やっぱり……ダメだよな。このままじゃ。

大阪……行かないや。

ちやんと……何が起きてるか知りたいよ」

いつの間にか通りの先の人だかりは

散らばり始めている。

そろそろ俺は新橋に向かうけど……

また、乗っていくか？

「あ……ふふっ……うん。」

白虎くん、お願いします」

——ガウ

俺と新田さんは白虎に乗りながら
新橋へ向かった。

(16) SL広場にて

集合場所であるSL広場に着くと、既にダイチとジョーが待っていた。

「お、響希く！ もうジョーさんも来てるぜく！」

「ドンケツは新田ちゃんとは以外……おや？」

さつき会ってな。白虎に乗せてきた。

「あはは……遅れちやったかな？」

「やるねく響希君。」

これぞ白馬の王子様ならぬ、

白虎の王子様って感じで

中々様になってるじゃないか」

「響希が新田さんとデートしてる時に、

俺はジョーさんと寂しく待ちぼうけ……」

「ま、少年。人生そんなもんだよ。

あつち大に着いたら

なにか奢ってあげるから元気だしなよ、ね」

「で、デートじゃなくて……」

街で偶然会ったから……」

やんわりと新田さんが否定するのに頷き、

周りを見てマコトとヤマトが居ないことに気付く。

それより、峰津院やマコトは？

「ん、少し前から……」

待ってるけど……まだ見てないね」

「遅刻……ってのはマコトさんの性格的に

考えにくいから……何かあったとか？」

「悪魔に襲われてたりとか……？」

……いや、襲われるのはこっちの方のようだぞ

俺達が入ってきた入口から濁流のように

悪魔の群れが現れる。入って来た時は

微塵も居なかったというのに、

何処から現れたのか

「は？」

「え……う？」

「あ、マジで？」

各々が突然の悪魔の出現に驚愕していたが、ハツとして携帯を構える。

仕方ない……速攻で片付けるぞ！

「それには及ばない。

元より私の獲物だからな」

「遅れてすまない……！」

逃げ出した悪魔を追うのに

時間がかかった……！」

聞き覚えのある男女の声が近付いてくる。

悪魔の群れの一部が爆炎と共に吹き飛び、

強引に道が作られる。

「行け、ケルベロス……全て塵にしろ」

——グルルア！

公園に現れたヤマトに付き従う白い巨狼が

広場に入った悪魔を業火や鋭い牙等で蹴散らす。

——圧倒的な力量の差。

ケルベロスと呼ばれた悪魔が

群れの殆どを一撃で仕留め、

10分も経たずにその場にいる悪魔は全て消滅した。

「す、すげえ……！」

「ほく、年季が違うって感じだね」

「うん……あの峰津院さんの悪魔……凄く強い」

敵になつてなくて良かったな……

ヤマトの実力に圧倒されていると、

峰津院が白い巨狼ケルベロスを連れて

こちらに向かつて歩いてくる。

「さて……待たせたな。

早速大阪へ向かうが……全員準備は出来てるな？」

「お、おうっ！ でも大阪なんて

どうやって行くんだ？」

電車とか止まってるんだろ？」

「そうだね、確かにそれは気になるな」

「うん……悪魔に乗る、とか？」

「見ていれば分かる……迫、頼む」

「はっ……」

マコトが携帯を操作して、SLに向け携帯を翳す。

程なくしてSLは微々たる距離ではあるが直進をし、

SLで隠れていた空間が目に入るようになる。

銀色のパネル。それがみるみるうちにスライドし、

空いた穴から浅草寺でも見た黄金色の装置が現れる。

「ほく、このSL動けたんだね、

何度か見た事はあるけど知らなかったよ」

「うおっ……ビビったあ……」

「ってあれ……浅草寺の!？」

「な、何する気だよ……」

「今に分かる。まあ見ている」

マコトは続いてその黄金色の装置へ携帯を翳すと

装置が穴に引っ込み、新たに金属製の棒が出てくる。

「ここから下に降りられる。」

注意してついてきてくれ」

「は……下って……何が……う？」

それには答えず、マコトが棒を伝って

下に降りる。続いて峰津院が下に降りる。

「あーから、行っちゃった。」

「どうする？ 行く？」

「ここまで来て引き返す……」

なんてするわけが無いだろう

短い線路が引かれている

SLが鎮座する台座に上がり、棒を掴み下に滑り降りる。

☆

SL広場の地下を率直に言い表すなら、駅のホームだった。いや、駅なのだろう。

事実、俺達の目の前には新幹線が停車している。

これは……

「ここはジプスの車両が発着する

専用ホームだ。もつとも、

施設自体はだいぶ古いが……」

「へへ、古いにしては

上の駅より随分立派じゃない？」

ジョー、新田さん、ダイチが

棒を伝って降りてくる。

「せ、専用ホーム……!?!」

ちよつと待ってつての、

なんでここだけ無事なんだよ？」

「うん……私達の時はあんなに……」

「聞いても分からんだろう、

ムダな推察はよせ、行くぞ」

新田さんやダイチの疑問を、

峰津院はバツサリ切り捨て新幹線に向かう。

乗り込む前にこちらの方をチラリと見て、

不敵な笑みを浮かべると

「さあ、乗りたまえ。直ぐに出立する」

それだけ言い残し、ヤマトは

完全に新幹線の中に消える。

「では局長、ご無事で」

マコトは新幹線には乗車せず、

見送るようにホームに留まっている。

マコトは行かないのか？

「ああ、私は留守の間

東京を守らなければならぬ。

……だから、安心して行ってこい」

「へえ……そうなんだ。」

「ま、んじや頑張ってくるわ！」

「マコト、また帰ってきたら……」

「じゃーね〜マコトさん」

「それじゃ、気を付けて。」

「ああ、君達もな」

「マコト以外の全員が車両に乗り、

いよいよ新幹線が動き出す。

「……。何も無ければいいが……」

「見送るマコトの顔は、

どこか憂いを秘めていた。」

(17) 和久井啓太と水神茂久

数時間新幹線に乗り、
漸く停車する。

車両の外に出ても風景に変わりはないが、
数人のジプス局員が出迎えに来ていた。

「お帰りなさいませ、ヤマト様」

渋みのあるバリトンの声。

歳は40半ば、髪を後ろに撫で付け

顎髭を蓄えた、落ち着いた風情の男だ。

この男だけジプス局員が着ている

黄色の制服ではなく、黒いスーツを身に付けている。

「迎えは不要と伝えたが。」

……水神、貴様が出張る程のものか？」

「いえ、ドウベを倒した若者を

私も一目見たく思いましたね。

初めまして、水神茂久です」

微笑みを浮かべながらその実、

細められた瞳は微かに

こちらを観察するような

冷たい輝きを放っている。

……どうも。

「まあいい……私は本局で会議だ。

お前たちは大阪の実情を見てくるといい。

そして自分の目と耳で

災害の真相を見極めたまえ。

それが生き延びるための近道だ」

「え……案内とかは!？」

俺達だけで大阪を調べろっての!？」

傲慢じゃないけど俺大阪なんて

行ったこと無いから迷子になるよ!？」

ダイチの訴えを無視して
ヤマトはこの場を去っていく。

「ははは……安心しなさい。

君たちの事は事前に聞いている。

案内役を連れてきたよ。

……和久井くん、彼等の案内をお願いするよ」

「チツ……和久井啓太や」

ジプス局員の後ろから

小柄で白髪をかきあげた

学ランの少年が現れる。

少年は不機嫌さを隠そうともせず

こちらを睨みつけながら

自己紹介をする。

「げ……なんか怖そう。

なくんか苦手な雰囲気」

「和久井くんは君たちと同じ、

召喚アプリを使う民間人の協力者だ。

彼を案内につける。年齢も近いし、

君たちと話も合うと思うよ。

それと、会議は15時頃に終わる。

その時間に大阪本局に来てくれ、

場所は和久井くんが

案内してくれるだろう」

それではね、と言葉を残して

水神は去っていく。

残ったケイタはじろりと、

こちらを強い眼光で睨みつけている。

それは何かを探しているような

雰囲気が伺えた。

「絶対話合わねって……」

「志島くん、聞こえちやう……」

「え〜以外と合うかもよ？」

ねね、ヤンピヨン読んでる？」

「……西の言葉やな。」

アンタ、生まれはどこや」

ケイタはジョーの質問を無視し、

一方的に問掛ける。

「……え〜？ いや、そんな事ないよ。」

俺ってシティーボーイじゃん？」

ねえ？ と自分を指差しながら

こちらへ振り返る。

「……まあええわ」

ジョーに興味を無くしたのか、

ケイタが足早にここから去ろうとしている。

「あ、お、おいつ!？」

どこ行くんだよ!？」

案内してくれるんじゃない?！」

「……悪いがヒマやない。」

群れる義理もないわ。

広い街ちやうし、迷わへんやろ。

……観光は自分らでやれ。

14時半頃、ビックマン前や。

それくらいの時間になったら、

迎えに行つたるわ。

ああ……それと、街中にも悪魔がおる。

適当に気いつけるや」

「ええっ……!?! 大阪にも悪魔いんの……!?!」

じゃあヤマトの言つてた事つて……」

「見たらわかるわ。……ほな」

ケイタが駅のホームから去っていく。

「おいマジかよ……なんだよアイツ……」

全員が顔を見合わせる。

「あ、えっと……」

とりあえず……行ってみる？

ほら……外に出たら私たちだけでも

何とかなる……かもしれない」

……折角大阪まで来たんだ、

とりあえず俺達だけで調べられる

ところは調べてみよう。

分かなければ、

大阪本局の局員に聞けばいい。

「う、うん……じゃあ、行こう？」

「そうねえ……ハラ減ったし、

まずは行ってみようか。

俺、豚まん食べたい。

あ……でもお好み焼き定食もいいな。

でも、やっぱり麺類な気分？

迷っちゃうなー」

楽しそうだなによりだよ……行こう。

駅のホームを後にした。

☆

外に出た瞬間、全員の携帯が震える。

メールだ。

まさか……

嫌な予感に汗が流れる。

急いで件名を確認すると

——死に顔動画：和久井啓太。

全員が息を呑み、

ほぼ同時に、動画を開く。

☆

見たことの無い場所。

エスカレーターと階段、

電光掲示板が写されている。

程なく、一人の小柄な少年が
激しく階段に全身を打ち付けながら、
転がり落ちてくる。
やがて階段の最後の段で身体は止まり
——二度と動くこともなかった。
和久井啓太の頭部から血溜まりが広がる。

☆

「おい、おいおいっ！ マジかよ!?

マジで!?! これ和久井啓太だろ!

アイツ、死んじゃうの!?!」

いや、まだ助けられる……

ダイチの時と同じだ。

「あ、そうか……!」

「でも、場所が分からないよ……

このままじゃ……」

「ん、そうだね。

場所が分からないと、

助けようにも助けられない。

これは結構時間が無いっほいね……

でも、これって助けなければ

——殺せるって事だよね?」

「え……?」

——何を言っている

自分でも意識せずに、

出した事の無い冷たい声が出た。

新田さんも、ダイチも言葉を失う。

当のジョーも冷や汗を流している。

「……あ、いや。

別に和久井くんの話じゃなくて、

そういう選択もできる、と」

……出来てもしない、するわけが無い。

「そりや……そうでしょ。」

でも、死ぬのが分かってて助けないとか……」

「あ、分かってるって。」

そういう意味じゃないんだ。

白鳥、白鳥……」

スワン、か……」

「お、良く分かったね。」

すわん、すわんってさ。

ははは……」

誰も笑わない。

冷えた空気がある場所を流れる。

「と、とりあえず、その。」

和久井くんを探さなきゃ……」

「お、おおモチロン！」

なんか怖そーなヤツだけど、

やっぱほつとけないしさ……！

でも……見つかるかな……」

見つけるさ、必ず。

災害の原因も探しながら、

それらしいところも探そう。

「うん、そうだ。」

人生前向きに行こう、前向きに！」

「うん……そうだよ。」

頑張れば、きっと何とかなるから……」

「お、おう……！」

じゃあアイツが行きそうな所を、

片っ端から探して……」

アイツ、どこに行きそうなんだ……？

全然分かんねーじゃん!？」

「う〜ん……そーいやそうだ。」

それに時間も気になるところだね。

確か14時半頃にビックマン前って言ってたけど。それよりも前
だろか、後だろか？」

「だあくクソ！」

時間も場所も手がかりナシか……！

どうすりゃいいんだよ？」

「あ、でも志島くん……」

手がかりなら、あると思う。

ほんのちよつとなら、だけど」

そうだな。

ダイチの時は画像から浅草寺で

死亡する事が分かった。

だから、今回も死に顔動画を

よく見ることが大事だが……

人の死に姿を何度も見る、

というのはやはり気分が悪い。

しかし人命がかかっている。

そのような弱音は言えない。

「おくなるほど！」

それならよく見れば、

アイツの動画にヒントが……！」

「どこだろう、ココ……？」

名所とかじゃ……ないよね？」

「ん、俺も大阪は詳しくないから……」

でも、ここからなにか探せば分かるかもね。

現地の人に聞くとかもいいかもしれない」

階段やエスカレーターだと、

現代じゃありふれ過ぎててな……

ジョーの言う通り、地元の人の方が

俺たちよりこの場所はよく分かるだろう。

「あ、でも……この階段って、

かなり大きいから……」。

大阪でも珍しいかも……！」

「なるほど……そうだねえ。」

「どうやらヒントはこのでっかい階段だなく
よし……これ以上の事は俺たちじゃ

分からないからさ、そろそろ行動しよっか」

「そうだな……時間が惜しい。」

「……おうっ！　じゃあ出発しよーぜ？」

全員がその場を後にした。

☆

敢えて数歩遅れて

少年達と大阪の街を歩く。

……危なかった。

つい本音が零れてしまった。

「ただの少年があんな視線を

向けてくるなんてね……」

文字通り背筋が凍るかのような、

絶対零度の視線。

久世響希という少年は、

単に悪魔の扱いが上手いだけの

少年では無いみたいだ。

「評価を変えないとね……」

今回の件で彼からの信頼は

得にくくなつたかもしれないが、

依然彼の傍が安全なのは変わらない。

「生き残る事が第一……そう決めたんだ。」

だからあんな子供、救つてる暇が無い」

個人的に、何かを探られたような、

自分の心の中を見られたような気がして、

和久井啓太という少年に対しては

悪感情の方が大きい。

折角死に顔動画という死刑宣告が出たんだ、

殺しておけばいいと思った。

「口に出してしまったのは、予想外だね」

全ては名古屋に帰る為に。

名古屋に置いて行った彼女に

再び会い、謝る為に。

「……待っていてくれ」

その為ならこの少年達の命なんて安い。

(18) ハツカー

大阪城公園広場。

死に顔動画や街の様子を

見回りながら話していると、

ダイチが立ち止まった。

「うわわわっ……なんじゃありやあ……!?!」

ダイチの視線の先には

大阪城が黒煙を上げながら斜めに

倒れかかっており、

他の建物にも被害が出ている……。

「酷い……」

「あく、これ119した方がいいのかな？」

まず消防署が機能していかないだろう。

人命救助以前に、消防士も

この災害の被害者だから……

警察や消防士の全員が人命救助の為に

働いているとは考えにくい。

俺達にできるのはそれらしい人を

見かけたら手助けをする、くらいの事しか……

「ま、マジかよ……!?!」

信じらんねえけど……。

これってマジ……なんだよな……」

ここから見るだけでもわかる、

崩壊した大阪の光景にダイチは啞然としている。

「東京でも大きい地震はあったけど……

あれだけでここまで壊れちゃうものなの……?」

……いや、地震じゃない。

東京と大阪じゃ、活断層が違う。

「あ……!」

「は……? カツ井が……何?」

「活断層だよ、これから先も活動を続ける断層のコト。

日本は4枚のプレートに

囲まれてる珍しい国だから、

地盤に溜まる歪みが大きくて、

海底の数ええると確か……

2000箇所くらいだったかな？

それくらいの数活断層があるんだよ

ここら辺、俺が君らくらいの時に

習った気がするんだけど……」

「ダメだ、全っ然ダメ。

ジョーさん意外と頭良かったんだな……」

「意外って……酷いなあ……」

「俺これでも貿易会社の営業だよ？」

「ちゃーんと学生時代に勉強して社会人やってるのさ」

「……取り敢えず、ダイチにも

分かりやすく言うぞ。

要は東京と大阪、同時に

こんな風にぶっ壊す地震なんて、

まず普通に考えてありえないんだ。

「うん……それに、これまで歩いてきた道は

そこまで壊れてなかった。

地震ならまず壊れてそうなのに……

これって、地震だと思ったら変じゃないかな？」

「えっと……街は全体的に壊れてるけど、

部分的には大丈夫……って事か？

でもそうか……地震なら

街全体が壊れそうだしな……」

「んー、地震じゃないとしたら。

それ以外の要因が大阪や

東京の破壊にあるとしたら……」

ジョーの声を遮るように、
見知らぬ男が話に割って入る。

「……違う……！……地震なんかじゃない……！」
ヨレたスーツを着た男。

身体全体がフラついており、
瞳をよく見ると血走っている。

「いいか、よく聞け……！」

あれは地震なんかじゃないんだ！」

「は……？ 誰だよ、オッサ——」

待て。最後まで聞こう、

害意があっても俺達なら対処出来る。

「俺はっ……！ 俺はっ……！」

男は頭を抱えて苦しんでいる。

「あ、あの……大丈夫ですか……？」

「うふ……あははは……」

終わりだ……終わりなんだよっ！

もうこの世界はダメだ！」

男は突然笑い声をあげ始める。

その眼は既に狂気を感じるが、

気にせず胸倉を掴んで問い掛ける。

答える、なにが終わる。

「ちよっ、ヒビキ……！」

「ひ……ひひひひっ！」

みんな戦争だとか、地震だとか言いやがって！

見たぞ……俺は見たんだ！

世界は崩れちゃったんだ！ いっひひひひっ！」

男は胸倉を掴んだ手を強引に振り払い、

そのまま奇声を上げながら走り去った。

「壊れてるねえアレ。なんだったんだるか？」

……分からない。あの男は何を見た？

何かを見て、壊れたのは確かだ……。

だが、それが何か分からない……

「見た……確かにそんなこと言ってたね」

「うん……あとは崩れた、とか終わり、とか」

「悪魔でも見たとかか？」

それなら一般の人が驚くのは無理が無いんじゃないか？」

世界は崩れた、と言っていた。

「そりゃ城とかビルとかは見た限り崩れてるけどよ……

でもあながち馬鹿げた妄言とかじゃないのかもしれないよな。

なんせ悪魔なんてこれまで信じてなかった存在が

居た上に、そんな存在を俺達が操ってるなんて……」

「そうだね……だから、

あ

あの男の人の言ってた事も重要かもしれないね。

もっと色々調べなきゃ……」

「まあそれについて調べるのもいいけど、

和久井くんの動画も忘れないようにしよう」

……そうだな、行こう。

☆

再び街を見て回っていると、

突然ジヨールが声を上げた。

「おっ？ あれって『ゲフェス』？」

懐かしいなあ……」

ジヨールの視線の先には遊園地のような

大規模な施設があった。

「『ゲフェス』……？ 何だよそれ？」

「あ、知らない？」

『フェスティバルゲート』

略して『ゲフェス』よ？」

「あの……ジヨールさん。

『フェスティバルゲート』なら、

『フェスゲ』じゃ……」

「わお、そうかな？」

んく……そうだね。

とにかくアレは遊園地よ、うん」
やっではないないだろうが……

遊園地ならあんな階段はあるかもな

「確かにアレだけデカイなら……」

「どうだろうねえ。」

ま、とりあえず入ってみる？

階段は無くても、

誰か人が居るかもしれないよ？」

「えく……いるかな？」

多分居ないだろ、雰囲気的に」

「まくとりあえず行こうよ。」

大阪の様子、調べなきやでしょ。

和久井くんがいたらラツキーだし」

「確かに……あの階段に行く前に

和久井くんに会って、事情を説明すれば……

でも、そんなに上手くいくかな……？」

少なくとも遊園地に行く、

ってキャラでは無いな。

「いいじゃん、いいじゃん。」

何もなかったら、すぐに出てくればいいワケだし。

ホレ、夢の国ヘレッツツらゴー！」

ジョーは1人、軽快な足取りで

フェスティバルゲートへ入っていく。

☆

ジョーを追ってフェスティバルゲートに入る。

幸い、ジョーとの距離はそれほど離れておらず、

そこまで経たずに追いつけた。

「ジョーさん！ 待って……！」

「お、誰か発見く！」

ホラ、ここに来て大正解だったろう?」

いや……様子がおかしいぞ……!

確かにジョーの言う通り、

フェスゲの中には人間が居た。

こちらを歯牙にもかけず、

虚ろな瞳でキーボードを叩き続けているのは、

白いチャイナ服を着た女性だった。

「……」

それだけだったのなら、まだ良い。

女性は守られるかのように、

数体の悪魔に襲われずに、

作業を進めていた。

「なに、あれ……悪魔があの人を守ってるの……?」

「そんな事ってあるのかよ……?」

「……」

突如現れた赤黒い雷の球体から、

更に悪魔が現れる。

「な……ええっ! 悪魔を更に召喚してるぞ!」

「……おつと、人間じゃん。」

この人間を助けにでも来たのか?

——はは、身の程知らずが。

邪魔されるわけにも行かねえし……

大人しく俺達のオヤツになれよ!

悪魔達がこちらに迫る。

「こ、こつちに来る……!」

あの人が襲わせてるの……?」

「ん、どうにかして

やめさせたいけどねえ……」

殴ってでも止める。行くぞ!

このまま見ても悪魔が増え続けるだけだ!

「お、おう……そうだな。」

あの人を止めるためには、
それくらいしか方法、無さそうだし……！」

「うはは、荒療治。

でも間違えて殺さないように、
気を付けないと……なにか知ってそうだ！」

「大丈夫、怪我してもハトホルなら……！」

全員が一斉に悪魔を召喚し、

女性が召喚した悪魔と睨み合う。

——悪魔使い……！ 不味いぞ……！

——関係ねえ！

悪魔諸共ぶち殺してやりやあいだろうが！

この程度で怯むな！

召喚した仲魔と相対した瞬間、

相手の悪魔がざわつき始める。

——そこからは一方的だった。

1度見せた隙を仲魔は見逃さず、攻勢に出る。

——喋っている暇があるとは、

随分と余裕だな？

悪魔の頭が拳によって潰れる悪魔。

——ガッルア！

反応すらできずに首を喰いちぎられる悪魔。

——そらそらそらア！

戦いがいがまるでねエぞ！

棍棒で殴打され、壁に叩きつけられる悪魔。

——せめて一撃で葬り去りましょう

雷撃に直撃し感電死する悪魔。

大半の悪魔は一瞬で殺され、

残る悪魔も仲間が死んだ事に気づけていない。

一方的に終わるかと思われたが、

再び赤黒い雷の球体から悪魔が召喚される。

……ダメだな、女性をまず叩かないと

永遠に終わらない。

「見た限り、そうみたいだねえ……」

「くっそお……倒してもキリがねえ……!」

「仲魔の体力にも限界があるから……」

「出来るだけ早く召喚を止めないと……!」

女性を止めるのは俺がやる、

ダイチ達は悪魔を可能な限り倒して

気を引いてくれ——白虎!

呼び掛けに応え、白虎が俺を背に乗せる。

白虎は突風のような走りで悪魔の群れに突撃し、

ボウリングのように悪魔達を蹴散らして

女性へと到達する道を作り出す。

白虎から投げ出された俺は地面を数回転がり、

即座に立ち上がって女性へと駆ける。

赤黒い稲妻が見え始めるが、既に遅い。

携帯ではなく、拳を構える。

——必中みね打ち!

正確に当たるように狙って放った拳は

座ったまま動かない女性の意識を奪い去り、

女性はキーボードに頭を打ち付けるように気絶した。

安堵の息を吐く間もなく景色が左から右に流れ、

強い衝撃が俺を襲った。

地面に叩きつけられた痛みを堪えて起き上がる。

「響希! 無事か!」

問題無い……! それより誰が……!

そう返事を返しながら、

俺を吹き飛ばした元凶を睨みつける。

——しぶといな……だが、構ってもいられん。

この人間は我が主の大事なコマなのでな……

まだ失うわけには行かぬ。

拘束具に全身を包まれた様な悪魔が、

片方の掌をこちらに向けながら
もう片方の手で女性を担ぐ。

——では、お暇しよう……

女性の操作していた機材ごと、
悪魔と女性と共に消え去る。

かろうじて間に合ったN i c a e aの情報には、
『ボテイス』とだけ記されていた。

(19) 誤解

一瞬、全員が呆ける。

「えっ……あの悪魔が連れていったの……？」

ど、どうして……？」

気を抜くな！ 悪魔はまだ……！」

「そうだね、まずは悪魔を片付けるのが先だ」

「もう召喚されて増えないみたいだしな……！」

これなら……！」

十数分も経たずに、フェスティバルゲートを

占拠していた悪魔は俺達の手により全滅した。

☆

「ふいっ……。な、なんとかなったあ……」

「うん……あのまま増え続けてたら危なかったね……でもあの女の
人、なんだったのかな……？」

「んっ確かにねえ……あの子、

どう見ても普通には見えなかったし」

操作していた機械が調べられればな……」

機械ごと持っていかれるとは……」

「うくん……。こんなトコで機会いじって、

変な悪魔に連れていかれて……」

マジ意味わかんね……」

どういう意味だよ、アレ」

そんな事を話していると、

数人のジプス局員が突入してきた。

「全員、動くなッ！」

ジプス局員は全員がこちらに向けて

携帯を構え、敵意を放っている。

「えっ……？」

ど、どうして……？」

「とぼける気か？ お前たちがか犯人だろう。」

大人しくしていれば殺しはしない……

身柄を拘束させてもらう！」

待て、話が見えない。

協力関係にあるはずのジプス局員から、
このような扱いを受ける覚えはない。

何があつたんだ……？

「そ、そうだよ！ 待てって！」

意味が分かんねえよっ！」

「ん……待てよ？ 君達達どこかで……」

「もしや……東京から峰津院局長に

同行してきた方々じゃないか？」

「あ……はい、そうです」

ジプス局員達がこちらの顔を見てざわつき始める。局員同士の会話が進むにつれ、こちらに対して向けられていた敵意は薄れていく。

「そうなる……」

済まない、少し本局と連絡を取る。

後で話を聞きたいから、

連絡が終わるまで待っていてくれないか？」

分かった。その代わり、

こちらからも聞きたいことがある。

局員は頷いて了解の意志を示し、

携帯でどこかへ連絡を取り始めた。

☆

連絡が終わったのか、

ジプス局員は携帯をしまい

こちらに深く頭を下げた。

「……失礼した。先刻、本局のサーバーに

ハッキングをかけられてね」

「ハッキング？ はあ、そりゃ大変だ」

「ああ、発信源を突き止めて我々が急行した次第だ。君達誰か見な
かったか？」

「あ……い。あの女の人……」

確かに、俺達以外であそこに居たとすると
悪魔かあの女性しか居ない。

それらしい機械を操作していたとなると、
間違いないと見て良いだろう。

疑わしい人物とは接触して、交戦になった。

永遠と悪魔を呼び出されて一発お見舞いする事しか出来なかった
が……。多分あれは悪魔に利用されて操られていると思う。そうで
も無いと、人間が悪魔に守られる理由がない。

「悪魔に……？ その人物は今どこに居るか分かるか？」

ダメだ。結局悪魔が機材ごと女性を連れ去った。

「そうか……情報提供感謝する。」

それと、疑ってすまなかった」

「とりあえず、俺たちじゃないって

分かってくれたか……よかったあ……」

「ジプスと敵対なんてしたら、

俺たち知らない土地で宿無し飯無しだもんね。

そりゃあキツイ……いや、ホントに」

「しかし、悪魔に人間が操られるという例は

聞いたことが無いな……」

あの悪魔はなんと言うか……

悪魔としての『格』が高いように見えた。

その影響じゃないか？

悪魔にはハッキングなんて無理だろうし……

その方面に詳しい人間なら

操ってやらせた方が効率がいい。

「ふむ……有り得るな……了解した。

ハッキング……悪魔……女性か。

急いで調査する必要が……」

大変そうな所すまないが……

ジプスから死に顔動画について聞いているか？

「ああ、実際目にしてはいないが、
信憑性が高い未来予知として報告は受けている。

……まさか今も届いて？」
そのまさかだ。この場所に覚えは？

局員に死に顔動画を映した携帯を渡すが、
反応は芳しくない。

他の局員にも見せるが、同様の反応だ。

「すまない……我々本局のジプス局員全員が
その土地の出身という訳では無いんだ。

ジプスは才能がある人材を寄せ集めている性質上、全国……いや世
界中から優秀な人材が日本各地へ派遣される。本局に戻れば土地勘
のある局員も居るだろうが……力になれなくてすまない……」

いや、いいんだ。どちらにせよ

現地の人間に接触はするつもりで——
プルルル……

局員の携帯が鳴り、

一言断ってから局員が通話に出る。

「ああ、私だ。ハッキングの件ならば……」

何だと、また悪魔が!?

分かった、急ぎ対応する!

まず座標を転送してくれ、後はこちらが……!」

ジプス局員達はこちらに

目礼して、急ぎ足でフェスゲから立ち去った。

「うわ、会話は大体察せるけど、

大阪も悪魔でいっぱいみたいだ」

「うん……私達も気を付けないと……」

「しっかし……動画の場所は結局何もわからずかあ……また別の人
を探すしかねえか……」

別の人と言ってもな……

大阪を歩き回って分かったのは

『人が居ない』という事だ。

局員の会話からすると

悪魔が大量発生している影響で

どこかに避難しているのだろうか。

「ヤマトさんの言ってた、

『災害の原因』って、この悪魔の多さなのかな……………」

「わかんねえ…………マジで何が起こってんだよ……………」

「やれやれ、何だか大変だったね。

君たち、お疲れくん！」

あいな…………

次から1人で突っ走るのはやめてくれ…………

「やく、ごめんごめん。

でもアレだね。悪魔に操られる女の子なんて、

ちよつと気になるよね。

まゝ、新しい情報手に入ったしき、

また一歩前進だね！」

「あ、アンタが言うなっ……………」

全員でその場を後にした…………。

(20) 西の洗礼

なんば、えびすばし戎橋。

ここも相変わらず人気が無い。

「うくん……これじゃあ死に顔動画の場所、

全然わかんねーよお……」

仲間達の顔に少しづつ疲れが見えてきている。

そろそろどこかで休むべきか……

「そうだね……でも頑張ろう？」

和久井くん、死んじゃうかもしれないし……」

『きやああつ！ 化け物つ、化け物や……！』

橋の反対側から女性の叫び声が聞こえてくる。

「な……何だあ!? 今、化け物つて……！」

「まく、十中八九悪魔だろうね……」

「う、うん……襲われてるなら、

助けた方がいいよね……」

相談していると、

駆け足で橋へ向かってくる女性が現れた。

まだ冬も終わっていないと言うのに、

露出度の高い服装をしている。

「そこ、邪魔やつ！ どいてっ……！」

「きやつ……！」

新田さんが言われた通りに

道を開けようとするが、

女性はそのまま押しつけて

悲鳴の方へ向かっていく。

大丈夫か？

「あ、大丈夫……ありがとう。

今の人、悲鳴の方へ行つたね……

私達も、行かないと……」

「おいおい、相手は悪魔だろう？」

……召喚アプリもない人間が、
勝てるわけないでしょ」

……急ごう！

「わわわわっ！ 何だよっ、行くのかよっ！」
全員で女性を追いかける。

☆

「た、助けて！ 殺されるっ……！」

「出た……悪魔っ！ 早よ逃げ……！」

ウチが何とかする！ 行くで……！」

——ペリ！」

女性の傍らに、

踊り子風の衣装を着た女性が現れる。

軽やかな足取りで舞のような踊りを見せる

彼女は、人間と変わらないような容姿だ。

然し、決定的に違うのは

背中に生えた両翼だろう。

翼は羽ばたく事はせず、

ただヒラヒラと風に揺れるのみ。

だがその翼までもがまるで

踊りの1部であるかのようにも見える。

「きゃあっ！ あ、アナタ……」

人間なのに、悪魔を……!？」

「安心しい！ ウチはアンタらの味方や！

そっちの悪魔は任せとき！」

「み、味方やて……？」

信用して大丈夫なんか……？」

信用していいのかどうか

決めあぐねている女性の元に、俺達が追い付く。

「あららら〜？ 参ったね、あの娘。

悪魔使いじゃないの？」

「お……俺たちって要らない？」

だったらここは、あの子に任せてさ……」

何言ってるんだ、折角の現地人……

それも話が通じそうな同じ悪魔使い。

恩は売っておくべきだ。サツサとやるぞ

こちらが女性に近付くと、

向こうも気付いたのかこちらに声を掛けてくる。

「……そのアンタら！」

何をごちやごちや話しとるのか知らんけど、

こつち来たらアカン！ 早よ逃げや！」

大丈夫だ、俺達も戦える。

「え……う？ って事はアンタら、

悪魔使いなんか？ やつたら丁度ええ、

この人ら逃がすから手伝うて！」

任せろ。やるぞ、白虎！」

「う、うん……あの人たち、助けなきや……！」

各々が悪魔を召喚していく。

「とりあえず、悪魔を倒すより

襲われてる人達を逃がす方を

優先した方がいいのかな？」

「わ、分かった……！」

こうなったらやったらーじゃん……！」

「助かるわ……！ 絶対みんな助けるで！」

アンタらもやけど、1人も死なせたらアカンっ！」

「わ、分かったあ……」

けど1人で戦うのは危険だから、

みんなで協力を……って聞いている!？」

ジョーの話を無視して

女性は悪魔の方へ走り出している。

「……参ったな、こりや。」

あの娘も助けながら戦わなきやダメみたい」

「お、おい……あの人ド真ん中から

悪魔に突っ込んでくんですけど!?
俺たちも急がないとヤバくない!?」
「とりあえずあつちは任せろ……!」

☆

脚の震えは無視する。

それを認めてしまったら、

この場で助けられる命も

助けられない気がするから。

——舞をされていてよかつたと、

心の底から思えたのが舞やなくて

人命救助なのは……皮肉やな。

「行くで、ペリ！ 雷の乱舞！」

——はい……!」

ペリが優雅な仕草で手を大振りに払うと、

手の軌道上に雷が生じ、纏めて悪魔を穿つ。

耐える悪魔も居るけど、ソイツを

ウチが仕留める。

「くたばりや……!」

雷の乱舞を耐えた気色悪いピンクの鳥頭に、衝撃波を叩き込む。

リーダー格の悪魔をそのまま倒すと、

従っていた悪魔は這う這うの体で逃げ出す。

「本当はアイツらも仕留めておきたいんやけど……助けるのが先や。

まだまだ行くで！」

——ヒナコ、後ろ……!」

「後ろ……?」

振り返ると、今まさに白い兎が

首筋に噛み付こうと迫っていた。

(アカン……避けられ——)

咄嗟に腕で庇おうとするが、

当然間に合うはずもなく。

その場に赤い血が飛び散る。

その血は白兎の毛を赤く染めていき、
やがて兎が力無くだらりとなり
光の塵となつて消える。

兎は白虎に首元を食いちぎられ、
絶命していた。

よくやった白虎……！

アンタ、怪我は無いか？

「いけるで！ おおきに！」

とりあえず、こつちの悪魔は俺達でやろう。

一般人は他の仲間が誘導してくれてる。

「分かった！ ウチとペリの腕の見せ所やな……！」

☆

「ヒイツ……化け物……！」

「だから……！ ここにいたら

別の化け物に殺されるんだって！

あつちからなら逃げれるから

従つてくれよ頼むから……！」

「ば、化け物を操ってる奴のことなんか

し、信用できるか！」

強気な言葉を放っているが、

一般人達は腰が抜けてしまっているようだ。

それを抜きにしても悪魔使いの印象は悪い。

大人しく従つてくれはしなそうだ。

「ありやりや……これは厳しいね……」

「うん……ここまで恐がられるなんて

思つてもみなかつたけど……あ、そうだ……！」

イオが数歩一般人に歩み寄る。

その姿にすら一般人は怯えを見せている。

「な、何だよ……！」

無理矢理従わせようつてのか……!？」

「……ある意味、そうかも。」

でも、ごめんなさい……
セクシー^{全魅了}レイ！」

イオの手先から濃い桃色の光が放たれる。
その光を目にした一般人達は、
徐々に体から力が抜けて、
ボーツとし始める。

「えーっと……新田さん、何したの？」

「あの……一時的に魅了を……」

「ほく、俺には考え付かなかつたよ。
やるねくイオちゃん」

「あ、ありがとうございます……
えつと、それじゃあ……」

安全な場所に行きますから、
皆さん着いてきてくださいー！」

「「はい……」」

「ふいふ、逃げろって言つても
従わなかった時はどうなるかと思つたけど……
無事避難させられそうだなー！」

「いやふ、それでも無いと思うよう？
だって、ほら……悪魔のお出ました」
ジョーの指さす先には

続々と逃げる方向に現れる悪魔の姿が。

「響希くん……は今あつちだし……」

私たちで、頑張ろう……！」

「おう……！」

頼りっぱなしなもの

格好がつかないからな……！」

「よくし、ぱっぱと終わらしちやおうか」
悪魔と悪魔が激突する。

(21) 九条緋那子

白虎の前足が人骨頭の鳥イツマデの頭部を捕らえ、
そのまま勢い任せに地面に叩き付ける。
頭蓋骨が粉碎された悪魔はもがくように
羽ばたいていたがその翼すらも
次第に力を失っていき、

最期には光の塵となつてその姿を消す。

気付けば橋にいる悪魔は、

先程倒したもので最後のようだ。

よくやった白虎……

これでこつちの悪魔は全部か？

「そうやな、特に増援やらも

あらへんみたいやし」

辺りを見回しながら

悪魔使いの女性はそう答える。

「あ、せや。助けてくれておおきに」

礼はいい、それよりダイチ達は——

「ああ、来てんで。

ほら後ろ、アレちやうん？」

言われた通りに女性の指さす方へ振り向くと、

手を振りながらこちらへ向かつてくる

ダイチ達の姿が。

「響希！ 襲われた人は避難させてきた！」

「うん……なんとか無傷で逃がせた、かな？」

「いや、動いたから腹減っちゃったよ」

お疲れ様、こつちも片付いた。

女性は朗らかに笑いながら、

改めて俺達に向けて話し掛ける。

「手伝うてくれておおきに！」

ウチは九条緋那子。よろしゅうな！」

「快活に自己紹介をするヒナコに
各々が名乗りを返す。」

「全員の名前を聞いたヒナコは、
笑顔を引つ込め、真剣な顔で問う。」

「ところで……アンタら悪魔使いやんな。」

「ほな、黄色い服着て、」

「悪魔と戦つとる連中の事知らん？」

「は？ 黄色い制服……？」

「ジプスだろう。」

「あつ……そう、それや！」

『JP, s』つて、マーク入つとつたもん！」

「あゝ、そゆ事ね。」

「確かに俺達はジプスの仲間？」

「協力者？ みたいなものではあるかも」

「あ、そうなん!？」

「せやつたら紹介して。」

「ウチ、仲間になりたいねん」

「必死、という訳でもないがヒナコは」

「頼みの綱を見つけた様に頼み込んでくる。」

「どうやらジプスに入りたいようだが、」

「ジプス自体が存在を隠された組織。」

「悪魔と戦闘する局員に直接話しかけても、」

「本部に向かつても」

「軽くあしらわれるだけだろう。」

「だが、俺達から紹介するという形ならば、」

「確かに直接交渉よりは可能性がある。」

「は……入りたいって言われても、」

「私達……正式にジプスの局員つて訳じゃ……」

「……？ 違うん？ ほなアンタら何？」

「民間人の協力者だ。」

「東京からこの災害の原因を」

調べに来ただけで、

そこまでの権力は……正直無い。

「そーそー。」

俺達はジプスの局長に

ついてきたオマケだからさ」

「へえ……そうなん？」

んくならまあええわ。

ほな、その局長さん紹介して」

「まあそうだな、だから諦めて……

ジプスの局長を紹介……!？」

アイツを!？」

ヒナコはマイペースな調子を崩さずに、
自分という悪魔使いを売り込んでくる。

「ええやろ？ ウチ悪魔使えるし。」

役に立つと思うんよ」

「いやあ……その。」

どうなんだろう、響希……」

……紹介してもいいが、交換条件がある。

「お、ええで。言うてみな。」

せやけどエッチなのはアカンで？」

「ちよ……!？」

「だってさ響希くん。どうする?。」

「え……!？」

ヒナコの爆弾発言に、

仲間の視線が俺に集まる。

動揺する目、面白がる目、不安がる目。

全て無視して携帯を差し出す。

———死に顔動画が届いた事はあるか。

☆

「死に顔……動画……」

ヒナコの顔は恐怖と動揺の色に染っている。

届いた事は有るみたいだな。

「当たり前やん……」

この動画が届いてへん悪魔使いはおらへんと思う」

動画に出てくるのは大阪本局の……

俺たちと同じような立場の悪魔使いだ。

名前は和久井啓太。

「そうなんや……」

せや、動画の場所に急がな！」

「あ……お、落ち着いてください。

だから私たち、

その場所の事、聞きたくて……

響希くんも、動画を見せたのは

その為、だよね？」

ああ、現在の俺達の目的は2つ。

災害の原因と和久井の死亡場所の特定。

ヒナコが知ってそうなのは、

死亡場所くらいだったからな。

「あ……そ、そっか。

ごめんな……焦つてもうて」

「はい……そういう事、です。

なので、場所を……」

私達にこの土地^{大阪}勘はないですから」

お願いします、と新田さんが頭を下げる。

その様子を見たヒナコは強く頷く。

「ええよ、その場所は

知ってるさかい、教えたる。

やけど、ちゃんと

局長さんに紹介はしてや」

元よりそのつもりだ。

そもそも、助ける奴を見つけないと

大阪本局の場所も分からない。

「それ先に言うてや！」

どちらにせよ助けるしか

あらへんやんけ！」

☆

大阪の街を移動しながら、

ヒナコは改めて動画を見直しながら

死亡場所について話す。

「動画で映つとつた場所、

あれは多分ビックマン前の階段やで

うん、間違いあらへん！」

「おお、よっしゃ……！」

場所がわかつたぜ！

これで何とかなりそう……！」

「ん、ビックマン前ってたしか

待ち合わせ場所じゃなかった？

ほら、14時半にビックマン前に居たら

迎えに行つてやるつてさ」

だったら14時半近くに起きるか……

上から落ちてきてたのを見ると、

もっと早く行かないと防げないと思うが

「う、うん……今が13時半だから……

急がないと……！」

「ほな、ビックマン前に行こか、

案内するさかい」

頼んだ

「ビックマン前は行きなれてるさかい、

ウチに任せてや！」

ヒナコを先頭にして戒橋を後にした。

(22) 淀川

梅田 ビックマン前に

ヒナコの案内でやってきた。

「さて……着いたで！」

「ここがビックマン前や」

「お、()が……！」

ちよつと早く着いたけど、

アイツはまだ来てない……か？」

待ち合わせの時間は14:30。

対して現在時刻は14:00。

早すぎる、とまでは行かないが、

時間的に多少の余裕があるのは確かだ。

「うん……どうしよう？」

他の場所も探した方がいいのかな」

「そうだなあ……うくん。

どうしたモンかね。

また後で来るとか……」

いつの間にか登ったのか、

ジョーは階段から降り、首を振る。

「ん〜ダメだね。

ちよつと見て回ったけど、

来てないっぽいよ、和久井くん」

「せやなあ……」

死に顔動画の場所は、

ここで間違いないねんけど……」

災害や何かがあつて遅れてる……

とかはありそうだな。

「あ〜なるほど。

道路とかボロボロな所、あるわ。

火災もまだおさまってないしな……」

「あく大阪もそうなんだ？」

うくん、なるほどね。

……あく俺、ちよつと思っただけど、
どうかな？」

……なにがどうなんだ？

「あ、そっか。まだ内容話してなかった。

ははは……自分の頭の中で完結してたよ」

「で、何だよ。

ジョーさんが思っただ事って？」

「あのさ、東京も大阪も、

結構やばそうじゃない？

これって……どこまで壊れてるんかね」

「どこまでって……」

東京と大阪が壊れてるんやから、

関東と関西と、後は……」

「そうそう、そこだよ！

本州は被害にあつてそうだけどさ、

それ以外の場所は……

例えば北海道とか。

あ、東ティモールは？」

ティモール……？」

「あれ？知らない？

東ティモール民主共和国。

シャル・ウィ・ちもくる？」

「えつと……確か東南アジアにある国

……だったと思う」

「ジョーさんの冗談は置いていて。

確かに自分で見てないトコは

全然わかんないよな。

今テレビとか無いし」

「会ったばかりだし

あんまりようは分かってへんのやけど、
つまりジョーが言うてるのは
実際に被害を受けてるところを
見に行こうって事なん？」

「そそ、そういう事。」

みんな気にならない？

どうなってるのかさ、

実際に近くで見に行こうよ。

元々災害の原因を調べに来たんだしさ」

時間には余裕がある。

確かにいいかもしれない、

と思い始めたところに、

ふと視界に入った新田さんが

何か言いたそうにしているのが見えた。

新田さんは、何か意見ある？

「あ……うん、少しなら見られると思う」

「は!? テイモールを？」

「あ、ううん……ごめんね、

テイモールじゃない……」

申し訳なさそうにしながらも、

新田さんは話を続ける。

「でも……今まで広いトコとか

行ったことないでしょ？」

だから、この辺で良いなら……」

「おーそっか。」

少しはテイモールに

近づいちゃう感じだ？」

「テイモールは関係無いだろ！」

……でも、さすが新田さん！

いい案かも知んないよ、な？」

そうだな……

ここで時間を無駄にするのも
勿体無いし……何より、
待ち合わせが14:30なら、
ここを逃すとそんな場所を
見てる暇なんて無いと思うぞ。

「あ……そっか。
会議が終わるのが15:00なんだっけ……」
だから行ってみよう。

ただし離れ過ぎない所だな

「九条さん、この辺で広いトコって
どっかあるかな？」

「それなら淀川がええわ！」

あそこなら回り、見渡せるで？」

「あ……淀川、大きいかも。

見えるかもしれない」

パン！ と拍手を鳴らし、

ヒナコが全員の顔を見る。

「ほな……みんな行くでええよな？」

淀川ならこの近くやし、案内するわ。

ついておいで！」

「はい……お願い、します……！」

☆

淀川。

開けた場所から辺りを見渡すと、

やはり街の至る所から黒煙が見える。

「あ……」

「うわ……マジかよ、こんな……」

大阪の街はほぼ全域が崩れていた。

ビルも崩壊していないものを

見つけるのが難しい程だ。

「……街中を見て分かつてはいたけど、

改めてこう見たら……キツいなあ……

ウチの大阪がこんな……」

「おわ……大阪って、

こんなに壊れちゃってんだ」

「信じられへん……」

想像以上にアカンやん……」

「……いっ……なあこれって、

もしかして東京も……！」

確かにこうやって

見渡したことは無かったが……

同じだろうな。

「うん……分からなかったけど、

もしかして、東京も

こんなふうだったのかも……」

改めて街並みを見渡す。

無事な場所を見つけるのが困難な程、

相当広い地域が被害を受けている。

「冗談じゃねえ……」

テロだってこんなには……

もう戦争レベルじゃんか」

「これじゃあ救助活動なんて……」

全然、期待できないよ……」

峰津院さんが言ってた、

『待つても助からない』って……

こういう事、だったのかな……」

こんな様子では人々は自分の事で

精一杯だ。誰も救いの手なんて

差し伸べちゃくれないだろう。

助けたとして、どうなる。

一致団結して助け合おう。

言葉だけは綺麗だが、この状況で

纏まって移動なんてすれば

街中にウヨウヨいる悪魔の工サだ。

「原因を探れば助かるかもって、

ヤマトは言ってたけど……。

これじゃ、何をどうすれば……」

「うん、ちょっとわからない、かな」

時計を見ると、14:30が迫っていた。

もう戻らないと死に顔動画の場面に間に合わないだろう。

……そろそろ時間だ。

ビックマン前に戻るぞ。

「……まあ、ここにいても

仕方ないからねえ」

全員で淀川を後にした。

(23) 悪魔時々瘴気

再びビツクマン前にやってきた。

14:30分丁度、心做しか全員焦っているようにも思える。

「さくつと……。」

今度こそ時間だけど……

和久井くん今度こそ来てるかな？」

「来ててくれよ……」

ここで捕まえられなきや、

もうチャンスねーもんよ……!」

「……ん？　もしかしてアレかいな！」

ヒナコが指さす先には、

確かに数時間前に見た背中がある。

「へ……う？　おわわつ、いた!?!」

「ん……う？　よお、東京モン。」

「……何や、その女？」

和久井啓太はダイチの声に振り返り、こちらを見る。相変わらず機嫌が悪そうにこちらを睨みつけている。その目が訝しげにヒナコを睨んでいた。

ジプスに入りたらしい。

悪魔使いだから問題は無いだろうと。

「……アホウ。そないな気軽に

入れるもんちやうぞ、ジプスは」

「やっと見つけたぞ和久井啓太あ！」

お前、どこにいたんだよ!?!」

「……ああん？」

そんなん、お前に関係ないやろ。

ほつとけや」

ダイチにイラつきながらも、

ある意味余裕そうだ。

どうやら死に顔動画が届くのは
本人には本当に知らされないらしい。
焦ったようにダイチがまくし立てる。

「それがほっとけねーの！」

お前、やばい事になつてんのお！

こつちの苦労も知れつーの……！」

「……？」

キャンキャンうるさいのう。

やかましいわ、アホウ」

ケイタは威圧しても引き下がらない

ダイチの様子に疑問を覚えたのか、

不思議そうな表情をする。

「あ、あほう!？」

コイツ、可愛くないわ……！」

はあ……ま、とりあえず一安心だわ。

いいか、さつきN i c a e aから……！」

「……うわあああつ！」

悪魔や……！」

みんな、早よ逃げえつ！」

ダイチが詳しい説明をしようとする

と、数人の人が流れ込むように

ビツクマン前に逃げてくる。

「……！ 話は後や。」

お前らはここで待つとれ」

小柄であるが故にケイタは

その俊敏性を活かして、

滑り込むように逃げる人々の流れに

真つ向から突つ込んでいく。

「……!？ わ、和久井くん……！」

「おいおいおいっ！」

何だよコレ、どうすりゃいい!？」

不味いな……多分だが
ケイタはこれで死んだんだ。

「あ……階段……！」

和久井啓太の自信は恐らく
自分の絶対的な強さにある。

それでも無いなら悪魔が溢れる

この状況で単独行動して、更に

集合場所にまでやってくるなんて、

かなりの強さが無ければ不可能に近い。

然し、和久井啓太は死んだ。

だがそれは悪魔が原因ではなく、

階段から転げ落ちたことよつてだ。

悪魔自体はそのまま戦つていても

倒せたのだろうか、戦いながら

立地を確認することを怠つた彼は、

階段から落ちてそのまま死亡した。

恐らく、和久井啓太の向かう先には

あの階段がある。

「……！ ホンマや、ヤバいやんか！」

「……だあく！」

まだピンチが去つたワケじゃない!?

これからがピンチなのかよ！

仕方ねえ……行こうぜ、響希……！

じゃないと、アイツ死んじゃう！」

ああ、ここまでやらせたんだ、

絶対に助けるぞ！

「せや……！」

ウチが、ウチらが絶対に助けたるで！」

全員でケイタを追う。

☆

弱い人間は好かん。

「ヒイツ……！ あ、悪魔……！」

「だ、誰か……助けて……！」

すぐ助けを呼ぶ。

自分で出来へんから。

「出来るようにせえへんかったから、

やろうが……！」

弱い人間は好かん。

然し、弱い人間を助けるのは、

強い人間や。ここで逃げたら、

そいつは弱い人間や。

だから、助ける為に走る。

「来い、ベルセルク……！」

走りながら見えるだけでも、

一人で倒すには厳しい。

だから、相棒を呼ぶ。

——オオオアアア!!!

獣の皮を被った戦士が

雄叫びを上げる。

「……邪魔や！ サツサと失せろ！」

悪魔に怯えるヤツらに

声を掛けてやる。

変に巻き添えになって

死なれても、気分が悪い。

「え……？ で、でもアンタは……」

「フン……ほっとけや。」

あの悪魔は俺の獲物や。

サツサと行けや、アホウ」

「わ、分かったわ……」

ありがとう……！」

——逃がすか……！」

悪魔が逃げるヤツらを追おうと、

横を通り抜けようと近付いてくる。

「――追わせると思うか？」

言ったやろう、ジブン達は全員、

俺の獲物や！」

手始めに一発、

悪魔の顔面を殴り飛ばす。

☆

「はあ……はあ……」

やっと追いついたわ……

ちよお……アンタ！

何を一人で突っ走っとなねん！

自分の立場、分かっとなるんか!？」

息を切らしながらケイタと悪魔が

戦う階段前に辿り着いたヒナコは、

息を切らしながらケイタに文句を垂れる。

悪魔の一体を殴り飛ばしたケイタが、

更に迫る悪魔を蹴り飛ばしながら

面倒くさそうに答える。

「……ああん？」

何しに来たんや、お前。

待つとれ言うたやろが」

「……アカン、ウチも戦う！」

ウチかて悪魔を使えるんや……!」

決然とした態度でヒナコは

携帯を構え、ペリを召喚する。

「チツ……知らんぞ、アホ女」

「ひゅ……!」

何とか追いついたね。

こりや手助けしないと」

「あつぶねえ……!」

何だよ、もう!

「一安心だと思っただのに！」

ケイタとヒナコに追いついたはいいが、俺達の目の前で悪魔が更に数体増え始める。

「……………悪魔が……………増えた……………？」

「……………いちいち騒ぐな。」

あれは『瘴気』言うらしい。

ジプスの連中がそう呼んでたわ」

突然現れた悪魔の足元をよく見ると、

確かに紫色の煙の様なモノが

そこにだけ渦を巻くように漂っている。

風が吹いても他の場所に流れないのを見ると、

やはりただの煙ではないらしい。

更に紫色の煙へ目を凝らすと、

瘴気の中に携帯電話の姿が見えた。

瘴気の原因は携帯電話……………？

継続して召喚し続けているのを見ると、

召喚アプリが暴走してるのか……………？

「だったら携帯を壊せば

止まるはずやで、きつと！」

壊さないとキリが無いしな……………

全員、余裕があればいい。

瘴気の中の携帯を破壊するんだ。

「……………ま、俺は構わんけどな。」

悪魔と戦えるなら好都合や……………！」

「俺らが困るんだっての……………！」

そう話しているうちにも、

悪魔はこちらに押し寄せてくる。

(24) 激闘、なにわ魂!

ケイタが拳を構える。

「ぶっ飛んで死ねや——暗殺拳」

迷い無く急所を狙う一撃。

悪魔が避けようと動いた時には、既にケイタの拳は悪魔の心臓を穿つ。

「フン……次はどいつが相手や?」

放たれる強烈な殺気と闘志。

ズサツ、という音と共にケイタから

逃げるように悪魔の群れが距離を取る。

和久井啓太と相對する悪魔全てが

ケイタに気を取られ、忘れていた。

怒り狂う戦士の存在を。

ベルセルクは血が乾いたかのような

濁った赤の剣を全力で振りかぶり、

数体をそのまま強引に切り裂く。

死体から散る光の塵が次々と舞う。

☆

「ペリ！ 雷の乱舞！」

——お任せを……!!

悪魔が密集する地帯に

数本の雷撃が放たれる。

直撃して死ぬ悪魔、

雷撃自体を回避する悪魔。

それぞれいるが、どちらにせよ

雷撃を撃つた場所に向けた空間が出来る。

その隙を見逃さずに、

ヒナコは瘴気の中に手を伸ばし、

携帯を折って破壊する。

「……よっしゃー！」

「暴走しとる携帯を壊したで！
瘴気も消えたっ！」

ヒナコの言う通り、
携帯を壊すと同時に

瘴気は消えるが、瘴気によつて
召喚された悪魔はまだ残っている。

駆け回れ、白虎！

白虎に騎乗しそう指示を出す
と白虎は指示通りビツクマン前を

円を描くように駆け回る。

流れる景色に吐き気を催すが、

堪えて携帯を周囲に向け、

出てくる情報を確認する。

———これなら……行ける。

☆

「よっしや……こつちの携帯壊したぞ！」

「うん……こつちも……！」

「うひゃく、いくら何でも

多すぎるよね、悪魔。

俺もアレ……なんだっけ、

瘴気だっけ？ 消しといたよ」

全員差はあるが疲弊の色が

見えてはいるものの、

それぞれが仲間に報告する。

「これで全部瘴気は

取り除いたみたいやな……」

ヒナコの言う通り、

この場の瘴気は全て仲間によつて

取り除かれ、残るは瘴気から出てきた

悪魔のみとなった。

だが仲間達は既に疲弊し、

戦える状態とは言えない。

幸い傷自体は回復しているが、肉体の限界というものはある。

だが悪魔は順調に数を減らしている。

現在4人が休んでいても、

着実に悪魔は減り続けているのだ。

原因は残る2人。

単純な攻撃力のみで

悪魔をも圧倒する和久井啓太と

狂ったように暴れ回るベルセルク。

そしてもう1人。

常に動き続け、白虎に乗ったまま

氷の乱舞を放ち続けている久世響希だ。

既に2桁以上の悪魔を倒しているが、

限界が近いのかその頻度は落ち始めている。

その姿を流石に見兼ねたのか、

ケイタがヒビキに向かって怒鳴る。

「チツ……休んどけモジャモジャ頭！」

ここでぶつ倒れられても邪魔なだけや！」

いいや……白虎、まだ俺は……やれる……

か細い声でそう訴えかけるが、

全身は震えて顔色も悪い。

氷の乱舞を出し続けた影響か、

久世響希の肉体は冷え切っていた。

落ちないように白虎を掴む手にさえ

力が入っていない有様だった。

———なんだ、その有様は

呆れたように、白虎が口を開く。

ダイチ達の所へヒビキを運び、

ヒビキが介抱され始めたのを確認すると、

自らは悪魔へと立ち向かっていく。

——いいからあの小僧の言う通り、
休んでおけ。後はオレに任せろ。
その言葉を聞いた久世響希は、
震える手を白虎へ
伸ばすことしか出来なかった。

☆

残る悪魔は少ないとは言え、
悪魔使い1人で対応できる数ではない。
ヒビキやダイチ達含め
数の暴力によってそれぞれの
仲魔は傷付いており、
まともに戦えるようになるのには
時間がかかる。

現在満足に戦えるのは
殆ど一撃で悪魔を倒している
和久井啓太とその仲魔ベルセルク、
そしてヒビキの無理な戦闘によって
結果的に体力を温存していた
白虎しかない。

1人と2体が並び立つ。

「ジブン、なかなかやるみたいやな。
獲物を渡すのは癪やが……」

手早う終わらせんならしゃあないか」
白虎にそれだけ言うと、
和久井啓太は不敵な笑みを
浮かべながら掌と拳を打ち鳴らし、
意気揚々と悪魔へと突っ込んでいく。

——ウオオオア……!!!
ベルセルクもまた己の武器を構え、
悪魔の元へ突撃する。

………。

チラリと自らの主人を見る。
力無く寝転がってはいるが、
しきりに立ち上がろうと試み、
その度に仲間に止められている。
何があの少年をそこまで急ぎ立てるのかは、
人ならざる悪魔の身では知る由もないが、
どちらにせよ自分には関係ない事だろうと
割り切り、白虎は戦闘に集中するために
ヒビキの事を脳内から切り離す。
逃げ惑うかのような有様の悪魔達は
既に白虎にとって単なる獲物でしか無い。
牙を剥き、目にも留まらぬ速さで
白虎は群れへ飛びかかる。
その後、10分も経たずして
ビクマン前は静寂を取り戻した。

☆

ハトホルの回復のお陰で先の戦闘で
受けた傷は殆ど癒え、
歩けるまでには回復した。
白虎は悪魔を倒すなりこちらへ戻ると、
尻尾で俺の顔面を殴ってから姿を消した。
怒らせただろうか、然しあの状況では。
そんな思考がぐるぐると巡る。
確かにあの時は冷静では無かった。
和久井啓太を死なせまいと焦り、
結果的に自分を死ぬ直前までに追い込んだ。
前まではどうだっただろうと
思い出そうとしても、
思考に霧がかかって上手く思い出せない。
召喚アプリを手を取ってから、
自分の中で何かが変わり始めている。

そんな思考が頭を過るが、無視する。

悪い、焦っていた。もう大丈夫だ。

「お、おう……あんまり無理はすんなよ」

「うん……もう、痛い所とか無い？」

大丈夫だ、本当に。

「やったで……！」

何とか助けられたわ！」

「……助けただあ？」

何抜かしとんねん、お前」

ヒナコのその発言に対し

不審げにケイタが突っ込む。

「あ、あの……和久井くん。

け、怪我とか……無い？」

怯えを見せつつもケイタの心配をする

新田さんに対しても

やはりケイタは不審げに突っ込む。

「……？ 何やねん、お前も。

ナメとんのか、コラ」

一触即発の気配を察知したのか

新田さんとケイタの間に

滑り込むようにしてダイチが説明に入る。

「おっと、待て待て。

違うんだ、実はさ……」

ダイチはケイタに

死に顔動画の事を話した。

☆

「この動画は……」

俺は死ぬはずやったって事やな？

……お前が焦ってたんはこれか」

ケイタはじつと俺を見てくる。

「なるほどな……」

これも『N i c a e a』の機能いうワケか。
フン……俺が死ぬなんて認めんのは癪やが
……礼だけ言うといたる」

「ま……そういう事や！」

感謝しい、ケイタ！」

ケイタはバンバンと背中を叩く

ヒナコを鬱陶しげに睨み、

こちらに対して説明を求めてくる。

「……せやから何やねん、お前。

どこから湧いて出たんや？」

「あ……せやせや！」

ウチ、ジプスに入りたいねん。

本局、案内してくれるんやろ？」

「ああん……？ お前がジプスに？」

やめとけ、お前なんぞに……」

その言葉を待っていたかのように

ヒナコは小柄なケイタの顔を覗き込むように

体を横に逸らして煽り立てる。

「お前なんぞに……何やねん？」

アンタを助けたったのは、

誰やったっけ？」

「……クソツタレ。好きにせえ。

本局は新世界や、案内したる」

「……お、やったで！」

ちよお待ちいや、ケイタ！」

踵を返してビツクマン前から

去ろうとするケイタを

跳ねるようにヒナコが追う。

「うわ、おいちよつと！」

……行っちゃったよ。でも良かったぜ。

何とか和久井のヤツを助けられて」

「うん……そうだね。」

頑張った甲斐、あったよ。

みんな、お疲れ様」

「はは、特にヒビキくんはね。」

それじゃ2人を追おうか？

ずいぶん先に行っちゃったよ」

ケイタの後を追うように

ビツクマン前を後にした。

(25) 未曾有の危機

新世界のジプス大阪本局へやってきた。

「着いたで……ジプス大阪本局や」

「凄い施設……大阪にもこんな……」

新田さんの言う通り、

大阪本局は東京支局と比べても

格段に規模が大きく、

局員が忙しくなく局内を行き来している。

外見はほぼ同じに見えるが……

「フフ……それは違う。」

見た目は同じでも、この大阪本局には

ジプスの全てが結集している」

カツカツと靴音を鳴らし、

階段を下りて来るのは峰津院大和だ。

「あ、ヤマト……じゃなくて、

峰津院局長サン」

「よお……峰津院。」

東京モンを連れてきたで。

これでええんやろ」

「ご苦労だったな、和久井君。」

君は通常任務に戻るといい」

「そうさせてもらおうわ……ああ、せや。」

そこの女、ヒナコやったか？

ジプスに入りたらしいで」

ケイタはそう言い残して

再びジプスから去っていった。

それを目線のみで見送ると、

ヒナコはヤマトの前に進み出た。

「一緒に戦いたいんやけど。」

ジプスに入れる？」

「フム……この有事だ。」

力を貸して貰えるのなら、

こちらとしても異存はない

……別室を用意する。

そちらで説明を受けるといいだろう」

ヤマトが指を鳴らすと、

すぐさま局員が歩み出て

ヒナコを別室へと案内する。

「さあ、こつちだ」

「コレでホンマの仲間入りやな？」

ほなアンタら、また後で！」

ヒナコは手を振りながら

ジプス局員に連れられ去っていった。

「君達は会議室だ。……ついてきたまえ」

☆

ヤマトは会議室の椅子の一つを

引っ張り、優雅に座ると俺達へ問い掛ける。

「さて……大阪の現状は見たな。」

どう思った？」

……少なくとも、災害全体は

地震だけが原因では無い、と思う。

確かに地震の影響もあるが、

そもそもその地震は何か別の原因がある。

「う、うん……それと、

悪魔の被害もかなり……」

「あゝ、瘴気ね。」

うん、確かにアレ放置してたら

そりゃ悪魔が増えるよね……」

ヤマトは小さく頷いた。

「ああ、その通りだ。」

久世の言う通り、この地震は

自然発生したものでは無い。
君達も学校で習ったとは思うが、
そもそも、東京と大阪が同時に
地震に見舞われるなどありえない
……フ、多少なりとも、
真相には近づいたようだな。
しかし問題はさらに深刻だぞ？」
「え、ちよ……問題？」

ま、待……つてクダサイ。
何を言っただか全然……」
ダイチが話についていけないのを見て、
ヤマトは溜息を着くがその場から数歩下がり、
手元の機械を操作する。

「分からないか。ではこれでどうだ？」
ヤマトの背後にあるモニタに
電源が付き、映像が映し出された。

☆

崩壊した東京。
建物が崩れ、砂煙か火災の煙かも
判別がつかないほど酷い状況になっている。

「あ……これ、お台場の方……だよな？」
画面が切り替わる。
崩壊しかけた燃える大阪城。

「……大阪城だよな。
マジで崩れちまうなんて……
何かありえねーって感じ……」
画面が切り替わる。

どこかの都市のような場所が
燃えているが、映像が近寄り過ぎて
ビルのようなところとしか分からない。

「へ……？」「レってひょっとして……」

映像が引き、全貌が見えるようになる。
捻れたような構造のビルが折れて
砂煙を上げながら倒れてきている映像だ。

「やっぱ……名古屋？」

あそこも壊れちゃったつての……？」

心做しかジョーは名古屋の映像で

かなり強い衝撃を受けているようだ。

ジョー、出身は名古屋か？

「え、あ、うん……」

やっぱこう見ると……キツいなく……」

口調は辛うじていつも通りを

保とうとしているが、固く握られた拳は

ジョーの心中を表しているようだった。

画面が切り替わる。

建物は比較的無事だが、

やはり離れた場所には倒壊しかけている

建物と砂煙が見える。

「えっ……いっ……ここは……札幌……？」

こんな所まで災害に……!？」

画面が切り替わる。

ここはかなり酷い。道路が

倒壊した建物で塞がっていたり、

地割れのようなものが起きている。

「あちゃ……。福岡……だよねえ。」

ちよつと信じられないけど……」

画面が切り替わる。

十字道路の中央にタワーが倒れて

車の通行を妨害していたり、

住宅街に火災が拡がっている。

「ハ、ハハハ……」

ど、どこの都市なんだよ……!」

「……別府だ。」

大分県のほぼ中央にある」

「大分って……九州かよ！」

ど、どうなっちゃってんの……？」

映像が切れ、画面が黒くなる。

自ずと冷や汗が流れる。

まさかとは思うが、状況は最悪だ。

「……東京、大阪、名古屋、

札幌、福岡、別府。

これまで報告の上だった6都市の有様だ」

「そんな……どうして6箇所も……」

報告の上だった6箇所。ヤマトは確かにそう言った。

違う、6箇所じゃ、無い……！

「え……」

「な、何が違うんだよ……？」

「ん……」

思わず出してしまった声に

戸惑った反応が帰ってくるが、

ジョーは気付いているようだ。

……ヤマト、それ以外の都市と

連絡は取れているのか？

「取れていない。」

現在連絡が取れているのは

先程述べた6都市のみだ」

「は……!? どど、どういう意味!？」

「他の都市は連絡すら取れん。」

海外も同様……つまり全世界で

同じ異変が起きたようだ」

「……あく、それって、やっぱり……」

ジョーの発言を手で遮り、

真剣な瞳でヤマトは

こちらに対して語り掛ける。

「……結論から言おう。」

いいか……これは有史以来、
最悪の大災害だ。……我々人類は今、
未曾有の危機に直面しているのだよ」

「あ……そんな……、そんなの……」
全員が言葉を失っている。

これからどうなる、俺達はどうすればいい？

「……不明だ。現時点ではな。」

その問いに答えるためにも、
我々は少しでも情報を集めたい。

だから君たちを……」

「は、はは……」

「ダイチ、くん……う？」

「ま……マジかよ？」

こんなの信じらんねーつての。
う、嘘に決まってるじゃん。

そ、そりゃ俺たち……災害の原因を
知りたくて大阪まで来たけど、

こんなのつてないだろ……？

有史とか未曾有の危機とか……そんなの、
あ、あるワケないじゃん。

だまされてんだよ、そんなの……！」
ダイチは明らかに取り乱しているのを
見て、ジョーが宥めに入る。

「……志島くん、気持ちは分かるけど、1回落ち着こう。な？」
ジョーが肩に伸ばしたてを振り払い、
ダイチが怒りとも悲しみとも取れる
声色で続ける。

「ふ……フザケンな！」

こんな……あるはずねーよ！

なあ……!?!」

ダイチは訴えかけるように
俺達へと答えを求める。

然し、沈黙が流れる。

「……っ！ 誰か……嘘だつて言ってくれよっ！」

ダイチは駆け出して会議室から出ていった。

「あ……し、志島くんっ……!」

「あ、ごめんねえ。

ヒビキくん、新田ちゃん。

……流石にキツイわ。

俺もちよつと……1人になりたい」

ジョーも心做しか力なく、

とぼとぼと会議室から去っていく。

「ジョーさん……」

「……放っておけ。

いずれ覚悟が必要だ」

出ていく彼らを視線だけで見送り、

峰津院大和は以前変わらぬ態度で

吐き捨てるように言う。

「ごめん……なさい。

私も、少し……考えたい……

いくらなんでも……

こんなことになってるなんて……」

震えた声でそう言い残し、

新田さんも会議室から出て行く。

「……君の仲間は動揺したようだな。

自ら行動すると決めたはずだが、

やはり一般人には耐えきれんか。

……君も考えておけ。

自ら行動し続けるか、

全てを投げ打って死を待つか……な」

ヤマト会議室から去り、
その場には俺だけが残された。

(26) 動揺、不安、思案

正直、動揺は俺もしている。
単なる学生の身で背負うには
あまりにも重すぎる役目だ。
どうすればいいのか、
何をすればいいのかすら不明となれば
ダイチや新田さんのようになるのも
無理はないし、実際俺だってそうしたい。
だが、こうも思う。

——逃げてどうなる？

誰かがやってくれるのを待つのか？
ただ怯えて復旧を待つのか？
違うだろう。俺はそうじゃない。
そうしない。

俺には力悪魔がある、知恵死に顔動画がある。
Nicaea
この力は何故手に入れた。

生きる為であり、逃げる為じゃない。
会議室の椅子から立ち上がる。
迷いを断ち切ると心が少しだけ軽くなる。
絶望して逃げる以外にやる事はある。
まずは、仲間を探すところから。

☆
ならば、OCUT広場。

思わず会議室から駆け出してしまい、
戻ろうに戻れず、俺は途方に暮れていた。

正直な話、あれが本当に起きたことだつてのは理解している。しか
し……

「信じたくなえよ、なあ……」

明確な考えはなかったが、
なんとかかなると思っていた。

いつか日常に戻れると思っていた。

結局は、その考えが甘かったんだろう。

あの映像を見てそんな考えは打ち砕かれた。

あいつの顔が思い浮かぶ。

アイツはあの映像を見ても、

表情ひとつ変えずに次に自分が

どうすればいいのかを考えていた。

なんでそんな事が考えられるんだ。

歳も住む場所も同じで、なんで。

そう思うと、途端にあの場から逃げた

自分が滑稽に見えて来る。

お前なら一人で世界でも何でも

救えんじやないのか。

そんな馬鹿げた事でさえ、

今はアイツならやれるんじゃないと思える。

嫌な考えだけが延々と頭を巡り、

つい、口に出してボヤいてしまう。

「俺って……要るのかな……」

そう呟いた瞬間、体が浮いて飛ばされる。

何が起きたのかも分からず、

無様に地面を転がる。

肩が熱い、転がった時に切ったのか口の中に血の味がする。

……襲われたのか？

そう自覚した瞬間に肩に痛みが走る。

「痛ってえ……い・な、なんだよ!？」

バツと顔を上げ、

何が自分を殴ったのか確認すると、

更に頭に衝撃が走る。

身体が強制的に吹き飛ばされ、

目の前が白くなりかける。

辛うじて見えるのは緑色の肌をした鬼。

——オトコか……

まあ、ハラのタシにはなるか
肌を刺すような強烈な殺気。

歪な音が無理矢理声として

聞こえているかのような声。

殺される。死ぬ。誰か、誰か。

震える四肢を無理やり動かして

這いずるように逃げようとするが、

直ぐに距離を詰められ、

首を掴まれてしまう。

——目を覚ませ。

恐怖と息苦しきでもがく中

声が聞こえた気がするが、

再び顔を殴られ気にする暇もない。

幸い呼吸はしやすくなったが、

絶望的な状況には変わらない。

——ナンダあ？ ヤケにシブトいな……

ヨワつちいニンゲンのクセに……

殴り飛ばされて距離が離れたのか、

先程よりは遠くから鬼の声が聞こえる。

——死ぬぞ、いいのか？

荒く息を吐きながら鬼とは別の声を聞く。

「死ぬ……？ 嫌に、決まってるでしょ……」

辛うじて声が出る事に、自分でも驚く。

生き汚ねえなあ、と苦笑すら漏れてくる。

——ならば呼べ、我が名を。

お前に『生きる意思』があるならば……

力が足りぬと言うのなら、俺が力を貸そう。

ここまで来て、語りかけて来る声は

明確に聞こえるようになる。

聞き覚えのある堅苦しい男の声。

「ああ……そうだよなあ……」

「そうだった……悪い、忘れてた……」

「勝手に落ち込んで……自棄になった。」

「自分に何ができるかとうじうじ悩んで、
相棒お前を忘れていた。」

「ぶちかませよ……ハヌマーン！」

——お安い御用だ！

——ナニ……!?

ドカツという鈍い殴打音と共に

ハヌマーンが悪魔を殴り飛ばしていた。

緑色の鬼は拳がクリーンヒットしたのか、

その一撃をまともに受けると動かなくなり、体の末端から光の塵へと変わっていく。

「ゲホッ、ゲホ……」

——……軽傷だが、少し動くなよ。

ハヌマーンの手から風のように流れた

淡い緑の光が殴られた箇所に触れると、

微々たる速度ではあるが傷が治っていく。

「ふい、結局なんだったのか

よく分かんねえけど……助かったわ」

——治療は不得手でな。

これくらいしか出来ん。

後で新田とやらに見てもらえ。

「おう、そうするわ……あと、ありがとな。

お前のお陰で……覚悟、決まったわ。

こうやってクヨクヨしてたって仕方ねえ、

やるだけやってみよう……つてな。

ヒビキとかにも謝らないと」

——その意気だ。

また力が要るなら呼べ。

「おうっ……!」

不思議と先程まで悶々としていた心が霧が晴れたようにスッキリとしていた。足乗りは来た時よりも軽く、志島大地は新世界へと戻る道を進んだ。

☆

なんば、戎橋。

新田維緒は自分が大阪に来て

訪れた場所を何となく見て回っていた。

自分が思っていたより、

この災害の被害は大きかった。

決してこの災害に対して

樂觀視していた訳では無いが、

頭の何処かいずれ終わるものだと

思っていたのは確かだ。

今日ここに来て、

それが終わりの見えないものだと

ハッキリと自覚させられた。

もしかしたら今も友達や家族が、

苦しんでいるかもしれない。

そう思うと、胸が苦しくなる。

「何でこんな事に……」

なつちやっただろう」

声に出しても仕方ないこと

だとは分かっているけれど、

何か作為的なものがあるのでは

ないかと疑ってしまうほど現状は厳しい。

「自衛隊とか、警察とか……」

今は全然頼りにならないんだよね……」

唯一この事態に対応出来るとするならば、

やはりそれは悪魔を扱えるジプスだろう。

しかし、どうしてもジプスに対しては

疑いが拭えない。

確かにマコトや自宅へ送ろうとしてくれた
局員とは話をして、いい人だと思う。

でもジプスという組織、言ってしまうえば

峰津院大和の方針には何か裏が

あるように思えてしまう。

「峰津院さんは、何かを隠してる……？」

ジプスという組織全体で見れば、

やっている事は人命救助や悪魔の討伐等、

一般人にとってはありがたい行為だ。

峰津院大和がジプスという組織の舵取りをしている以上、災害からの回復がジプスと峰津院大和の目的と考えるのが普通だ。

（大阪に行くって話になった時、

峰津院さんは会議に行くついでとは

言っていたけど、私達に災害の原因を

調べさせる理由は何……？）

少なくとも調査では無いだろう。

学生と会社員だけで集められるような

情報は局員が既に集めているだろうし、

何よりあの映像をヤマトがあの場合で

初めて見た……なんて事は考えにくい。

「でも……今は、協力しないと」

全面の信頼は置けなくても、

ジプスが人助けをしているのは事実。

考えなしで進む訳には行かないが、

考えすぎで進まない訳にも行かない。

「ただ待ってても、

この状況は変わらない……」

だから、私も動こう。

胸に渦巻く不安は未だ消えないが、

前は向けるようになった。

ジプスへ向けて足を進める。

☆

アメリカ村、三角広場。

秋江譲は階段に座り、

ぼんやりと空を眺めていた。

名古屋が崩壊していると言うのは、

街並みを見て薄々気付いていた。

確認する手段が無かった……

いや、ヤマトに聞く機会はあった。

結局今回も、目を逸らしていたという事か。

「ははっ……変わらないな、俺は」

軽口を叩いても、思考は止まらない。

この状況が名古屋にも

広がっているとしたら、

入院している彼女はしつかりとした

治療をいつまで受けていられるだろうか。

停電、薬の不足、病気の悪化。

この災害が続く程に彼女は苦しむだろう。

過去の自分を殴りたくなってくる。

どうして名古屋に残らなかったんだと。

今まさに苦しんでいるかもしれない

彼女に付き添えない事が、

何よりも腹立たしい。

「……戻ろう。そして、聞くんだ」

ヤマトに名古屋行きを志願すれば、

まだ何もしないよりは可能性がある。

待っているだけでは、ダメだ。

人に任せるだけだったら、

本当に死んでしまう……俺も、彼女も。

階段から立ち上がり、

ジプスへ帰る道を進む。

☆

新世界、ジプス本局。

会議室での出来事の後、

局長室で書類を片付けていると、
軽くノックがされる。

『お仕事申失礼……水神です』

水神茂久。

私の補佐として交渉面を

担っていた優秀な部下であり、

嘗て自分の息子の為に

ジプスへ反旗を翻した男。

全ての目論見が失敗に終わった後、

私の目前で自殺を図ったが……

現在は元の補佐の位置へ戻っている。

「開いている……入れ」

キリがいいところで仕事を切り上げ、

入室の許可を出すと、

水神は慣れた動作で入室してくる。

「聞きましたよ、

彼らに各地の映像を見せたそうですね？」

「……答え合わせにな」

「またまた……人が悪い貴方のことだ。

精神的に現状を突きつけて耐えられるか

試した面もあるのでしょう？」

「否定はしないがな、必要な事だ」

「あんまりでは無いですか？」

あの年齢の子供には余りにも酷だ」

思わず手が止まり、

部屋の中から音が消える。

「死んだ息子の影を重ねでもしているのか
知らんが……ジプスに所属した以上、

この程度の同様に使い物に
ならなくなるのは困るのでな」

「……八生の事、

まだ覚えていらつしやったんですね……
てつきりもう忘れしまっているものだと」
「……フン。

悪魔が憑依したという珍しい事例だ……
そうそう忘れられるものでもないだろう」
「まあ……そうですね……彼らと

八生を重ねてしまっているのは事実です。
ですがあの年代の子は精神的に不安定だ。
あまり重圧を加えると……壊れますよ」
貴方が例外なだけです。

と言が残し、水神は背を向けて退室する。

「……心得ているとも。

だが、今必要としているのは……
その重圧を乗り越える人間なのだ……！」
ヤマトの昂る感情に呼応するように、
カタカタと部屋の小物が震える。

「壊れるなら壊れればいい……」

私の期待に応えられない人間はクズだ。
久世響希……君はどちらだ？」

(27) メラクの出現

ダイチ達を探しに街を駆け回っていると、新世界へ向かう道にダイチ、新田さん、ジョーの姿が見えた。

駆け寄り、話しかけに行くと向こうもこちらに気づいたようだ。皆、無事だったか。

「あ、響希……おう、無事だぜー」

「ん、ダイチくんは悪魔に

襲われたみたいだけど、治療済みだよ」

「うん……あ、あの、ごめんなさい……」

逃げるようなこと、しちゃって……」

いや、無事ならそれでいい……

だが……覚悟は決まったのか？

「おう、俺なりに考えてよ。

自分でやらねえとなって思ったんだ。

だからやれるだけは、やりたい」

「うん。逃げてても何も進まない……」

だから、自分で歩かないといけないんだって……思ったから」

「や、俺はそんな大層な

理由じゃないんだけど……

君らがやってるのに、

大人の俺だけやらないとか変じゃない？

だから、そういう事だよ」

そうか。じゃあ本局に――

ピルルル……

メールの着信音ではない、

電話の無機質な受信音。

ポケットに入れた携帯が

軽く振動しているのがわかる。

嫌な予感がするが迷いを振り切り、

携帯を取りだして電話に出る。

もしもし。

「久世、今新世界付近だな？」

ヤマトの声だ。心做しか口調が早い。

ああ、ダイチ達も一緒だ。

通話をスピーカーにしながらそう答える。この男がなんの用もなく電話をかけてくるはずがない。だとするならば、なにか重要事項が起きたのだろう。

「それは好都合だ。単刀直入に言おう。

君たちにやってもらいたい事がある。

ドウベと同種の怪物が出現した。

それも、通天閣の近くにだ」

通天閣って……本局の入口付近じゃ……

「ああ、N i c a e a の解析によると

巨門星 メラク呼ばれる怪物は、

通天閣に向かって進行している。

現在は自衛隊とジプス局員数人で

足止めしているが……どこまで持つだろうな」

っ……！ 分かった、すぐ向かう！

「そうしてくれ。では、健闘を祈る」

一方的に通話が切れる。

「それは……ちよつとまずいんじゃないの？」

「ちよつとどころかだいたいまずいだろ！

ジプスの本拠地が潰れたら……

どうなるかわかんねえよ……！」

「少なくとも、復旧には遠ざかるよね……」

今すぐ向かおう、ドウベも倒せたんだ。

俺たちなら出来る。

全員が領き合い、通天閣へ向かう。

☆

通天閣に続く大通りに到着した。

そこには既にケイタとヒナコが待っていた。

「フン……お前らと共闘か……まあええわ」

「さつきぶり！　なんか気落ちしてるって

聞いたけど……問題なさそうやな！」

メラクは何処に？

「ウチらもさつき着いたばっかやで……

ってあの人、怪我してるやん！

ちよい待つとって、今ウチが　——」

確かにヒナコの言う通り、

通天閣の本局入口付近から

足を引き摺った局員が現れる。

局員はこちらに近付こうとする

ヒナコに気付いたのか、掌を向けて拒絶する。

「……！　来るなッ……」

こつちに来るんじゃない！」

周囲には悪魔もない。

ならばそれが意味するのは、救助の拒絶。

一同に戸惑いが走る。

「へ……来るなって？」

どうしたってのさ、照れなくてもいいのに」

「違う、そうじゃ——……ッ！」

ふわふわとした物体が何処からか

漂い、通天閣の土台付近で停止する。

その物体の色に、覚えがあった。

毒々しい蛍光の桃色。

それは、ドウベを想起させる色だ。

まさか——

それはドウベと、同じように膨張し、爆発する。

衝撃で地面が、大気が、通天閣が揺れる。

「……！　な、なんや今の……！」

ば、爆発しおったで……!?!」

「ヤツは通天閣を狙っている！」

これ以上、爆破させるな……！

ヤツの攻撃は——」

空気が凍る音が聞こえた気がした。

比喩表現では無い。

事実、冷気をそのまま凝固したようなレーザーが

ジプス局員に直撃し、氷像へと変えた。

声を上げる間もなく氷像は崩れ、

全員が物体が現れた方向、

レーザーが放たれた方向を見る。

「……………」

ジプス局員と同じように、

崩れ去ったと思われる氷像の残骸が

視線を奥へ向かわせる事に増えていく。

それは板が立体化したかのようなだった。

それは宙へフラフラと浮いていた。

それは縦長の砲口を持っていた。

それは先程と同じ爆破物体を生成していた。

青を基調とした片翼のような板に、悪趣味なピンクの光が流れてい

る。光は砲口から爆破物体を生み出しているコの字に配置された十

数のような器官を通り、身体の端へと血管のように流れる。

それがどうも非生物的な見た目に反して、生物的で……ドウベの海

綿体を見た時と同種の、不気味な感情を覚えた。

メラクは俺たちと向かい合うように、

縦長の砲口を向けて漂っている。

よく目を凝らすと、砲口に

白い冷気が集まっているのが見えた。

それを見た瞬間、背筋に悪寒が走る。

全員全力で避ける……ッ！

そう叫ぶのが限界だった。

すぐ傍に居た新田さんを掴んで

強引に今いる場所から距離をとる。

メラクから放たれた白い極光が
すぐ近くを絶対零度へ変えるのに、
数瞬も必要としなかった。

☆

—— 咄嗟の行動だったが、
上手く回避はできたらしい。

足のすぐ近くに冷気を感じながら、
地面に手を着いて立ち上がる。

胸を撫で下ろしながら、周囲を確認する。

ケイタとヒナコは無事……

ダイチとジョーも無事……

新田さんと俺も無事。

メラクの方を確認すると、

あの冷却砲は連発出来ないらしく、
再び通天閣を標準に合わせている。

今度はあの爆発物を生成するのに
集中しているようだ。

「いや、厄介だね……これは」

「チツ…… 取り敢えず接近せえへんと

話にならへん……！ 俺は行くで！

来い、ベルセルク！」

ケイタが一目散にメラクへ駆け出すと、
呼応するようにメラクへ向かう道に

悪魔が数体現れ、道を塞ぐ。

おい、急ぐなケイタ……！！

クソっ……俺、ケイタ、ジョーで

メラク本体に行く！

あの爆発物は通天閣に向かっていているから、
ダイチ、ヒナコ、新田さんは

そっちの対処をして欲しい！

「やっつたろうやん……出番や、ベルセルク！」

「あいよ。」

それじゃあ行こうか、カマプアア」

「お、おう！ あのピンクのやつを

通天閣に近付かせなきやいいんだな!？」

よっしゃ……行くぞハヌマーン!」

「うん……行こう、ハトホル!」

それぞれが別れ、別々の方向へ走る。

人でも悪魔でもない、

怪物との戦いが再び始まろうとしている。

☆

その場にいる全員が

目の前の脅威メラクに必死になっている。

それを見守るように、

空に浮かぶ細身の人影があつた。

人影は何をするでもなく上空に佇み、

戦いを観察している。

☆

悪魔を倒しながらメラクに向かって

進んでいると、携帯に着信が入る。

誰かを確認する暇もなく電話に出る。

『天野、聞こえるか。』

メラクの特徴を把握したので伝えておく』

有難い……!』

『ヤツは円形の子機を排出する。』

子機は目標座標に到達すると、

自爆するようだ。

君なら理解していると思うが、

通天閣を破壊させるのだけは

何としてでも阻止してくれ』

了解……!』

『本体は砲撃を正面にしか撃たん。』

多少の位置調整はするが、それだけだ。
真横に回避してしまえば追尾もしない。
……以上だ』

「またも一方的に通話が切れる。」

「通話をしている間にメラクが呼んだ」

「悪魔は相当少なくなっている。」

「おう、俺もやればできるね……」

「じゃあ、親分退治と行こうか？」

「……始めるで。たっぷり後悔せえ」

☆

「ウチの大阪を好き勝手しおって！」

「絶対許さへんからな！」

「なあこれ普通に倒したら」

「爆発したりしない？ 大丈夫かこれ!？」

「わ、わかんない……でも、やらないと……」

「取り敢えず、魔法で……!」

——フンツ!

「おずおずと新田維緒が子機に向けて」

「魔法を撃とうとした所に、」

「ハヌマーンが割り込んで」

「子機に直接拳を叩き込む。」

「うわあ!?! お前っ、何してんだよ!?!」

——何、これで直接倒しても

「爆発しないと分かっただろう？」

「それにしても、随分と脆いな……」

「豪快やな……やけど、」

「これで思いつきり戦えるやん!」

「は、はい……!」

「おっしやー! じゃんじゃん倒してやるぜい!」

「子機は疎らではあるが着実に」

「こちらに向かってきている。」

だが、子機よりも一番の問題は。

「あのレーザーにも、気を付けないと……」

「せやな……いつ飛んでくるのか

分からんしな……」

直撃すればまず命は無いであろう

冷気のレーザー。

ドウベの爆発に位置する

メラクの大技なのだろうが、

戦う立地故に強力なものとなっている。

この大通りは遮蔽物も殆どないため、

レーザーから身を守ろうとしても

回避するしか方法がない。

そう話している間に、

子機はほど近い所まで迫ってきている。

「次！ 来たで！」

「お、おう！」

「はー！」

戦闘は続く。

(28) 月曜日 of 侵略者

向かってくる子機を倒してはいるが、
その都度メラク本体からの子機の補充が入り、
イタチごっこになっている。

「チツ……面倒やな。」

「コマイの出しよって……！」

子機は無視だ！

本体を倒さない限りキリがない！

「ん、ダイチ君たちの負担が増えるけど……」

これじゃ終わらないしね。

アレ倒しちやえばもうちっちゃいのは

出てこないだろうし、そうしよつか」

「ブン……命令されるのは癪やけど」

……乗ったるわ」

そんな話し合いも長くは続かず、

メラクの周囲に氷の杭が生成される。

——氷の乱舞！ 来るぞ！

警告を放つと同時に氷の杭が

宙に浮かぶメラクから降り注ぐ。

その軌道は完全にランダムで、

悪質な程に進む方向を塞ぐ

氷の杭があると思えば、

明後日の方向に向かう氷の杭もある。

「そないなちよこまか撃ってる

暇があるんか？ 身体がガラ空きやで……」

——ぶっ倒れろ！」

ケイタが自分から氷の杭へ跳躍して突っ込み、

自分に向かってくる氷の杭を拳で砕きながら、

本体に向けて一撃を命中させる。

——オオオオオオ!!!

ベルセルクがそれに続く。

技量など一切無く、力任せに剣を叩き付ける。

ケイタの一撃を受けて揺らぐメラクには

これを躲す術はなく、本体に薄く罅が入る。

「お、じゃあ俺も続けちゃおっかな……」

そーれ、^{マハザン}範囲衝撃つとー!

ジョーが更に追撃を加えていく。

衝撃はメラクの身体に直撃し、

罅は更に広く、深く刻まれていく。

「!?!」

メラクが何かを叫ぶが、

それが何を示す言葉なのか俺には分からない。

メラクの身体に流れる光が加速すると、

これまでに無い速度でメラクの砲口に冷気が収束する。あのレー

ザーだ。

不味い……この距離じゃ避けれない……!

「あちゃ……近付きすぎたね……どうしよ」

「チツ……どうせ避けれへんなら、

ぶっ倒して止めたるしかあらへんやろが」

仕方ない……やるぞ!

☆

子機を撃破していくうちに、背後が騒がしくなる。

チラリと後ろを見ると、返り血を浴びた悪魔がこちらに向かってき

ている。

「悪魔っ……!?! なんで……!」

あの返り血は、誰のもの?

その答えは悪魔の手元にあった。

身体の所々が欠損している見慣れた黄色い制服の女性が、悪魔に引

き摺られていた為だ。

見ている間にも、また一口身体が齧られる。

「……っ! 背後から、悪魔が数体来てます!」

「悪魔あ!? こっちは子機の対処で手一杯やのに……」
「ちくしょう……しょうがねえ！」

悪魔は俺がやつとくから、
だから新田さんは子機よろしく！」

ダイチはそう言うとき子機を

蹴り飛ばしてもう一体の子機にぶつけ、

悪魔がやってくる通天閣の方へと向かう。

「あ……うん！ 気を付けてね……！」

「分かってるって！ じゃ、すぐ片して戻るから！」

それまで頼んだわ！」

軽い調子でそう言つてのけたダイチだが、声は軽く震えている。覚悟を決めたと言つても、すぐ様こんなことがあれば仕方の無いことだろう。だが、それでもダイチとハヌマーンは進む。

「うおお……やっつてやる！」

マハラギ
範囲火炎だあ！」

—— 得と味わえ、マハザン
範囲衝撃！」

火炎と衝撃が悪魔を迎え撃つ槍となり、

悪魔の歩みを遅らせる壁となる。

事実、大半の悪魔は2種の魔法により

無視できないダメージを負っている。

想像以上の成果に、ダイチは拳を握る。

「よっしゃ……い……これなら……！」

歓喜を味わうのも束の間、

聞き覚えのある、空気が凍る音が

迫って来るのが聞こえた。

思わず、振り向く。振り向いてしまう。

そして、目撃する。眼前に迫る極大な冷氣。

避けるには、間に合わない。

☆

「う、うわあああ……！」

ダイチの悲鳴が聞こえる。

信じ難い事だが、メラクは周囲にいる俺達を無視して、遠く離れた悪魔と戦闘しているダイチを、レーザーで狙撃してのけた。

為す術もなく、レーザーがダイチに直撃する。まず、生存は見込めないだろう。

ダイチ……ッ！ クソ……！

「響希くん、今はメラクに集中しよう。

ダイチくんの死を悲しむのは、

そのあとでも出来る。だろう？」

至って冷静に、ジョーが話しかけて来る。

悔しいが、その通りだ。

メラクに向き直り、携帯を構える。

くっ……やるぞ……ッ！

「わあつとる……シジマの仇討ちや……！」

☆

思わず瞑った瞳を開く。

見えるのは目を瞑る前と同じ景色だった。

「あれ……なんで、俺、生きて……」

正面にはハヌマーンが両手を広げ、

背中を攻撃を受けるように立っていた。

—— 無事か……然し、何が起きた……？

ハヌマーンにも状況が掴めていないようで、

困惑気味な表情でキョロキョロと周囲を見ている。

ハヌマーンに倣って辺りを見ると、

まるで俺を避けるかのように地面が氷結していた。

そこでようやく、

こちらに背を向けて立つ

人影がいることに気付く。

黒い衣を纏い、キノコの傘のような

帽子を身に付けた長身瘦躯の男だ。

「あ……アンタが、俺を助けてくれたのか……？」
……。

男は何も答えないが、ゆっくりと、振り向く。
振り向いた男の頭部は、

青い頭蓋骨が剥き出しになっていた。

「いいっ!? あ、悪魔!」

——そのようだ……!

急いでN i c a e aで読み取ろうと携帯を取り出すが、青い頭蓋骨の悪魔は黒い衣をはためかせてその場から消えてしまう。

未だ状況が掴めず、唾然と腰を抜かしたままでいると、ヒナコと新田さんが心配そうな顔で駆け寄ってくる。

「ダイチ！ 怪我はあらへん?」

「え、あ……おう！ 何ともない……」

「今の、悪魔は……?」

ダイチくんを助けてくれたの……?」

「どうなんだろ……てか、子機は!」

「なんか知らへんけど、止んだで!」

ウチらも早う加勢に行かな!」

確かに子機も、悪魔も全てが消えている。

あのレーザーに巻き込まれたのだろうか。

だが、今はそんな事は関係ない。

頭を振って無駄な思考を追い出す。

「行こうぜ、アイツらだけに手柄は渡さねえよ!」

「ふふっ……うん、そうだね」

「よう言うた! ほな行こか!」

ヒナコに頷きを返し、響希達が戦う方向へ走る。

(29) 激動の月曜日

メラクが子機を生み出す。

本体を叩く為にスルーしようと

隣を通り過ぎた瞬間、子機が爆発する。

なっ……!?

予想外の攻撃。

爆破の衝撃で身体が建物の壁面に叩きつけられる。肺から全ての空気が抜けたかのように途端に呼吸が苦しくなる。

そこへ、狙ったのか運が悪かったのか、

メラクから放たれた氷の杭がこちらに飛ぶ。

携帯に手を伸ばして

護りの盾を貼ろうとするが

携帯が……!!

叩きつけられた衝撃で携帯は手を伸ばしても届かない場所に落ちてしまっていた。

白虎も駆け寄っては来てくれているが、

あの距離では流石に、間に合わない。

肩と左脚に、飛来した氷の杭が突き刺さる。

ぐ……ッ!こんなッ、もの……!!

激痛を堪え、無理矢理引き抜く。

少ない量の血が流れるが、

今はそんなこと、どうでもいい。

「モジャ頭!」

ケイタが拾い、

投げてきた携帯を何とかキャッチする。

そのまま携帯を操作し、スキルを発動する。

回復……!

気休め程度だが、脚に向けて回復を使う。傷口が塞がるが、痛みは残るし流れた血は戻らない。だが、走ったりする分には大丈夫だろう。

——無事か

なんとかかな……！

駆け付けてきた白虎にそう答え、
メラクに再び攻撃を再開する。

「そろそろ倒れてくれないかな……：：：：：衝撃！」

「口動かしてる暇あるんなら攻撃しろや！」

言い争いながらも、ケイタとジョーは攻撃を続けている。然し、ケイタは兎も角ジョーは既にガス欠気味のようだ。

携帯に映るメラクの状態を確認すると、

まだ4割ほど体力が残っている。

衝撃！

弾丸の如く放った衝撃はメラクに直撃する軌道を通るが、メラクの傍に放置されていた子機が肉盾となり、阻まれてしまう。

「小賢しいことしちやつて……ドウベもこれみたいなことしてなかった？」

あの方向転換か……：：：：：確かに似たものは感じるが。

と話していると、数発の電撃が子機に向けて放たれ、子機を破壊する。

思わず振り返り後ろを確認すると、

「よっし！ 命中したっ！」

メラクに対して携帯を構える、志島大地の姿があった。その身体には目立った傷もない。

ダイチ……無事だったか……！

「おう！ 確かに死ぬような思いはしたけどな……！」

ヒナコと新田さんがダイチに続いて前に出る。

「ウチらもおるで！」

「う、うん……あっちの方はジプス局員さん達が、やってくれてるから……」

新田さんの言う通り通天閣近くには見慣れた黄色の制服が。

ならあつちは彼らに任せよう。

俺らは……こつちだ。

電撃ジオを受けたメラクが氷の杭を数本生み出し、周囲に浮かべ……射出する。

「ハトホルっ……い！」

——ええ、任されました。

迫る氷の乱舞に対し、誰よりも前に歩み出たのは新田さんとハトホルだった。

ドウベ戦においてジプス局員を癒したその手には、電撃が纏われた。

雷の乱舞が、氷の乱舞を迎え撃つ。

対消滅という形で攻撃を無効化した新田さんの意図を、全員が理解していた。

「ぶちかますぞ、ベルセルク！」

「頼んだよ、カマプアア！」

「ウチらもやるで、ペリ！」

「うっし……行くぞハヌマーン！」

悪魔と悪魔使いが一斉に攻勢に移る。

メラクは何人かを子機によって阻むが、

それすらもいとも容易く

斬り捨てられ、打ち砕かれ、貫かれていく。

打撃と衝撃がメラクに迫る。

抵抗するように、

メラクの前面にまたも冷気が収束する。

然し、その身体を掴む者が居た。

白い毛並の虎が、メラクに噛み付き、

フラフラと不安定に漂っていた身体を固定していた。

そのまま叩きつける！

白虎が響希召喚主の声に呼応する。

もがくメラクを強引に、力づくで地面へと叩きつけ——攻撃が

直撃する。

収束されたが行き場を失った冷気が、天へと向かって放たれる。一

条の光は暫くして雪となり、響希達の元へ降り注いだ。
少くない数の犠牲者を出したメラクは、氷片となり砕け散った。

(30) 敵対者の考察

雪の降る中全員が携帯を降ろし、
安堵の息を吐く。

「ふう……お疲れさんやな。強かったわ、メラク……」

「まあ、こんなモンやな。」

しかし何やったんやアイツ……」

ドウベと同じく、悪魔では無い何か別の存在……そう考えるのが妥当だろうな。

「そう……だよな。」

形も、雰囲気だつて全然違うし……」

全員で話し合っていると、通天閣からヤマトが歩いてこちらに向かってくる。

「……メラクを倒したか。予想以上の結果だ」

……予想以上、ね。大苦戦だったけどな。

貫かれた肩を回しながら答える。

血こそ今は出ていないが、未だに痛みは引いていない。

「フッフ……そうか。驚いたよ、上出来だ。」

……通天閣も無事のようにだな。多少、修復が必要だが、すぐに済むだろう」

ヤマトはそう言いながら通天閣と凍った地面に目を向け、再びこちらに向き直った。

「さて……所用は終えたな。もう東京に帰って構わん。車両の発車は19時頃だ、それまでは好きにしまえ」

そう言い残すとヤマトは踵を返して通天閣の方へ戻っていく。

携帯を見ると、時刻は17時少し前。

2時間程度の余裕がある。

「あ……そうだよな、東京に帰らなきゃいけないんだ……」

「つてなると……ヒナコさんともお別れ？」

「ありや……それは寂しいね、和久井くんともこれから仲良くなれそうだったのに」

「チツ……こつちからお断りやそないなの。サツサと東京に帰れや」
まあ帰れるなら来れるつて事だ。今日限りでしか会えないつてわけじゃないだろう。

「そうやな、この有様やとまた集まって戦うかもわからへんし」

「あー……そういう再会はしたくないんだけど……」

「あはは……」

「……戦うならまたその時や。オマエらと馴れ合うつもりはあらへん……ほなな」

そう告げてケイタはこの場から去っていく。

「あ……ケイタ、待ちや〜！」

みんな楽しかったで、また大阪おいでな〜！

ヒナコがこちらに手を振りながらケイタを追って走り去った。

緊張の糸が切れたようにダイチが溜息を吐き、その場で腰を下ろす。

「ぐへ〜……疲れた。なんか色々あったけど、やっと帰れるな。ああ、ベツトが恋しいっ！」

「おーいいね。おつちゃんか添い寝でもしてあげようか？」

そう言いながらジョーが数歩歩み寄る。

ダイチは腰を下ろしながら器用に後ずさり、ジョーから距離を取った。

「ぎゃー！ 気持ち悪いって！ マジそういうのキャンベン！」

「いやいや、エンリヨはいらないよ〜？」

ダイチが後ずさって離れた距離をジョーが両手をワキワキさせながら詰めると、ダイチは立ち上がって通天閣を逃げ回り、ジョーがそれを追う。

「ぎゃー！ ちょ、響希と新田さんも見てないで助けてくれよ！」

「あはは……どうする？ 久世くん」

……ほつとくか。

「ぎゃー——!!!」

☆

なんば、戎橋。

通天閣で1度別れた後、適当に大阪観光をしていると、橋の上で新田さんが考え込んでいるのを見かけた。

どうした？

「……え、あ……！……ごっ……ごめんなさい。ちよつと考え込んでやってた」

俺が話しかけて初めてこちらに気付いたようで、随分と慌てた様子だ。

いや、こつちこそ驚かせて悪い。

それで、何を考えていたんだ？

「あの……ね。さっきの戦いのこと、考えてて……」

メラクの事か？

「あ、うん。それもあるんだけどそれだけじゃなくて……東京の『ドウベ』……だったよね」

ヤマトがメラクに対して『ドウベの同類』と言っていたのを思い出す。……確かに見た目や雰囲気も、全く関係ないとは思えない。何より、あの子機の爆発はドウベと同様のものに思える。

「久世くんはさ、『ドウベ』に『メラク』って、どこかで聞いた事……無い？」

いや……無いな……

「あ、アンタら。こんなトコ居たん？ ジプス探してもダイチとジョーしかおらんから探したで」

相変わらずの服装で、ヒナコが現れた。

傍らにペリを侍らせ、小走りでこちらに駆け寄ってくる。

ああ、自由時間だから観光でもしようとな……探させたならすまん「ええってええって、見つかったんやし。やけど、せつかくやさかい連絡先交換せえへん？ イオちゃんも」

「あ……そう、ですね。しましろう、連絡先交換」

毎回探させるのも悪いしな、いいぞ。

大阪がどうなったのか、ヒナコがピンチになったりした時に連絡手段があるのと無いのでは段違いになる。交換しておいて損は無いらう。

ヒナコに口頭でIDを伝え、新田さんとヒナコの両方のアカウントを確認していると、ヒナコがにやりと笑いながら携帯を操作し始める。

「ついでにケイタの連絡先も送っとくなあ……で、なんでさつき星の話しとったん？」

……星の話なんかしてたか？

「ううん……してなかったと思うけど……」

「えー？ アンタら今ゆーとったやん。『ドウベ』に『メラク』って」

新田さんと顔を見合わせる。いまいち話がすれ違っているような気がする。新田さんは何かに思い至ったのか、ヒナコに詳細を問う。

「えっと……その話、もう少し詳しく……」

「ん？ ええけど……ドウベ、メラクと来たらフェクダ……後はメ、メグ……何やったかいな？ まあ、とにかくそこら辺っておおぐま座を構成する星のことやん？」

……いや、知らないけど

「えっと、ヒナコさんってそういうの、詳しい？」

「へ？ そんなん常識やんか。北斗七星やもん」

北斗七星……じゃあ、あの怪物は全部で七体いるってことか？ 北斗七星が常識かどうかは置いといて

「た、多分……」

「んで？ 結局何の話をしとったん？」

「あ、えっと……」

そういえばケイタやヒナコにはドウベの事を話してなかったなと思いつき、新田さんと東京で戦ったドウベについて説明する。

「……なるほど！ ほな、あの化け物は北斗七星の名前が付いとるワケや」

「あ……うん。でも召喚アプリに書かれてただけだから……今分かっているのは……ちよつと悪魔とは違うみたい、ってことくらい……かな」

「……いやいやいや。ええやん、凄いや見やで。だってアプリを作った人も、何も知らなかったら名前とか付けられへんやろ？ わざわざ

適当に名前付けるんは考えられへんし。って事は……」

あんな怪物が、残り五体……

少ない……いや、あんな怪物が五体もいるとするなら、それは絶望的な数字なのだろう。

「そうなるね……ねえ、久世くん。ひよつとしてだけど……ドウベやメラクってこの災害に何か関係ない……かな？」

……確かに、ありそうだ。

「あ、そう……だよ。大阪に来て分かったけど、この災害は地震じゃないから……他に原因があるとしたら、そういう可能性もあるかなって……」

「あ……せやなあ。あと5体もいるって事やし、まだ色々ありそうやわ」

「う……うん。でも、何も分からないよりいい……よね」

「ん……そやね。さすがやで、新田ちゃん！ ほな、これジプスに報告しとくわー！」

「え、あ、わ、私は、何も……」

いや、これは新田さんのお手柄だ。おおぐま座関連の事がジプスの調査で調べていけば、何か分かるかもしれない。

「そ、そうなのかな……？」

「きつとそうやって！ 新田ちゃんもつと自分に自信持つてええで？ 可愛いし、頭ええし……こないな立派なモノ持つてるし……なあ？」

「ひゃあ……!?!」

ヒナコが新田さんに後ろから抱き着き、胸を揉みしだいている。

「ひ、ヒナコさん……!?! や、やめて……」

「お？ ならもつと抵抗したらええんちゃうん？ ほらほら——」

スケベオヤジみたいになっているヒナコをどうしたものかと思っていると、涙目の新田さんと目が合う。継るような目に従い、ヒナコの肩と新田さんの背中を掴んで押し広げるように引き剥がす。

お楽しみのところ悪いけど、嫌がつてるから

「冗談やでじよーだん……んじや、ウチは報告に戻るさかい。出発の時見送りに行くから、その時になく」

ヒラヒラと手を振りながらヒナコが来た道を引き返していく。

「あ……えっと、私たちも、行く？」

あと、助けてくれて、ありがとう……」

構わないさ、行こうか。

新田さんと共にその場を後にした。

(31) 東京への帰還

時刻は19:00。

俺達は東京へ戻る為、専用車両ホームへやってきた。

「やく長かった……たった1日なのに疲れた〜」

概ね同意だが、明日もあるぞ

「うん……でも大阪に来て、色々わかった事あるし……ちよつと前進した……かな？」

「ま、そーね。さすがに現地の光景とか、あの映像とか？　さすがにビびったけどさ、色々調べた甲斐があったねえ。あのまま東京にいたんじゃ、な〜んも知らないままだったと思うしね」

「うん、それにさ。悪魔を倒すくらいだったら結構何とかなつてきたじゃん？　政府とかアレだけど、とりあえずジプスがいるならちよつとは安心できるよな」

それぞれが何かこの状況に思う所があったのか、新幹線を待つ間に会話が弾む。

そこへ、相変わらず不機嫌そうな顔をした和久井啓太とご機嫌そう
な九条緋那子が現れる。

「……よお」

「あ、おったおった！　見送りに来たで〜！」

「ヒナコさんに……和久井くん。あ……私たちのために？」

「あつたり前やん！　ウチらもう仲間やし、ケイタも気にしててんで？」

「あんなあ……、お前、来いゆーたやろが」

苛立ちを隠さずケイタがヒナコを睨むが、ヒナコはそんな視線を意に介さず、からかうようにコロコロと笑う。

「可愛ないなあアンタ。ほな、その手に持つてんのは何？」

「……」

その言葉につられてケイタの手元を見てみると、確かに何かが入った紙袋が握られている。見られたことを察したのか、ケイタは舌打ちと共におもむろに紙袋を差し出した。

……これは？

受け取った紙袋の中には、『いか焼きようかん』と書かれた箱が3箱入っていた。

「……土産や。何や、美味いらしいわ」

微妙な雰囲気がある。

「いか焼きの、ようかん……？ お、美味しいのかな？」

「いや……貰えるなら貰うけどよ……これ絶対売れ残りでしょ……」

「いやいやいや、和久井くんのチョイスかもしれないだろ？ ここは信じてみよう」

ギリギリケイタに聞こえない声でやり取りが行われている……

「そやけど大変やね。アンタらの誰か、名古屋行くんやろ？」

「……」
ピクリ、とジョーの身体が反応するのが視界に見えた。

いや、そんな話は聞いてないけど……ダイチ達は？

「俺も聞いてない、と思う……」

「わ、私も……」

「うーん、俺も聞いてないな」

……って、それ本気？ 誰が名古屋に行くって？

全員に心当たりがない事を伝えると、ヒナコは小首を傾げ、不思議そうな顔をする。

「あれ……聞いてへんの？ ……ケイタク、アンタ伝えんの忘れとつたやろ？」

「……やかましい、今伝えるわ」

何しに名古屋へ？ また何か会議が？

「ああ……何や、物資の運搬とかいう話や」

「え……うーん……。でも突然、名古屋なんて……」

ケイタはひとつ溜め息を吐くと、ジョーに向けて睨みを利かせる。

「……おいアンタ、西の生まれやろ」

「ん……そうだね、出身は名古屋だよ。だから、この件は俺が適任だ。物資の運搬って話なら、車の免許もあるしね」

両手を脱力させたまま挙げ、お手上げといった様子で話し始める。

「車の免許なら俺も取ったばかりのやつがあるけど……ジョーさんの方が土地勘もあるだろうし……確かに適任だな」

「うん……じゃあ、ジョーさんはこのまま名古屋に？」

……確かに、そうなるのか。

大阪と名古屋は比較的近い。東京を経由してから行く場所ならともかく、大阪から東京に行き、名古屋にまた向かう必要は無い為東京に到着する前に別れるという事になる。

「……名古屋に行く奴は別の列車や。遅れて到着するって話やさかい、暫くはホームで待機やと」

ケイタが投げやりに言うと、ホームに列車が近付く音が聞こえてくる。

「おう、そつか。じゃあここでお別れかな？」

「そうみたいだな……じゃあジョーさん、怪我するなよ！」

「うん……向こうにも、悪魔は居るだろうし……無事にまた会いましょう……！」

帰ってきたら、向こうの様子でも教えてくれ

「そうだね……うん、写真を何枚か撮って来るよ。勿論、無事にね」

「……これでひとまず、お別れやな。ほな、色々ありがとう」

「あ、いえ……こちらこそ。それじゃ……また」

ケイタ、ヒナコ、ジョーのみがホームに残り、列車を見送る為に声を掛ける。

「また遊び来いや！ いつでも待ってるでー！」

「ほなな、アホウ。せいぜい頑張れや」

「そんじゃねー、そつちも大変だろうけど、頑張つてねー。あ、お土産取つとかなくていいけど味は教えてねー」

列車の扉が閉まり、東京へ向かってゆっくと走り出す。

☆

遠く離れた新幹線を見届け、息を吐く。

少し前に役目は終えたとばかりにホームから去ったケイタを追い、ヒナコもこの場には居ない。

——名古屋での物資の運搬の話が来たのは、偶然では無い。自

由時間内に本局の局長室を訪ね、直接交渉した結果だ。

「向こうにも何か理由がありそうな様子だったけど……さて、どう転ぶかな」

多少のトラブルがあろうと、関係無い。この状況で彼女の居る名古屋に向かえるなら物資の運搬程度お易い御用というものだ。

列車の走る音がホームに迫る。

秋江譲はひとり、自分の為に名古屋へ向う。

☆

無事に東京へ帰還し、現在は21:00。

俺は自室で就寝の準備を始めていた。

携帯が鳴る。

手を伸ばさずともひとりでに携帯は開き、画面にバニーガールの少女の姿を映し出した。

「やほほ、響希っち！ 今日もお疲れちん★」

……何の用だ

「んーつとね、特に用ってほどじゃないかな？ というか、もう用事は終わっちゃった★」

このティコと名乗る少女……前は執事服の男も居たか。Nicaeaを俺に与えた存在は謎が多い。ダイチや新田さん、ジョーに今日会ったヒナコやケイタにも、その存在を示すような発言は見られなかった。

だとするならば。この存在はNicaeaを与える為の存在では無いならば、要因は俺にある可能性がある。が、心当たりは微塵もない。

強いて言うのならばドウベやメラクを倒していることだろうが、それならばダイチ達にも現れてなければおかしい。

考えていると目蓋が重くなってくる。

ティコも、画面には居ない。

俺はそのまま眠りに着いた。

DAY 3 不穩の火曜日
(32) 不穩の火曜日

閉じた瞼に光を感じて目を開けると、外はもう明るくなっていった。枕元には携帯が充電器に繋がれた状態で置かれており、昨夜のティコとの会話なぞなかったかのように思える。

ブーツとした頭で手を見つめていると、ノック音と共に自室の扉が開かれる。

「久世、入るぞ。あ……す、すまない。寝起きだったか」

制服をきつちり着こなしたマコトが部屋に入ってくる。こちらを見るに何故か申し訳なさげに謝ってくるが、何故だろうか？

と、そこまで考えたところで先日もこんな事があつたなと思い出す。漸く記憶を遡れるまでに意識が覚醒してきた。

構わない、昨日と違って服も着てるしな。

ニヤリと笑いながらからかうと、マコトの顔に僅かながら赤みがさした。

「あつ、あれに関してはわざとではない！……しかし、見てしまったのも事実。不快な思いをさせたのなら謝罪しよう……」

生真面目と言うべきか、こちらは気にしていないというのに、律儀にもマコトは頭を下げてくる。

「君に早く伝えなければと思い、事を急いってしまったようだ……。本当にすまない。ジプスでの生活が長いせいか……。一般的な青少年への対応に、その……配慮が足りなかったな……」

動揺しているのか、聞いていない事まで口走っている。これはこれで見ていて面白いが、この部屋に訪れたという事は何か伝えたいことがあると言う事だろうか。

頭を上げてくれ。まさか、単に起こしに来たと言うだけじゃないだろう？

「あ、ああ……いや。実は……昨夜から名古屋の秋江と、連絡がつかない。……秋江だけではない、ジプスの名古屋支局も、昨夜から連絡が

途絶えた。何か、問題が起こったとしか考えられない……」

充電中の携帯に手を伸ばし、メールの受信を確認する。件数……2件。冷や汗が額に伝うのを感じながら、メールを開く。

☆

FROM：ヒナコ

SUBJECT：お疲れちゃんやで〜！

今日はホンマ、ありがとな！

おかげで色々助かったわ〜。

こんな時やなかったら、

大阪を案内したるんやけどな……。

155の豚まんとか、

めっちゃ食べさせてやりたいわ。

ま、ウチも大阪で頑張るさかい、

アンタも東京で頑張りや！

☆

FROM：ケイタ

SUBJECT：無題

今日は世話になったな。借りは返したる。覚えとけ。

☆

どうやら単にヒナコやケイタからの自分宛のメールだったようだ。
ジョーの死に顔動画が寝ている間に送られて
最悪の事態が起きていない事に安堵の息を吐く。

「その様子だと、秋江は死亡していないようだな……」

死に顔動画が届かずに死亡した……というのは悲観し過ぎか。少なくともジョーは生存していると見ていい。が……最悪なのは名古屋支局がジョーを除いて全滅している場合だな。

「……ありえない話ではないが、可能性は低いだろう。だが……状況が分からない。……志島が遭遇した白娘子と同様に、各地でジプスが管理していた悪魔が開封されて行っている。現在東京支局はその開封された悪魔の始末などに追われて、手が回らない状態だ」

ここまで聞いて、マコトが何を言いたいのかを察する。要は俺たちに名古屋へ向かって状況の確認をして欲しいのだろう。俺としても

このままジョーを見捨てるような真似はしたくない。答えは既に決まっているようなものだ。

……分かった。俺が名古屋に行こう。

「……君が名古屋へか。確かに戦力面で言えば充分なのだろうが……」

マコトは瞳を閉じ、何かを考えるように黙ってしまふ。流石に長考するようないことは無く、程なくして目を開ける。

「……正直に言おう。私は君たちに名古屋行きを取りつけるよう指示されている。だが……迷うのだ。これ以上、一般人である君たちを巻き込む事は……」

……迫真琴は優しい。あの厳格な峰津院大和の部下とは思えないほどに思いやりに溢れ、周囲への気配りを絶やさない……言うならば苦勞人気質だ。一人の人間としてその心遣いはとてもありがたいが、マコトは1つ勘違いをしている。

メールを確認してから握ったままの携帯を更に強く握り、白虎の名を呼ぶ。たったそれだけの事で、白虎は即座に俺の元へ駆け付ける。一般人が、なんだ？

悪魔と契約してから、俺は既に一般人であるとは到底言えない力を得てしまった。今更そんなことを言われても困るのは俺の方だ。

「……フ……そうか、それもそうだな。久世……頼む。新田と志島を連れて、名古屋へ向かって欲しい」

分かった

頷きと共に答えを返すと、マコトは軽い笑みを浮かべる。

「……ありがとう。約束しよう、後から我々も必ず駆付ける。では……8時頃に新橋だ。車両を手配しておく」

マコトはそう言い残し、部屋を出ていった。

☆

名古屋に向かう旨を伝える為に、新田さんを探していると、副都会線ホームに辿り着く。局員によると、ここに向かうと言っていたようだが……

副都会線ホームには青いビニール袋に包まれた遺体が並んでいた。

キヨロキヨロと周りを見ている間にも、ホームの奥へ担架に乗せられた怪我人が運ばれており、黄色いテントに入っていく。どうやらテントの内部で怪我人の処置をしているようだ。

テントの方向へ向かうと、この場所で働く人間の殆どがジプス局員だということに気付く。それ以外にも普通の服を着た、善意の協力者と思しき一般人がチラホラいる。

顔見知りの局員に軽く会釈をしてからテントの中を覗くと、怪我人への手当ての手伝いをしている新田さんを見つけた。

「あ……久世くん。えっと、ごめんね。……こんなトコで」
これは……全部？

テントの内部の怪我人は相当のもので、幾ら手伝いとは言えど無理があるように思えた。

「うん……だから……出来ることは、しようって思ったの……それにね、お父さんとお母さんが運ばれてくるかもしれないから……」

本当は無事なのが1番なんだけどね、と新田さんは薄く笑う。その間も手は休めない。

「あ……用事……だよ？ 少し待っててもらってもいい？」
構わないが……何か手伝える事は無いのか？

「う、うーん……？ ちよつと無いかな……気持ちだけ受け取っておくね、ありがとう」

その間に目の前の怪我人への処置を終え、持っていた道具を置いた新田さんと共にテントの外へと出る。

「ん……お待たせ。えっと、何かあった？」

名古屋に――

忙しいようなので手短かに伝えようとすると、慌ただしい気配が迫ってくるのが聞こえてくる。

「……え？ あ……ご、ごめん久世くん！ 少し待って……！」

2人の男性局員の手によって、ひとつの担架がこちらに向かって運ばれてくる。このままここに突っ立っていけば、時間を置かずに衝突するだろうと考え、1歩退いて道を開ける。

「女性1名を搬送！ ……酷い傷だ！ そこをどいてくれっ！」

搬送されていく女性は顔を苦痛に歪ませて、荒い息を吐いている。ふと新田さんの方を見ると、信じられないものを見たかのように目を見開き、顔を驚愕に染めている。

「……………お、お母さん!？」

改めてよく見ると、女性の顔立ちはどこか新田さんと似通ったものがある。が、視線を身体の下へ向けると身体を隠すように覆われた白い布に血が滲み始めている。相当の深手なのだろう。

「お母さんだよね!? ねえ、お母さんっ……………! 私だよ、イオだよっ……………!」

新田さんの悲痛な叫びがホーム内に響く。局員も一般人も皆一様に動きを止め、何かをこらえるように押し黙っている。

「う……………ア……………い、維緒……………? 維緒……………なの……………?」

答える声は弱々しいが、新田さんの母親はまだ生きていた。担架を搬送している局員が、少し焦りながら錯乱気味の新田さんに話しかける。

「家族の者か? なら一緒に来てくれ、とても危険な状態だ……………!」

「あ、は、はい!」

担架と共に新田さんがテントの中へ入る。結果的に取り残された俺は、ホームの柱に寄りかかる。直感的に、新田さんの母親は助からないだろうと感じていた。それはシートから滲んだ血もそうだが……………何よりこの状況であのような重体だ。対処したとして、延命にもなるか分からない。つくづく、この災害が恨めしかった。

「お母さん……………お母さん! ねえっ、お母さんっ……………!」

新田さんの叫ぶ声は少しの間続き、やがて止んだ。

☆

弱々しい足取りで、新田さんがテントから出てくる。彼女の母親がどうなったのかは、聞くまでもなく分かっていた。だが、律儀と言うべきか。新田さんは俯きながらも母親の生死について答えた。

「……………お母さん……………死んじゃった」

それは誰かに言わなければ耐えられなかったのか、自然と口から零れたのか。先程より明らかに人気の少なくなったホームに、新田さん

の独白が響く。

「お父さんも……。ケガして、死んだって。最期に……。そう言ったた……」

彼女が頻りに無事を気にしていた両親が先に旅立ったせいだろう。魂が抜け落ちたようにも思えるほど、新田さんは落ち込んでいる。

「何でこんな……。ヤダよ……。こんな……。……」

気持ちちは分かる、なんてありきたりな言葉を並べるのは簡単だ。それでこの場を収めるのは容易だろう……。然し。

数歩、こちらに背を向けて涙を堪える新田さんに歩み寄り、声をかける。

……泣きたいなら、泣いていいんだ。

所詮、俺達は普通の高校生で、まだ子供で。悪魔を使えるようになって、結局精神的に不安定なのは変わらない。今ここで泣いてしまっても、誰も責めはしない。

「……。ううん。泣かない……。私、泣かないよ。でも、どうして……。？ どうしてこんな事に……。何で死ななきゃ……。お母さんと、お父さんが……。……」

振り向いて見えた、今にも泣き出しそうな顔。余計なお世話だったかと後悔する。彼女なりに家族の死と向き合おうとしているのだろう。だが、この様子では暫く戦える心境では無いだろう。ならば、俺に出来るのは。

「……。ごめん……。久世くん、私に用事、だよね……。？」

後でいいよ、また後で……。な？

「……。！ごめつ……。久世、くん……。！ありがとう……。とつ……。！」

新田さんはそこで限界を迎えたのか、その場で泣き崩れてしまう。その場でしばらく寄り添い、涙が収まるのを待ってから、その場を後にした。

(33) いざ名古屋へ

続いてダイチを探していると、ダイチ本人から電話がかかってきた。何か厄介事かと思いつながら出る。

『お……出た出た。聞いたぜ、名古屋支局とジョーさんに連絡が取れないんだって?』

耳が早いな、マコトか?

『そうそう、いまさつき会ってさ。名古屋、まさかお前だけしか行かないとか……無いよな?』

ダイチの声に若干の焦りが込められているのを感じ取り、軽く笑ってしまう。

そんなわけが無いだろ、一緒に来てくれるなら大歓迎だ。

『だよな、はは……何言ってるんだか俺。それじゃ、新田さんにも連絡するか?』

……いや、新田さんにはもう伝えてある。今は怪我人の治療の手伝いをしてるから手が離せないってさ。

事実を丸々話すのは気が引けて、若干の嘘を混ぜる。ダイチの事だから後々地雷を踏みそうだが……それは後で伝えればいいだろう。

『そっか。じゃあ……8時に新橋だったよな? またその時に会おうぜ』

ああ、じゃあまた。

通話が切れた。ダイチもダイチで何か用があるようだし……暇になつてしまった。

……取り敢えず、悪魔倒して身体を慣らすか。

☆ 幸い悪魔は腐るほど東京に存在する為、相手には困らなかった。

時刻8:00。名古屋へ向かうため、新橋の専用車両ホームへやってきた。そこには新田さんの姿もある。やはり浮かない顔ではあるが、彼女なりの思いがあつてこの場にいるのだろう。

「あ……久世くん。あの、マコトさんなら名古屋の話、聞いたよ……」
もう、大丈夫か?

「あ……う、うん……。もう大丈夫……。だと思っ。ごめんね、ありがとう」

力の無い笑みを浮かべ、新田さんが感謝を述べる。よくよく見れば目が少し赤く、泣き腫らした後が見て取れた。

「あ、やっぱり遅れてた……。悪い、ちよつと手伝いが長引いた」

息を切らしながらダイチがホームに駆け込んでくる。かなり急いで来たようだ。

出発には間に合ったならいい。

「あ、そうなのね。いやあ……。間に合ってよかつたあ……」

「……全員揃ったな。協力に感謝する、ありがとう」

列車から何かの打ち合わせをしていたマコトから出てくる。新田さんとダイチの姿を認めると、満足気に頷く。

好きでやってるんだ、気にするな。

「そうそう、ジョーさんとは付き合いは短いけど……。見捨てるなんてできねえって！」

「それと……。名古屋支局の事も調べないと……」

「……その言葉だけで、私も救われる。さて……。新田も気にしていた名古屋支局だが、やはり連絡が取れず、状況も掴めない。……。だが、支局あてに君たちの事は連絡してある。誰かが気づけば迎えが来るだろう」

迎え、ね……。あんまり期待してないけど

「やる気だなあ……。でも、そうだよ……。都合よく迎えとか来るわけないもんな……」

「うん……。下手したら、向こうのホームも崩れたりしてるかも……」

「あー、そっか……。そういうのもあるんだった……。って言うかさ、名古屋支局と連絡が取れなくなったりしたのって、災害の原因と関係あるのか？」

ダイチの疑問に、マコトが厳しい顔で答える。

「……それも不明だ。今のところ何も掴めていない」

「どつちにしろ行ってみるしかないって事か……」

そこまで話した所で、列車から出発時刻が近付いている事を告げる

音楽が流れ始める。新田さん、ダイチが列車に乗り込み……俺も乗ろうとした所に、マコトが声をかけてくる。

「……。久世……」

「……どうした？」

「……君たちを巻き込んで、本当に済まない。気を付けて行ってこい」
ああ、行ってくる。

それだけ言い残し列車に乗り込むと、即座に列車が動き出す。
マコトは見えなくなるまで、俺達の乗った列車を見送っていた。

☆

数時間列車に揺られ、名古屋に到着した。ホームの姿形は新橋や大阪のものと酷似、あるいは同一のものだ。

「……来たね、名古屋。でも、迎えの人……」

ホーム内部にはやはりと言うべきか、迎えの局員の姿は無い。マコトの送った連絡は見えていないか、それともそれどころではないか。

取り敢えず、ジョーを探しに行こう。それと、名古屋支局も。

「うん……死に顔動画が届いてないから、大丈夫だとは思うけど……
それでも、心配だね」

「そうだよな……って、携帯電話ダメになってるじゃん！」

携帯をふと確認したダイチが、驚いたように報告してくる。確かに圏外と表示されており、これではメールや電話も使えないだろう。

「名古屋支局と連絡が取れないって……こういう事？ どうしちやっ
たんだろう……」

基地局が壊れたか、全滅か……基地局が壊れている方がまだ現実的
だな。

「あ、そっか。ここジプスの施設だから、全滅ならもつと壊れてる……
よな？」

ダイチの言葉の通り、ホームには意図的に破壊された跡どころか、
戦闘の痕跡すらない。何者かが侵入して全滅したとするならば、ここ
にも被害が及んでいなくてはおかしいだろう。

「でも、ジプスが全滅してなくて、基地局が壊れてるなら……なんで基
地局を直さないのかな……？ 全滅ほどではないにしても、やっぱり

何かあったんじや……」

確かに、そのままにしておく理由がないか……こればかりは局員に確認しないと分からないな。

「そうだよな……んじや、情報を集めながらジヨーさんの搜索……でいいんだよな？」

頷いて賛意を示す。当分進展があるまではそうなるだろうし、そうするしかない。現状ではあまりにも情報が無い。

どこを探すか相談しながら、俺達はホームを後にした。

(34) 追撃奮闘G I R L & a m p ; G U Y ①

名駅、金時計前。

ジョーを探していると、人集りを見つける。

「探して結構経つけど……全然見つからないな、ジョーさん……」

現在9:30。ジョーとジプスを捜索して30分。進展は殆どないと云って等しい。

「でも、連絡が取れないって聞いてたから、もつと壊れてるかと思ったけど……案外、それでも無いみたいだね」

「そうなんだよな……でも、名古屋支局どころか局員も見つからないとかどうなってんだよ……響希なんかマコトさんから聞いてねえ？」

全く聞いてないな……圏外になってるから今から聞くのも出来ないし……参った。

お手上げ状態の現状をどうにかすべく、移動しながら話していると、人の話し声が聞こえてくる。

「っへへへ……！ チョレえもんじゃ、ざまあみろて。ジプスの馬鹿どもめ！」

「……!? 久世くん、あれ……」

エレベーター前に数人の市民が集まっているのが見える。その中の一人が重そうに抱えている段ボールには、見慣れたジプスのマークが。

……どうも、味方ってわけじゃなさそうだ。

「って事は……戦うのか!? に、人間だぞ!!」

「でも……あの様子でジプスの荷物を持つてるとは、少なくとも悪魔使いなんじゃないかな……? だったら……」

「あ、そうか。携帯を壊せば無力化できる……?」

そういう事だ、行くぞ!

各々が携帯を構えると、向こうもこちらに気付いて全員が携帯を構える。

「……! 何じゃ、おみゃーら!」

「ま、ま、まさか追手!」

俺達の姿に動揺が走る様を見るに、戦闘慣れしているジプスでは無さそうだ……と考えていると、人集りの更に奥から少女が現れる。

「……あゝっ、いたゝっ!」

もう逃がさない、馬鹿……!」

苛立ちを含んだ声はまだ幼さを残しており、かく言う本人も学生服を着ている。

「……もう頭きたっ! 悪魔使つてでもぶっ飛ばすから!」

手足をバタバタとして全身で怒りを表す様は駄々をこねる子供のようだが、発言は非常に物騒だ。少女は宣言通り携帯を人集りに構えて、今にも一触即発の様子だ。

「ぎゃっ……あの女!? メチャクチャしつこいがや!」

どうやら悪魔使いの方にも悪い意味で面識があるようで、少女の姿を認めた瞬間あからさまに悪態を吐いた。

「な、なあ、あのエスカレーター上がった所にいるのってジプスだったりすんのかな……?」

面倒事の気配を感じたダイチが頬をひくつかせながら言うと、少女がこちらを見つける。

「……ちよつと、あなたたちっ!」

「あ……私たち……の事、だよね……」

「他に誰もいないでしょっ! あなたたち、誰っ! 一般人ならすぐ逃げて! 私^{暴徒}の敵なら……許さない!」

暴徒じゃない、ジプスだ! 東京支局から増援と味方の搜索に来た!

一方的にまくし立てる少女に叫んで言い返すと、少女の顔が驚愕に染まる。

「えっ……つまり味方?! ならお願い、手伝って! 私、ジプス名古屋支局の伴^{パン}亜^{アイリ}衣梨! ソイツら私たちの食料を奪ったの! このまま取り逃したらダメだよ、取り返すの手伝って! 食料を持って帰られたら、また調子に乗って暴れ回るに決まってるもん! それに全員の携帯を破壊して、もう戦えないようにしなきゃ……! それじゃ、お

願いねっ！」

「うわ……凄い元気だな……でも、念願の名古屋のジプスと会えたって事だよな？」

暴徒を挟んだ情報交換で、こちらがジプスだと発覚してしまったせいか、暴徒達にも焦りが見え始める。

「く……クソッ！ どうするがや！」

「あ、あの上にいる女は1人だ！ 上に回って、

ヤツだけ倒せば、何とか逃げられそうだがや……！」

「よ、よしっ……！ 下のあの子供らは食い止める、おみやーは食料を持って上から逃げろ！」

食料が入っているとされると思われる段ボールを持った男と、暴徒のリーダーらしき男が領き合って一斉に動きだす。段ボールを持った男はアイリの方へ、リーダー含めたほぼ全員の暴徒は、俺達を阻むように立ち塞がる。

「あっ……！ 食料持ってかれちやう……。」

「捕まえよう、久世くん！」

領きを返して、携帯を構える。

暴徒とは言うが、人間には変わりない。

なるべく無力化したいところだが……

「わ、悪く思わないでねっ……！」

OLらしき女性の暴徒から、麻痺パラレイが飛んでくる。咄嗟に飛び退いて避けたが、当たっていれば危なかっただろう。

内心冷や汗をかきながら白虎を呼び出す。どうやら手加減していると危ないのは、こちらのようだ。

☆

「ごめんなさいっ……！」

新田さんの放った電撃ジオが暴徒の女子高生に直撃し、携帯を取り落とさせる。

「ぎゃあっ……！ け、携帯が……！」

電撃を受けて軽く痙攣する身体では、落とされた携帯を拾うこともままならない。新田さんは一瞬の逡巡の後に携帯を踏み潰し、破壊す

る。

「わ、私の携帯……」

「あの、ごめんなさい……」

微妙な空気が女子高生と新田さんの中に流れる中、後ろから男の暴徒が新田さんに襲いかかる。

「お、お前！ ちょっと大人しくしとれ！」

——させませんよ！

暴徒から放たれる雷撃が、新田さんに直撃する手前に現れたハトホルによつて防がれる。

「なにっ……!?!」

「あ……ありがとう、ハトホル……!」

——いいですよ、これはお節介のようなもの……これくらいはさせてください。

正に女神のように微笑みながら、攻撃を仕掛けてきた暴徒に掌を向け、ハトホルは鏡返しのように雷の乱舞を放った。かなり激しいものを放ったように見えたのは気の所為だろうか。

「ぐう……!?! く、悔しいが、ここは逃げないかんか……」

雷撃を受けて煙をあげる携帯を投げ捨て、暴徒がまた1人逃げ去った。

☆

「待てってオツサン、このっ……!」

「ぜ、絶対に捕まらんぞ……! ……この食料は俺達のモンだ！」

「たいがいにしとけや！ このたわけが！」

段ボールを持った暴徒を追うダイチに向け、怒声と共に炎の乱舞が放たれる。炎を避けようと思わず足が止まり、食料を持った暴徒はどんどん遠くへ離れていく。

「おめえの相手は俺だ！ このガキ共が……!」

進路を塞ぐように立ちはだかる暴徒のリーダーは怒りに顔を赤く染め、追撃とばかりに再び炎の乱舞が向かってくる。

「うわわっ……! あつぶねえ……燃えたらどうすんだよ！」

「知るか！ 邪魔をするんじやにやー！」

炎、炎、炎。それ以外知らぬとばかりに炎を放ち続けていた暴徒のリーダーだが、暫くすると携帯を構えても炎が出なくなってしまう。暴徒自身も原因が分からないようで、不思議な顔で携帯を弄っている。

「あ……？　なんだ、故障か……？」

「隙ありいっ！」

「ぐわっ!？」

炎が出なくなった事をこれ幸いと、今まで炎を避け続けていたダイチが、携帯に向けて狙い撃ちを放つ。寸分違わず振り抜かれた拳は確かに携帯を手から叩き落とし、地面を滑る。

舌打ちをしながら暴徒のリーダーは携帯を拾いに行こうと走るが、そうはさせじとハヌマーンが転がった携帯を踏み抜き、破壊した。

「ジプスめ、ちよすきおって……！」

携帯がなければどうしようもないと判断したのか、捨て台詞を吐きながら暴徒のリーダーはこの場を去っていく。

「ふう……つて安心して居る場合じゃねえ!?　あの段ボール持ったオッサン追わないと……！」

一息つく間もなく、ダイチは暴徒を追って駆け出した……。

☆

「絶対、許さない！　チヨコマカ逃げ回っちゃって、バカじゃないのっ……！」

苛立ちを隠しもせずになぞり叫び、段ボールを持った暴徒を、アイリがエスカレーターの上で迎え撃つ。

「ど……退け……！　これは俺達の食料だっ……！」

「っ……！　アンタなんか負けるわけないでしょっ！　来てっ……カイチー！」

アイリの携帯から歪んだ一本角の羊のような悪魔が召喚される。カイチと呼ばれた悪魔はアイリに付き従うように佇み、暴徒をただ見つめている。

「カイチ……やって！」

アイリのその掛け声と共に、カイチは暴徒に向けて駆け出す。

「く……クソ！ この食料は渡すものか！」

負けじと暴徒も携帯を構えるが、悪魔を呼び出したその瞬間に、勢いよく駆け出していたカイチが悪魔に角を突き刺す。運がいいのか悪いのか、角は急所を抉り取り、一撃で悪魔を死に追いやる。

「ああつ!？」

「アンタの相手はこつちよ！」

暴徒が悪魔に気を取られているうちに、アイリは衝撃で携帯を狙い撃つ。その精度は凄まじく、暴徒の携帯のみを弾き飛ばした。暴徒の携帯は場所もあつてか高所から落ちてしまい、バキツという音ともに壊れてその役目を終えた。アイリは呆気にとられる暴徒から食料の入った段ボールを奪い取る。

「ああつ……、みんなの分の食料が……！ チクシヨウ！」

「なによっ！ これは元々ジプスのものでしょ！」

アイリを恨めしげに睨み、暴徒はその場を去って行った。

☆

「えつと……それであなたたち、誰ですか？」

暴徒を無力化し終わった後、アイリが声をかけてきた。

東京支局からの応援だ。正式なジプス局員では無いが……それは君もだろ？

「まあ、そうだけど……でも、ちよつと遅くない？ もう少し早ければ……」

それは………すまん。名古屋支局との連絡が取れずにあちこち探し回ってたら遅くなった。

「あ、違うの。別に謝ることじゃないんだけど……名古屋ジプスき、占拠されて滅茶苦茶なんだよね。携帯も使えなくなっちゃったし……」

占拠……あの暴徒達か？

「あ、うん。ホラ、今つて食料とか、医療品とか、もう普通に不足してるじゃん？ それをジプスが独占してるって言って、なんか……栗木ロナウドって男が暴徒を引き連れてき、いきなり乗り込んできたんだよね。それで……みんなバラバラ」

「栗木……ロナウド？ その人が暴徒の中心に……？」

「うん、そうみたい。暴徒に支持してたから、なんかリーダーっぽい感じ……」

他に、何か知らないか？

「えつと……私も入ったばっかでそんなに詳しくないけど……でも、なんか変なおじさんは見かけたかな。赤い豚みたいな悪魔を使って資材とか奪ってた。もうなんか……見た目は普通のおじさんなのに他の暴徒と違って滅茶苦茶強くてさ……その時に一緒に戦ってた鳥居純吾ってヤツともはぐれちゃうし……」

……赤い豚？

気になる単語がアイリの口から放たれるが、アイリは気付かずに捲きたてるように愚痴を零し続ける。

「アイツ、ホント馬鹿なんだよ！ いつも勝手に動いて、ピンチになっちゃうんだから！」

「な、なあ、その赤い豚についてもうちよつと詳しく教えてくんね……？」

「え？ いいけど……えつと、あの悪魔は確かカマプアアって呼ばれてたかな。それ以外はなんにも知らない……それがどうしたの？」

「久世くん……これって……！」

名古屋に向かった時期、年齢、悪魔の名前……これだけ揃って、同名の悪魔を使う別人というのは無理だろう。それは、つまり。

ジョーが暴徒の一員になった事を意味する。

(35) 追撃奮闘GIRL & a m p ; GUY②

サンシャイン栄。

ジョーが通りにある病院を見上げている。

佇むジョーに人影が近づき、ジョーも人影に気付くと軽く手を挙げて挨拶する。

「……やあ。誰かと思えば君か。や〜……はは。ここにジプスはいないみたいだねえ。……それじゃ、他の所を探してみよつか？」

誤魔化すように薄笑いを浮かべてこの場を去ろうとするジョーに、人影が問いを投げかける。

「……病院に用事でもあるのか？」

「あ〜……ソレね。はは、気になっちゃう？ え〜つとね……実はさ、入院しててね、彼女。あの病院にいるんだけど」

「お前の彼女が……？」

意外そうな声色で人影が問うと、ジョーは照れくさそうに頬を掻きながら話し始めた。

「うん……そうなるねえ。もう何年くらいになるだろ？ 結構長い、かな。それでさっき、チラツと行って、様子を見て来たんだ」

「それで、どうだった？」

「あ、なんか大丈夫みたい。病院だから頑丈っぽいし、あの地震の影響は少ないらしいね。こちら辺は悪魔もまだ居ないって、看護師さんが言ってたよ」

「……彼女には会ってないのか？」

「あ〜、ははは。痛いところ突くねえ。会ってはないんだよ、彼女には。いや……ほらさ？ 今、会っても逆にアレじゃない？」

その、アレだよアレ。なんて言うか……さ？

ねえ、分かるでしょ？」

途端にジョーは拳動不審になり、無理矢理誤魔化そうとしている……その様子を見て、人影が何かを言おうとすると、それを察したのかジョーが強引に話を切りあげる。

「まあー！安心ってコトで……」

それじゃあ、行こうかな。はは……」

ジョーはそくさとその場を立ち去った……。残された人影は暫く病院を見上げた後に、その場を後にした……。

☆

「一旦ジョーさんの事は置いて……つまり、名古屋じゃ暴動が起きてたってワケか……それで名古屋支局を占拠されて、局員たちもバラバラになって……連絡がつかなくなった、と……これどうするよ、響希？」

……取り敢えず、その鳥居純吾って奴も探そう。今は戦力が欲しい。

「あく、そうだよな……あの様子だと暴徒ってあれだけじゃなさそうだし……ってなると、他のジプス局員も探した方がいいのか」

「そうだな、名古屋が今どうなってるか……それが分からないと解決しようがない。」

「え、ホントに？　そうしてくれると助かるかな。私も探してみるから……！　それじゃー！」

アイリはそういうと俺達が止める間もなく走り去ってしまう。

「……じゃあ久世くん。私達も行こう？　急いだ方がいいよ、きつと……」

……そうだな。

全員でその場を後にした……。

☆

名駅、ペルミナ。

ジョーが足を止め、地下街を見回している。人影が近付くと、ジョーは気さくに手を挙げて挨拶し、近くのベンチに来るように誘う。

「ああ、君か。こっちは進展ナシだよ。」

んん……ちよつと休憩しよつか。名古屋って久しぶりだからさ、つい見入っちゃうなあ。ここも彼女と、よく来たもんだ」

「久しぶり？　そうなのか？」

一人語りを始めるジョーに付き合っ、人影もまたベンチに座っ

た。

「そうそう、いつも待ち合わせ遅れるから、よく彼女に奢らされたモンだよ。……あれ、言わなかったっけ？ 俺、名古屋出身なんだよね。あんまり帰ってないけど、一応……」

「少なくとも俺は聞いていないな……」

他愛のないことを話していると、人影にとっては聞き覚えのない男性の声が、背後から投げ掛けられる。

「お、おい……ジョー？ ジョーじゃないか!？」

ジョーに呼びかけた男性が駆け寄って来る。

「おお……？ 誰かと思えば……カッチン！」

「お前……！ 名古屋にいたのかよ！ よく無事だったなあ……！」

「やくちよつとね。カッチンも、よく無事で。こんな所で会えるとはねえ」

男はジョーの友人らしい。お互い曇りない笑顔で再会を喜び合っている……。

「お前、東京で何してたんだ？ 全つ然、連絡よこさないから心配してたんだぞ」

「メンゴメンゴ。仕事がバタバタしててさ。すっごい忙しいんだ、あの会社」

「……その様子じゃ、彼女とも会ってないんだろ？」

「あ、いや、まあねえ？ 仕事がさ？」

彼女の事を聞かれると、ジョーは途端に目を逸らし始めてしまう。そんな様子でジョーの友人は溜息をつく。

「人づてに聞いたんだけど、だいぶバイんだって？ 最近また体調崩したって……」

「は……？ 体調を崩した……？」

再会の喜びで浮かべていた笑顔が崩れ、ジョーは驚愕に目を見開く。

「……？ ジョー？ お前まさか何も……」

「……え？ あ……あ、そうね。うん、大変なんだよ」

「……」

「いや〜でもアレだよ。何とかなるよ、きつと。これまでもそうだったしさ……」

「……お前が支えてやれよ。ずっと会いたがってたんだぞ。……じゃあ、もう行くわ。ちよつと人を待たせてな。また無事で会おうぜ……！」

ジョーの友人は何か言いたげにしていたが、本当に急いでいるらしく振り返りもせずにそのまま走り去っていった……

「……体調を崩した……？」

「……まさか、知らなかったのか？」

「ああ、いや〜……。ちよつと聞いてなくて……ま、まあ取り敢えず、カツチンが無事で良かったよ。それじゃ行こつか。はは……」

ジョーは一瞬だけ暗い表情を見せた……

☆

栄、センターリングパーク。

ジョーと鳥居純吾なる人物を探しに名古屋を歩き回っているが、手がかりや情報が微塵も無い為、搜索の結果は芳しくないと言わざるを得なかった。

「ジョーさん、見つからないね。こんなに広いんだもん、時間かかりそう……」

今は本人じゃなくて手がかりを探す為に行動した方がいいかもしれない、が……アイリから鳥居純吾の外見を聞いてなかったのは失敗だったな……

「そうだよなあ……写真とかあるとないとじゃ、探す手間も段違いだし……いつそ今からアイリ探すかあ……？」

と、相談しながら歩いていると、進む先が騒がしくなってきたのに気付く。それも物音などではなく、人間の怒声などが主だ。

「クソツ……何じゃあコイツ！ 全員で囲まな！」

「……！ 久世くん、行ってみよう？」

……そうだな、どちらにせよあの言い方だと1人を複数で叩いているようだし……見過ごせはしないか。

「まあ……そうなるよな。もし囲まれてるのが鳥居ってヤツなら助け

なきやなんないし……もしかしたらなんか話聞けるかも」

幸いにして、声はそこまで遠くではない。足早に怒声のする方向へ走る。

「……落ち着け、大丈夫だ！ 相手は1人だけやがやつ！」

先程と同じ怒声の声の主が、暴徒と思しき仲間に指示を出している。囲んでいるのは学生服を着た大柄の少年。その頭には黒いニツト帽が。

悪魔と悪魔使いに囲まれているも、その顔は焦りや絶望とは程遠く、どちらかと言えば悲痛な表情を浮かべていた。

「痛かったらごめん……！」

寡れたサラリーマン風の男に謝りながらも、その拳は正確に顔面を捉える。信じ難い事に、殴られた男はその衝撃のみで吹き飛ばされ……携帯を落とした。

「ぐあ……！ コ、コイツ、強い……。こりやいかんてえ……！」

受けた一撃で鼻血が出たのか、鼻を抑えながら男は携帯も拾わずに尻尾を巻いて逃げ去った。

「アラハバキー！」

一瞬の逡巡を見せつつも、男が落とした携帯を踏み潰した少年がその名を叫ぶと、青銅色の土偶のような姿をした悪魔が召喚される。

—————

アラハバキと呼ばれた悪魔はその姿に似合わぬ俊敏性を発揮し、背後から忍び寄る悪魔に向き直る。察知された事に戸惑う悪魔はその場を離れようとするも、足が動かない。当惑しながら自らの足を見ると、急速に足元から肉体が氷結し始めている。それから間を置かず、アラハバキは抵抗の一切を許さずに悪魔を氷像へ変えてしまった。

少年は労うようにアラハバキ向けて頷くと、再び悲痛な顔をしながら氷像となった悪魔へ拳を叩きつけた。悪魔はそのまま氷片となり砕け散る。

「ひいっ……わ、私も逃げなきや……！」

氷片となった悪魔の主は顔を恐怖に染めながら一目散に逃げている。最終的には怒声を上げていた男が一人残り、苦々しげに舌打ちを

する。

「あ……たわけ！　こんなガキ相手に逃げるなて……！」

少年はその様子を気にもとめずに、いつの間にか女性が落としていた携帯を踏み潰し、暴徒の男へ向き直る。

「うっ……。この野郎……！　これで勝ったと……！」

流星に不利を悟ったのか後退りをし始める男は、少年の背後を見てニタリと凶悪な笑みを浮かべる。

「……おおく、こつちだ！　おみやーら、助けてくれー！」

「おお、ジプスがおるんか！　俺たちに任せとけ！」

更に一人、男の仲間と思しき暴徒が現れる。少年はそれでも余裕を持ち、油断なく拳を構えている。

「……また来た？　でもジュンゴ、負けないよ」

「……！　聞いたか？　いま、ジュンゴって……！」

「う、うん……でも、すごい。あんな数相手に一人で立ち回ってる……」

だがこのまま見てる訳にも行かないだろ、助けるぞ。

「え、あ、そつか。うん……！」

と、ここで油断なく辺りを見渡していたジュンゴが、こちらの姿に気付き声を投げかけてくる。

「……。鳥居純吾^{トリエ}ジュンゴの敵？　味方？」

言葉少なに語りかけてくるジュンゴはの瞳は俺たちを見定めるように静かで、僅かにこちらへの期待も込められているように思えた。

久世響希、味方だ。

「……」

こちらも簡潔にそう伝えようと、ジュンゴは嬉しそうに頷き、また暴徒へ向き直る。

「……味方。ジュンゴ負けない」

「ちよ……なんか暴徒また増えてね……!？」

「流星にこの量は一人だと厳しい、よね……」

新田さんの視線の先には、更にこちらへ駆けつけてくる暴徒達の姿がある。先程逃げた暴徒が増援を呼びでもしたのだろうか。

ジユンゴが囲まれる前にさっさと終わらせるぞ！

激を飛ばし各々が携帯を構える。

再び、暴徒達との戦闘が始まろうとしていた。誰もが、この場を見る男の影に気付かずに。

(36) 追撃奮闘G I R L & a m p ; G U Y ③

「飛ぶぞ、ハヌマーン!」

ダイチがそう命じると、ハヌマーンはガシリとダイチを横持ちし、軽くその場で飛び上がると、一瞬にしてその姿が消え去る。

「えっ……? きゃっ!」

ダイチと交戦していた女子学生は戸惑いながら姿を探すが、その答えは背後から受けた衝撃で理解することになる。

「うっし……! 上手くいった……!」

後ろから強い衝撃を受けた女子学生は、意識を失い前のめりに倒れる。その背後に立つハヌマーンの脚は、蒼く輝いていた。

夢幻の具足と称されるそれは、本来味方と隣合つて戦う為の力であるが、現在はダイチによつて敵対している敵の背後を取る為に使われていた。

「えーつと……そうだ、携帯。壊しといた方がいいよな……」

すまん、と謝罪を口にしながらダイチもジュンゴに倣い、暴徒の携帯を踏み潰す。

「このっ……ガキがあ!」

「わっ、ちよっ……!」

仲間がやられた事に対してか、怒りに肩を震わせたチンピラが、拳を握り締めてダイチに殴りかかってくる。しかし、その拳は悪魔のそれより格段に遅い。不意を突かれ驚きはしたが、ダイチはしっかりとチンピラの拳を躲した。

「クソッ……! ならこれはどうだ……!」

続けて、チンピラから雷の乱舞が襲い掛かる。拳を避けて体勢を崩したダイチにはこれを避ける術は無い。放たれた3つの雷撃の内、2つはあらゆる方向に向かったが……残る1つがダイチに迫る。

「ちよ、まっ……マジかよっ!」

ダイチは咄嗟に腕を重ねるようにして雷撃から身を守るが、それも意味を成さず。

雷撃が直撃する。

☆

「ジュンゴ、まだまだ元気。お前たち、勝ち目ない……」

だから降参してくれと言わんばかりに、ジュンゴは悲しげな瞳をしながら、暴徒の男へ歩みを進める。

「お前たち卑怯。携帯電話、壊す……!」

「あ、アイツを、アイツを止めろ! 牛頭鬼!」

「……!」

暴徒の男により召喚された牛頭の悪魔が、ジュンゴへ斧を振るう。至近距離で振るわれた斧をジュンゴは避けようとはせず、斧の柄腹を掴んで強引に斧を押し留める。

「んなっ……!?!」

——馬鹿な……!——

「ん……! ジュンゴ、力比べなら……負けなよ……!」

最初は押され気味だったジュンゴは、徐々に牛頭鬼に斧を押し返し……攻撃していた筈の牛頭鬼が、ジュンゴによって吹き飛ばされる。

「悪魔使わなくても、本人の方がよっぽどバケモンじゃねえか……!?!」
牛頭鬼から奪い取った斧を真つ二つに折り投げ捨てながら、ジュンゴは再び歩みを進める。

☆

「ネコマタ! パララレイ!」

人と猫の間を取ったような姿の悪魔が、新田維緒に向けて黄色の瘴気を放つ。決して遅くない速度で新田維緒に迫るその瘴気は、そのまま進めば確実に直撃しただろう。しかし。

「ハトホルっ……!」

すんでのところでその瘴気は打ち払われる。否、瘴気自体は直撃した。新田維緒には無く、その仲魔であるハトホルに。

全身に麻痺を齎す瘴気を受けたハトホルは、しかしその動きを鈍らせる事無く、唾然としているネコマタとその主人に掌を向ける。その動作に警戒を抱いた所で、もう遅い。

——マハジオ。

小さく、ハトホルがそう呟く。たったそれだけで、掌より解き放た

れた雷撃が、ネコマタと暴徒に直撃する。

「きやつ……！ 何よ……！ ジプスの、クセに……！」

ネコマタはそのまま光の塵となって消え去り、暴徒も手に持つ携帯が壊れる……と、それ以前に本人が気絶してしまっていた。慌てて新田維緒が駆け寄ると、流石に無傷とは行かなくてももしかると暴徒は生きていた。

その事実に一息吐き、ハトホルに頼んで最低限暴徒の治療をしてもらう。確かに敵対し戦った間柄だが、災害が起きなければこのように戦うこともなかった筈だ。

「早く、こんな災害……終わらせなきゃ……」

悲しげに呟きながら、新田維緒はハトホルの手当を手伝い始める。

☆

「ぐ……い、生きてる……け、ど……身体がつ……!？」

雷撃は直撃したものの、ダイチは生存していた。然し全身が麻痺し、辛うじて指が動かせる程度だ。

「このジプスが……！ 手間取らせやがって……！」

「ぐうっ……！」

怒り心頭といった様子の暴徒が思い切り腹に蹴りを入れる。胃の中の物が外へ出そうになるが、堪える。堪え、チンピラの蹴る足を締め上げるように抱き着く。

「ゲホっ、ゲホ……くっこそ、思いつ切り蹴りやがって……」

「な……なんのつもりだア!？」

不可解なダイチの行動に疑問を抱くも、チンピラはリンチを続けようとするが、思った以上の力で抱き締められた脚はピクリとも動かない。

「へっ……俺は、弱いからさ……こんな事しか、アイツに貢献出来ねえけどよ……」

「クソっ！ 離せよッ……！ なんなんだこいつ……！」

残る片方の足で踏み付けても、踏み付けても、ダイチが足を掴む力は微塵も緩まない。その事実寒気を覚えながらも、一心不乱にチンピラはダイチを踏み付けていたが、首根っこを掴まれるようにして身

体が浮いた事により、リンチは中断される。

「なっ……誰だ!? クソ、離しやがれっ!」

——吹き飛べ、ザンダイン

「ぎやああっ!?!」

藻掻くチンピラを無視し、首根つこを離さないまま、ハヌマーンはチンピラの背中に衝撃波を放つ。悲鳴を上げながら吹き飛ぶチンピラはそのまま地面に投げ出され、動かなくなる。

「ナイス、ハヌマーン……いやマジで」

——身を呈すにはやり過ぎだろう。

「悪いって……でも助けてくれるって信じてたからさ、だろ?」

ハヌマーンはその様子に顔を手で覆いながら呆れたように深いため息を吐くと、ダイチから背を翻してチンピラを足で転がす。

「ちよっ……無視は無いだろ! ……で? 殺してないよな?」

——無論だ、念の為調べたが……気絶してるだけだな

「うっし……なら次、だな!」

——怪我はするなよ……跳ぶぞ

再び、ダイチとハヌマーンはその場から残像を残して跳躍する。

☆

「……助けに来たで! ジプスめ……覚悟せえよ!」

くっ……またか……!

増援に続く増援。暴徒達は一人一人はそこまで強くは無いものの数が多く、響希達は苦戦を強いられていた。

「久世くん……!」

「響希……!」

いつの間にか、新田さんやダイチと共に階段下に追い詰められ始めている。ここから抜け出そうにも暴徒達が壁となり、容易く実行するのは難しいだろう。

「まだ、負けない……!」

ジュンゴも同様に暴徒達に囲まれているようで、時折暴徒の悲鳴と吹き飛ぶ姿が見える。これではジュンゴの力を借りるのも無理だろう。

ギリ、と無意識に歯を食いしばる。悪魔を殺すのは抵抗感はあるけど、自衛のために仕方なかった。然し、同じ悪魔使いと言えど暴徒達は今も生きる人間だ。強行突破は可能だとしても……出来ない。それは、犠牲を伴う方法だ。

何か、何かないか。藁をも掴む思いで視線を巡らせていると、セントリングパークに1人の男が現れるのが見えた。顔はハットによって隠れているが、ハットから溢れるような癖毛は赤。

手には携帯。然し男は電話をするでもなく、ただ単に携帯を開き、少しだけボタンを操作するだけに留めている。一見して何をしているのか分からない行為だが、それは悪魔使いにとってはあまりにも覚えのある行為だ。

「やれやれ……随分と物騒だねえ」

男は独白にしてはやけに大きい声で、暴徒達に話しかける。その声には嘆くような悲しみと、失望するような怒りが込められているようにも思えた。それは暴徒も同じだったのか、苛立つように怒鳴り返す。

「ああん……？ 何だあ、お前……！ まさか、お前もジプスってんじゃないだろうなあ！」

「……ジプス、ジプスねえ。俺はそんな名前のヤツは知らねえな？」
含みのある言い方ではあるが、ジュンゴが反応を返して居ないのを見るに、名古屋支局の人間でもないようだ。当然、俺やダイチ、新田さんにも覚えはない。

「じゃあお前は何なんだ！ 用がねえならとつとと行きな！」

「名乗るほどのもんじゃねえさ。……が、用ならあるぜ。その子供らを置いては去れねえからな……！」

力強く、男は1歩を踏み出す。その一步に付き従うかのように、一体の悪魔が男の傍らに召喚された。

悪魔……否。それは正しく鬼神と呼ばれるべき存在だ。Nicca e a が示すその悪魔の名は、ジコクテン。憤怒の形相の武将の如き鬼神が現れると、暴徒達の悪魔が目に見えて怯えを見せ始める。

「さて……やるぜ、ジコクテン」

———むう……！

☆

やがて、たった1人と一体の悪魔により、センタリングパークで暴れていた暴徒達は全て鎮圧された。重軽傷者が数人、死者0という規模に見合わない被害で、この騒動は集結した。

(37) デラデカ

「まあ、こんなもんかね」

男は一通り暴徒達を蹴散らすと、武将のような悪魔を帰還させる。暴徒は既に全員が逃げ帰り、この場には男と響希達しかいない。

「お、終わったのか……？」

「みたいだね……」

誰だか知らないが、助かったな……

あのまま戦っていれば何れ悪魔共々消耗し、携帯を壊されていたのはこちら側だろう。そういう意味では、俺達は間接的にこの男に命を救われたも同然となる。

「はっ、なに……お易い御用さ。詳しい事情は知らねえが、見たところお前達が悪事を働いてるようには見えなかったんでな。ちよちよいと手を貸してやってただけさ」

手で服の埃を払いながら、男は何ともなさげに言う。

「……しっかし世の中、荒んじまったモンだけ。街も、人の心もな。俺も君くらいの歳の娘を探しているんだが、こんな状況じゃなかなか……おっと、すまん。大人の俺が弱音吐いてちや、カツコがつかねえな、はは」

暴徒達が逃げた方を眺めながら、男は愚痴のようにそう零すと、何かに気付いたのか新田さんが男へ話しかける。

「あ、あの……娘さんを、探してるんですか？」

「ん……まあ、そうだな。事情があつてな……もう随分と会ってないが、街中こんな様子じゃ事情なんてあつてないようなもんだ」

なら、ジプスで探してみれば見つかるかもしれないな……

何気なく口にしたジプス、という単語。それを聞いた途端に、一瞬だけではあるが男の動きがピタリと止まる。

「あー、なんだ。そのジプスってのはなんだか知らねえが……暫くは自分の手で探したくてな。じゃねえと……親としてのメンツが、な」

自嘲する様な笑みを浮かべて、男は申し訳無さげな表情を浮かべ、断りを入れた。

「あ……そうですよね……すみません、余計なお世話を……」

「構わねえさ。気持ちだけ受け取っとくよ、ありがとな」

「いえ……寧ろお礼を言うのはこっちで……」

「そうそう、アンタのおかげで助かったよ」

「そりや良かった……んじや、俺はそろそろ行くよ、達者でな！」

男はこちらが何かを言うのを待つこと無く、迷い無い歩みで立ち去ってしまった。

せめて名前でも聞きたかったが……

「あー、そうだな。こつちも名乗ってないし……でも、あんだけ強いんだからまたどつかで会えるんじゃないか？」

「うん……あの人は簡単にやられたりはしなさそうだよね……」

だどいいが……そうだ、ジュンゴは――

「いるよ……ジプス？」

階段を上りながら、アラハバキを従えた鳥居純吾が声をかけてきた。

東京支部からの応援だ。

「……。でも、服違う」

「そりやお前もだろ……民間人の協力者ってヤツじゃないの？ オレ達もお前も」

「……。確かにジュンゴも制服じや、無い」

「あはは……それで納得しちゃうんだ……」

「あー、いたっ！ 馬鹿ジュンゴっ……！」

こちらの姿を見つけたのか、アイリがこちらへ走って合流する。ジュンゴは緩慢とした動作でアイリの方を見ると、何処か安堵した様な雰囲気醸し出した。

「……。アイリ……無事だった。良かった」

「馬鹿じゃないの!? アンタの方が心配だっつーの！」

「……。……ジュンゴが？」

ジュンゴは戸惑っている……

まあまあ……無事だったんだからいいだろ

「つたく……すぐどつか行くんだから、少しは気を付けてよ！」

「あの……伴ちゃん、鳥居くんもきつと、心配してくれて……」
「甘やかしちやダメ！ ソイツ、毎回なんだから！」

憤るアイリを宥めようと新田さんが話し掛けると、喚くようにアイリがジユンゴを指差す

「え……ぶ、ごめんなさい。でもきつと鳥居くんも……。あ……アレ？」

当のジユンゴは新田さんとアイリの言い争いなどいざ知らず、どこかへ向かって既に歩き出している……。

「ちよ……ちよつと、ジユンゴ！」

「……他の場所を助けに行くよ。みんな、バラバラだから。アイリも気をつけて！」

それだけ言い残すと、ジユンゴは走り去って行った……。

「……あ・り・え・な・いっ！ 何なのアイツ〜！」

不思議な奴だな……普段からあなののか？

「うん……。いつもあんな感じ。悪いヤツじゃないんだけど……」

「……。……凄い人だね」

「つてか、ジョーさんの事ジユンゴに聞き忘れてた……！ ……まあ、あの様子だと知らなそうだけど……」

ジユンゴについて話し合っていると、突然全員の携帯が一斉に鳴り始める。

……メールだ

誰が言い出すでもなく、全員が携帯に届いたメールに目を通す。メールの内容は、内心でこの場の誰もが察していた通り、死に顔動画だった。

☆

多くの座席が並ぶ、舞台の無い劇場のような場所に、暴徒らしき人々とジユンゴが対峙している。多勢に無勢の中、ジユンゴは数多の暴徒と善戦するが……数に押され、血の中に倒れる。

暴徒達の中には、とてつもなく見覚えのある、縞柄のスーツの男の姿があった。

☆

「……！ これ……ジュンゴ……？ ウソ……」

「ヤ……ヤバイじゃん！ どうすんだよ……！」

「アイツ死んじゃう、早く追いかけなきゃ……！」

「ま……待って、久世くんこれ……」

新田さんが指を差すのは血の中に倒れるジュンゴでは無く、その奥。縞柄のスーツの男。

……ジョーだな。

「やつぱり、ジョーさんは……」

「……!? アンタ達、コイツと知り合いなの!？」

ジョーと暴徒達が一緒に居るといふ動画に困惑していると、新田さんの手元を覗き込んだアイリが、驚愕の目線でこちらを見る。

「これ……これが赤い豚の悪魔を使つてた変なおじさんよ！」

「うん……元々、私たちと同じ東京支局からの応援だったんだけど……」

「あああ……もう！ 何がなんだか訳わかんねえ……！」

……取り敢えずはジュンゴを探そう。そうすればジョーにも会える。

「そ、そうだよな……でも探すにしても、俺こんな場所知らねーし……」

「そうだ……伴ちゃん。この場所、知らないかな？」

「え、あ、うん……。それ、私も考えてたけど、ちよつと覚えてなくて……。映画館か劇場？ なんかホールっぽいけど……。これだけじゃわかんないよ……！」

「くっそ……今度こそ手がかり無しか……」

「……！ あ……そうだ！ フミなら……フミなら分かるかも！」

フミ……？ 誰の事だ？

「あ、うん。えつとね、菅野史かんのふみつて言う名古屋ジプスの人がいて……ちよつと天然つて言うか、変な人だけ……科学とか？ そういうの詳しいんだよね。昨日から見てないけど……、さつき見かけてる人が居たの。多分、見間違いじゃないと思う。チャイナ服にジプスの

コート着て、いつもパソコン持ち歩いて……とにかく、かなり変テコだから」

チャイナ服……若しかすると大阪のフェスティバルゲートで遭遇したあの女性だろうか……ふと視線を感じて横を見ると、新田さんが物言いたげな視線を向けてきている。おそらくは新田さんもあの女性が菅野史なのでは無いかと思っているのだろう。

「フミが見つければ、携帯とか復旧出来るかもしれないし、電話も繋がるようになるかも……」

「そうか、そうすればジユンゴには死に顔動画の事とか伝えられるもんな……!」

「そっか、鳥居くんが死んじやうのって1人で行っちゃったからだから……!」

1人で行かせなければ、死に顔動画の光景を阻止できる……行こう!

「そうだね、急がなきゃ……!」

「とにかく、フミを探そう! ジユンゴを早く助けないと……!」

俺達は全員でその場を後にした……

(38) ハツカーの正体

菅野史を探す為、道行く人に話を聞きながら名古屋の街を歩いていると、新田さんがある公園の前で立ち止まる。

山田公園と言うらしい公園には目立った遊具はなく、それなりに広い敷地の中央に芸術的なオブジェが立つのみだった。

「おーい、どしたー?」

「その公園に何か用?」

立ち止まった新田さんを不審がったのか、少し先に進んでいるダイチとアイリが声を掛けてくる。

しかし、新田さんは2人の声が聞こえていないのか、ぼうつとした様子でそのまま公園の敷地に入ってしまう。

「ちよっ……新田さん……?」

「何してるのよ……! 今はこんなところで止まってるヒマは無いでしょ!」

焦りから随分と棘のある態度のアイリを手で留め、新田さんを追うために俺も公園へ向かう。

……先に行つてくれ、俺は新田さんと後から向かう。

「お……おう? まあそれならいいんだけどよ……」

「もう……! 早くしてよね! 行くわよダイチ!」

「ちよっ……ペース考えろつて! 兎に角先で探してるからな、サツサと来いよ!」

2人はそれで納得したのか、そのまま先へと進んでいく……新田さんはオブジェの程近くで立ち止まり、公園全体を眺めている。

その視線はどこか悲しげに思えた。

小走りで近づくと、新田さんもちちらに気付いたのか慌てて目尻を拭いた。

「あ……ごめんね、急にこんなところに寄っちゃって……」

新田さんは無理に作った笑みでこちらを見る。そしてゆつくりと視線を公園に戻すと、ぽつぽつと事情を語り始めた。

「……ここね、前に来たことあって。何年か前に……家族旅行で。愛

知万博って覚えてる？ あれの帰りなんだけど……『次いつやるのかな？』とか、『また家族で来ようね』とか、そんな話を……して……」話している内にその時の光景を鮮明に思い出してしまったのか、新田さんは目を伏せる。

……大丈夫か？

「あ……うん、ごめんね。困るよね、こんな話されても……。みんな大変だもん……。私だけが落ち込んでる訳にはいかないし……」

新田さんは胸に手を当てて深呼吸をすると、先程より目に活気が戻る。

「……うん、もう大丈夫……。私……頑張れるよ。話を聞いてもらったら、ちよつと楽になったから……もう大丈夫……きつと」

そうか、良かった

「……それじゃフミさんって人、急いで探さなくちゃね。私たちが頑張らなくっちゃ……」

……そうだな

家族の死を間近で体験してしまったせいか、今の新田さんは親しい人の死に対して敏感になっていきらがある。本当は無理をさせる真似はさせたくないのだが、現在人手が足りないのも事実。これが原因で無茶をしなければいいが……

一先ず立ち直った新田さんと共に、公園を後にした……

☆

その後無事にダイチとアイリに合流し、俺達は久屋大通の名古屋テレビ塔前に到着した。

「着いたわね……目撃情報だここにフミっぽい人がいるらしいけど……」

「チャイナ服着た別人とかやめてくれよ……！」

「あはは……それは無いんじゃないかな……」

……どうやら人違いってことは無さそうだ

「……………」

名古屋テレビ塔の内部に入る扉付近に、堂々と鎮座するのは大阪でも目撃し、戦闘したあのチャイナ服の女性だ。相変わらずこちらを気

にもせずに手元の機械類を操作し続けている。

「今は悪魔はいないみたいだけど……」

「あれだよな、フェスティバルゲートに居た……何してんだ、あれ？」

「やっぱり……アレ、フミだよ……！」

……話し掛けてみるか？

「いやでも……なんか様子変じゃねえ？」

「え、あ……ホントだ。フミは変な人だけど、あんな風にぼーつとするのは……」

遠巻きに眺めながら相談をしていると、フミの真正面に陣取るかのように一体の悪魔が瞬時に現れる。

「……！ 久世くん、あの悪魔……！」

新田さんの言う通り、その悪魔はフェスティバルゲートでフミと戦った際、寸前でフミと共に消えた拘束具を身に纏う悪魔だった。

……！……！……！ うぬらは確か……。おのれ、二度までも邪魔をするか。即刻、排除する……！

拘束具を身に纏う悪魔、ボテイスは瞬時にこちらの存在を察知すると、手を振り払う。その動作たったひとつで、テレビ塔前には悪魔が溢れかえってしまう。

「響希い……！ どうするよこれ！」

やるしか無いだろ……全員構えろ！

「仕方ないわね……やるよ、カイチ！」

「行くぞ、ハヌマーン！」

「お願い、ハトホル！」

俺も白虎を呼び出し、その背に跨る。

テレビ塔前はベンチや噴水のある公園のようになっており、悪魔達は比較的散らばっている。目的の為にはフミさえこちらの手に渡れば良いが、悪魔を放置するのは得策とは言えないだろう。

アイリと俺で遠い悪魔を処理する、ダイチと新田さんは最短距離でフミを保護してくれ。

「あのボテイスって悪魔はどうするよ!？」

「う、うん……多分今の実力じゃ勝てないよ……？」

ボテイスは無視でいい、アイリと俺が速攻で悪魔を排除して、ボテイスの妨害に入る。その間にフミを連れて行ってくれば充分だ。

「わ、わかったあ!」

「やってみる……!」

「響希だっけ……あたしのカイチは早いよ、足引つ張らないでね!」

こっちのセリフだ……行くぞ!

全員が一斉に動き出すと同時に、相手の悪魔もこちらに向けて壁のように迫ってくるのが見える。その中には日曜日に相手をした、ハクジヨウシの姿が。

悪魔も着実に強くなってるって訳か……だが。

白虎は悪魔の群れの寸前まで突進するかのように駆け、悪魔の一体を踏み台にして大きく跳躍する。

自然、悪魔達の注目は目立った動きをした白虎と俺に集まり……白虎の凶体で隠されたカイチとカイチに乗るアイリに気付かない。

「あたし達を無視とはいいい度胸ね……! そんなに倒されたいならやってみるわよ……! マハラギ!」
範囲 火炎

白虎に目を取られる悪魔達を、文字通り火炎の波が襲う。全ての悪魔とは行かなかったが、マハラギを喰らった悪魔は全て光の塵となっていく。

悠々とマハラギの範囲外に着地した白虎は、燃える悪魔の行く末に微塵も興味を示さずに次の悪魔に狙いを定める。

猫又と鳥ネコマタ イクティニケ人が2体。全員がまとめて来ても白虎の敵では無かった。瞬時に猫又との距離を詰めた白虎の稲妻を纏う牙が、猫又の首を食い千切る。

!?!?!?

声帯ごと千切られた猫又は声にならぬ叫び声を上げながら、光の塵となる。光の塵の爆発で漸く白虎の存在に鳥人イクティニケが気付くが、鳥人イクティニケが白虎に襲い掛かる寸前で、冷気の奔流が片方の鳥人イクティニケを氷結させる。

次……お前で最後だ。

☆

——ヒーホー!

「あつぶねえ!」

ダイチがジャックフロストから放たれたフブ^{水結}を、危なっかしく屈んで避ける。

—— はあッ!

—— 痛いホー……

対し、ハヌマーンは危なげなく相對していたジャックフロストを片付けて見せる。戦うダイチを遠くで見ているのを見ると、手助けする気は無いようだ……。それを見て逆に奮起したダイチはジリジリとジャックフロストとの距離を詰め、拳を振り上げる。

「やってやるぜ……百裂突き!」

—— やられたホー……

まるで手が分裂したかのように無数の拳撃を放つ百裂突きは近距離まで迫っていたのもあり、ジャックフロストに間違いなく全て命中する。仰け反りながら光の塵に姿を変えるジャックフロストを見て、ダイチは小さくガツポーズを決めた。

「よっしゃ!」

「こつちも終わったよ……!」

「フミさんの所までは後もうちよいだな……!」

—— 小癩な……人間風情が、このボティスの邪魔を出来るなどと、思い上がるなよ……!

苛立ちが多分に含まれたボティスの言葉と共に、ダイチと新田さんのすぐ下の足元に瘴気が発生する。

「うおお!?」

「きやつ……!?」

足元から捲き上げるように、地に着いた足を押し退けて瘴気から悪魔が出現し始める。

—— フン、死にたいようだな……ならば望み通り、殺してくれよう……!

同時に、ボティス自身もフミに一番近いダイチと新田さんに狙いを定めた。

「くっそ……響希達はまだかよ……!」

「志島君、ボテイスは相手しないで今は逃げ回ろう……！ ボテイスがフミさんから離れれば、久世くん達がフミさんを解放してくれるはず……」

「そうするしかないっほいな……！」

——下僕共よ……この人間を残らず殺せ！

悪魔と悪魔使いが、再び激突する。

(39) 菅野史

「範 團 水 結
マハフブ！」

——キヤアアア！

金属を引つ搔くように甲高い悲鳴をあげながら、瘴気から現れたりリム達が光の塵へと姿を変えていくのを最後まで見ること無く、ダイチは瘴気を中心へ向けて走り、暴走した携帯電話に手を伸ばす。

「届けえっ！」

——させると思ふか……ぬうっ!?

——邪魔はさせぬぞ……!?

ボテイスがダイチへ伸ばした手を、ハヌマーンが瞬時に蹴りで弾く。危機一髪、ダイチへ向けられた集 中 雷 撃ジオダインはあらぬ方向へと放たれる。

——チィ……貴様も悪魔だろう……! 　なぜ人間なぞに従う!?

——知れたこと……! 　お前が自ら望んで人と敵対するのと同じく、我らは望んで人の側へ立つ……! 　それが、私の選択だ……!

ボテイスとハヌマーンの力量差はほぼ無く、両者の戦いは長期戦に入るかと思われた。然し、ボテイスを横合いから放たれた集 中 火 炎アギダインが襲う事により力量差は大きく傾く事になった。

間に合ったか……!?

「悪魔はもう殆ど片付けたわ……次はアイツよ！」

——馬鹿な……こつちもあつさり……!?

「こつちも、瘴気全部無くなったよ！」

「後はフミって人だ……抑えといてくれよ！」

——人間の分際で、我を出し抜こうなどと……。咽び泣いても許されると思うなよ……!?

ボテイスが怒気を振り撒いた途端、ボテイスを中心として不気味な円が広がり始める。ハヌマーンが何かを察知して飛び退こうとするも、間に合わずに円から出る寸前で膝を着いてしまう。続いてハトホ

ルが広がり続ける円の範囲へ入り、同じくへたり込んでしまった。

「何なのよこれ……!」

悪魔が、脱力してる……?!

「は、ハヌマーン!?」

「ハトホル……!? どうして……!」

ボテイスから広がる円は臆てボテイスの元へと収束し、不気味な輝きと共にボテイスの身体へと吸い込まれていく……。

——フハハハッ! 潤う、潤うぞ……まんまと盟約に囚われおつて……やはり人間風情に下る悪魔など、人にも劣るゴミクスしか居らぬようだ……!

ボテイスに吸い込まれた輝きは、徐々にボテイスの傷を癒し始める。反してハヌマーンとハトホルは未だに息を切らして立ち上がるのにも精一杯な様子だ。

ボテイスは嗜虐的な笑いを収めると、立ち上がる事を試みるハヌマーンとハトホルに目を向ける。

——フン……吸い尽くした抜け殻は用済みだ……死ねい!

半ば苛立ちが込められたジオダインがハヌマーンとハトホル双方へ向けて放たれた……が、ハトホルの方は白虎が吸収し、もう片方はカイチがハヌマーンを掬い上げるように動かす事によって両悪魔への被害を無くした。

俺とアイリはまだ戦える……今のうちにハヌマーンとハトホルを帰還させろ!

「お、おうー!」

「うん……お疲れ様、ハトホル」

ダイチと新田さんがN i c a e aを操作した事により、ハヌマーンとハトホルはその身体を青い光へと変えてその場から姿を消す。

——小賢しい真似を……貴様らが幾ら来ようと、このボテイスを殺すことなど不可能だと、まだ分からぬか!

「そんなの、やってみないと分からないでしょ……! いくよ、カイチ!」

アイリの命令を受けたカイチが動き出す。頭を下げることにより

湾曲した角を槍のように構え、ボテイスに向けて突き刺さんと地を駆ける……しかし。

—— 単調な…… 護りの盾よ！

ボテイスが片手を突き出し、薄い光の膜を生み出すとその膜がカイチの角を正面から受け止め、威力を殺してしまった。角での攻撃を殺されたカイチはボテイスの目と鼻の先で、致命的な隙を晒してしま

う。
「そんな……！ も、戻りなさいカイチ！」

—— みすみす逃すと思うかッ……！

悲痛な叫びを上げたアイリの命令は、何もかもが遅い。急速に集まった電撃の槍は、カイチが起き上がるのを待つことなく、カイチを穿つ。

「そんな……！ カイチッ……！」

黒煙と共に起きる不快感を催す肉が焦げる臭い。カイチの元へ行くこうとするアイリを手で押し留め、1歩前へ出る。

—— ほう……？ 今の光景を見ても、まだ抗う気が収まらないか。余程の自信家か、自らの勝算の計算も出来ない愚者と見える……！

…… 第三の選択肢を考慮しといた方がいいと思うぞ。

—— ほぎけッ！ 貴様ら人間が我ら悪魔を従えている現状ですら、我を忘れんばかりだと言うのにッ……！ 当の人間は身の程を弁えず、悪魔の力を己が力だと勘違いするッ！ なんとも腹立たしいッ……！

怒号と共に、雷撃が迫る。咄嗟に身を躲すが雷撃の勢いは収まるところを知らず、絶え間なく雨のように集中ジオ雷ダイスがボテイスから放たれる。

—— ちよこまかと……！ 幾らそうして足掻こうが、結果は変わらぬッ！ 大人しくこの雷撃に撃たれて死ねいッ！

躲し、時に護りの盾で防ぎ…… 注意を引く。

無数の雷撃が更に勢いを増すかへ行つたところで、炎の乱舞を隙を見て放つ。

——小癩なッ！ 防げばいいだけの事よ！

例え炎の乱舞が全て当たろうともさほどの被害は受けないであろうボテイスは、馬鹿正直にこちらの攻撃を防ぎに来る。が、それこそが狙いだ。盾で炎の乱舞を防ぎ終わった後は、大きな隙を晒す。

やれ……白虎ッ！

背後より音も無く忍び寄った白虎の、大きく開かれた顎がボテイスの首筋を捕え、牙を立てる。

——ぐああつ!? き、貴様ア……! クソつ、離せ!

離さない。言葉を理解している筈の白虎は、ボテイスの言葉を見無視し、更に顎に込める力を強くする。更に強く、強く、強く。

——き、さ、まらあ……! ゆ、る、さぬ……! この、この

報いは、いずれエエエ……!

ごぎり、と何かが壊れる音がする。

息も絶え絶えになりながら怨嗟の声を吐いたボテイスは、身体のはそのまま首のみがひしゃげて死亡した。その身体は他の悪魔と同じように、光の塵へと姿を変えていく。

ふう……終わったな。

「だな……そうだ、フミって人は」

「あ……まだ、ぼーつとしてる……」

新田さんの言った通り、菅野史は相変わらず手元の機械の操作をやめる気配は無く、動きや瞳には生気がない。

「ホントだ……話しかければ戻るかな……? おーい! フーミー!」

アイリがフミの周りをちよこまかと動きながら、顔の前で手を叩いたり耳元で大声を出していると、突然フミが背後に倒れ込む。座席のようになっている機器類のおかげで思い切り頭を打つ、といった自体にはならなかったが、今度は気絶するかのようにならなくなってしまった。

「ま、まさかアイツ倒したら死ぬとか、じゃないよな……?」

「さ、さすがに違うんじゃない?」

確かめてみるか? 脈拍とかは今でも調べられる

「そ、そうね……死んでないとは思うけど、一応ね……」

「うーん……?」

菅野史は呻くような声を上げたかと思うと、倒れた姿勢から勢いよく起き上がり、こちらを見つめる。

「うおわっ!?! お、起きた!?!」

「フミっ……!?! 大丈夫!?!」

「……………」

アイリの身を按じる声すら菅野史の耳には入っていないようで、相変わらずこちらを寝惚けた目で見ている。

「ん……誰」

ジプス、東京支局に協力している久世響希だ。

「ふくん……見たことない。アタシ菅野史。何でこんなトコにいんの?」

「はあ? いやだから、俺たちは——」

「アンタ達の話はしてない。なんでアタシがこんなトコにいんの? って言ったの」

「あ、ハイ……なんかすみません……」

そんなことも分からないのか、と言うフミの鋭い言葉にダイチは反論する勢いを失い、肩をすぼめて黙ってしまう。どうやらフミはかなり癖のある人物らしい。

「……覚えてないの? えっと、どっから話せばいいんだろ?」

「え、っと……昨日、大阪のフェスティバルゲートにいた事、覚えてますか? 私達は最初にそこで……その、悪魔を呼び出していたフミさんと戦って……それで、捕まえようとした瞬間にボテイスって悪魔に連れ去られて……」

「ふくん……アタシが? その悪魔と一緒に?」

「は、はい……それで、さつき無事にボテイスを倒して今に至る……って感じですよ」

「あとー、フミがいない間、名古屋支局が大変なことになっちゃったんだからっ……! 栗木ロナウドが支局に攻めてきて、局員はバラバラでっ……! ジュンゴもどっか行っちゃっし!」

「栗木ロナウド？ 名古屋支局が？ へえ……そりや大ゴトだね」

「……そうだよっ！ だからフミのこと、探してたのっ！」

「……ふくん？ アタシを探してた？ 何のために？」

……鳥居純吾の死に顔動画がこの場の全員に届いた。加えて、東京支局のメンバーであり現在暴徒である程度の地位に居ると思われる秋江譲の姿も、その動画内で確認された。

「……あくそういう事。ちよつと待って」

フミは俺の話を遮ると、手元のパソコンで何やら操作を始めた……。

「へえ……ホントだ。アタシのパソコンから携帯の基地局がハツキングされてる。携帯電話が使えないのはそのせいだろうけど……何で？」

大方、悪魔のせいだろう。

「うん……さつきまで、フミさんには自我があるようには見えなかった……だから、ボテイスが操ってたんじゃないかな。携帯電話が使えなくて困るのは、人間だけだから……」

「あくアイツ、妙に人間嫌いっぽかったもんな……」

「はあ、確かに月曜の朝から今までの事、何も覚えてないわ。……ふん、まあいいか。えくと、それじゃあ……」

フミは再びパソコンを弄り始めた……かと思えば、すぐに顔を上げてパソコンから目を離す。

「はいできた、携帯使えるはず。あと……ジュンゴとアキエの居場所だっけ？」

「うえ!? マジで……!?」

「あ……うん。……ホントだ、携帯直ってる」

「あ……じゃあこれでジュンゴに連絡取れるかも……！」

アイリはいそいそと携帯を操作し、電話をかけ始める……が、すぐに携帯から耳を離して首を横に振る。

「……ダメみたい。電話、出ないよ……」

「……こつちもダメだ、ジョーさんも出ない」

「そりやそうでしょ。離反したヤツがどの面下げて仲間からの電話に

出んの。ま、今のままじゃ居場所を見つける方法は無いね」

「えつと……フミさん。じゃあどうすれば……」

「あく……そうだね、まあちよつと待ってて。今、こっちで探してみるから」

そうして三度、フミは手元のパソコンの操作を始める……が、どうも様子がおかしい。

「……？ あれ？ ……あ、ちよつと待った。ひよつとして……」

「……？ ど、どうしたの？」

「……参ったねコリヤ。パソコンのメモリがイカれたわ。処理速度、遅すぎ」

「……は？ 何よソレ、どういう事？」

フミは言葉を選ぶように数瞬思考を巡らせ、嘆息しながら言葉を吐く。

「んく……ようするに、このままでも作業はできるけど、予想以上に時間かかるってワケ」

「だ、ダメじゃん！ ジュンゴ、ピンチなんだよ!？」

「分かってるよ、うるさいなあ。えくつと、それじゃあ……」

アイリの叫びに片耳を塞ぐ仕草をしながら鬱陶しげに返すフミは、パソコンを軽く操作し始める。間を置かず、その場全員の携帯に着信が入り、1枚の画像データのみが添付されたメールが届く。

「こっちはこっちでやるからさ、アンタたちはパソコンのメモリ、探してきてよ」

「パソコンのメモリ……ですか？」

「そうそう、できるだけイイやつね。まく無いならないで、こっちだけでも何とかなるけど。あつたら作業が早くなるからさ」

せつかく探し出したのが死体とか、嫌でしょ？ と、フミは嘯く。

「つ……わかりました。それじゃみんな、行こう？」

「行ってらっしゃい」

ひらひらと手を振り、パソコンに没頭して作業を始めたフミを残して、この場を後にした……。

(40) メモリを求めて

栄、水晶広場。

あらかたこの場所でのメモリ搜索を終えると、何かを考え込むようにダイチが足を止めた。

「うーん……。って事は……？」

何かあったか？

電気関係の店が無いか探しながら、ダイチの方を見ずに答える。

「あ、いや……。大した事じゃないんだけど、

ちよつと不思議に思ってた……」

何がだ？

ダイチが携帯を取りだし、こちらに向ける。

その画面には最早見慣れた召喚アプリの画面があった。

「N i c a e aだよ、あれって誰が作ったんだろうなって思ってたさ」

確かに、気になる事ではあるな。

「だろ？ まあ考えたって分かる訳ないけどさ……。マコトさんも分からないって言ってたし。マジで謎だな、これ……」

諦めの入ったダイチの結論に、アイリが嘆息混じりに睨み付ける。

「……はあ？ じゃあなんで聞いたのよ？ 意味分かんない」

「そ、そう怒るなよ……」

「でも……。確かに平然と使ってるけど……。何なんだろうね、N i c a e aって……。死に顔動画とかからして……。普通じゃない」

そうだな。召喚アプリが配られたのも、あのアプリが原因だ。

当初こそ『親しい人が死ぬ時に、その死に顔が動画として送信される』というオカルトアプリでしか無かったN i c a e aだが、あの地震を境に突如として悪魔召喚機能が使えるようになった。バグや故障等とは考えにくい……。ならば元々埋め込まれていた機能、という事なのだろう。

「んー……。そもそもコレ、なんで作ったんだ？」

「目的……。ってこと？ ……思い付かない、かも」

「そうだよなく……。ううん……。やっぱし分からん」

「……分からないなら、誰かに聞くか？」

「誰かって……。誰よ。サイトとか、アプリに関して聞くってことでしょ？」

「あ……。なら、フミさんに聞けば何か分からないかな？」

「あく、なるほど。そういやフェスティバルゲートとかテレビ塔でも、機械いじってたし……。アプリを調べるとかは出来そうだよな？」

Nicaeaがアプリという事は、運営している大元はネットに繋がっているはず……。今まで分からなかった事でも、フミが居るならその辺を調べて貰う事も出来るかもしれない。

「分かんないけど……。フミなら出来るかも。そこら辺は凄い人だし……」

なら、メモリを渡すついでにでも聞いてみようか

「あ、うん……。あの、じゃあ、都合が良かったら、行ってみよう？」

「よーし、んじゃ取り敢えずはメモリだな……。響希、そっちはどうだ？」

……。全くだ、電気関係の店すら見当たらないとは。

俺たちに名古屋の土地勘が無い以上、メモリを探す場所選びはアイリに頼るしかない。然し、アイリには目的のメモリ等が販売している場所に心当たりが無いようで、現在はそこそこ大きなデパートや商店街にアタリをつけてメモリを探している。

「こっちも見当たらない……。別の場所を探した方がいいかも」

「マジか……。んじゃ別の所探しに行った方が良く……。？」

「それなら……。大須とか？ あんまり行ったことは無いけど、あそこも大きい商店街だし」

「商店街なら……。うん、あるかもしれない」

決まりだな、急ごう。

「おうっ……。！」

全員でその場を後にした……。

☆

大須、赤門前の交差点。

人通り少なく、食品を取り扱っている店を中心に、大きく荒らされた痕が目立つ。

「どうやら強引に商品を持ち去られたようだ……。」

「酷い……これも、暴徒の人達が……?」

「あの俺達への様子を見るとそれも有りそうだよな……。」

「そうね……って、アレ……!」

凄惨な商店街の姿について話していると、何かを見つけたのか、アイリが突然走り出す。

「ちよつ……おい!」

「何か見つけたのかも……行こう、志島くん、久世くん!」

確かに、アイリは少し離れたところで何かを抱えている男性に熱心に話しかけているようだ。

「ねえ、ねえってば……! ちよつと……話を聞いてください!」

「んく……嫌だよ。コレはボクの物なんだ。早く帰って組み立てなきゃいけないんだ」

「ま、待ちなさいってば! 大事な話なんですけど……!」

「うるさいなあ、こつちだつて大事だつての。どっか行つてくれよ、もう……。」

胡乱げにアイリに手で去るように示すと、男性は再び歩き始めてしまふ。

「あ、ちよつと……!」

「どうした?」

「あ、響希さん! アレ……アレがフミの言つてたメモリだよ!」

「何……!?!」

「残りは無いのかつてあの人に聞いたら、アレが最後つて……!」

アイリが指さす先には、先程の男性をダイチと新田さんが必死に引き止めている姿があつた。

「ちよつと待った! おっさん、頼むから話を聞いてくれよ、な?」

「あの……お願いします……。」

「なんなんだ君達は……君達もさっきの小娘の仲間か? 悪いけどこれは譲らないよ。理想のパソコンを完成させる為に、どれだけ労力を

費やしたか……」

「り、理想のパソコンって……こんな世の中なのに、何を言ってる……」

「ツ……！……こんな世の中だからだよ！」

男が突然声を張り上げ、こちらを睨めつける。

その瞳には強い怒気と、恐れが含まれていた。

「どうせ僕なんて、そのうち悪魔に殺されちまう。だったら好きなことをするんだ……！……その何が悪い!? 何が悪いって言うんだよ！」

悪くない。

「ちよっ……!?!」

思わぬ所から援護射撃を受けたのが意外だったのか、男は裏返った声で忙しなく捲し立てる。

「だ、だろうか？ だったらほつといってくれ。ボクは自分の世界に生きるツ！ このメモリだって、その方が幸せに決まってる。そうさ、そうに決まってるんだ……!」

「……はあ？ 全然、意味が分かんない。メモリが幸せ？ だったら私たちが使ったって、別に変わらないじゃん！」

「……キミたちが？ ダメダメ、そんなの。ボクのような玄人じゃないと……」

「むく……違うもん！ 私じゃなくて、フミっていうジプスの人が使うのー！」

「あの……バンちゃん？ 一般の人にジプスって言っても分からないんじゃない？」

「あ……と、とにかく！ フミは変な人だけど、そこだけは凄い人だし！ 今もテレビ塔の所で復旧を……」

「……！……テレビ塔……!?! ちよつと待ってくれ。ま、まさかフミとは、あのチャイナ服の女性かい!?!」

「あ、見たことあるんだ？ まあ目立つ服装だしね。で、その人が……」

話を続けようとするアイリを遮り、男は興奮を顕にする。

「あ……ああ、見たとも！ あのハイパーマシンは、この目に焼き付い

ている！」

「……はあ？」

「あのハイスペックかつ、スタイリッシュで独創的なマシンは、僕の理想を超えた理想ッ……！」

「……響希、新田さん。このおっさんが何言ってるかわかるか？」

「えつと……ごめんね、分かんない……！」

さあ……？

「まさかあのマシンに、ボクのメモリが役に立つとは……。身に余る……光栄ッ！ さあ……持って行ってくれ！ そして、あのマシンに組み込むんだ！ さあ早く！」

「あ、どうも……！」

男は家宝のように大事にしていたメモリをアイリに押し付け、感激しているようだ……。

「フッフ……ボクのメモリが、あのマシンの血となり肉となる……ああく生きててよかった……！ ありがとう君たち！ よおし……もつと色んなパーツを提供するぞ！ ちよつと待っててくれ！」

それだけ言うと返事も聞かずに、男性は嬉しそうに去っていった……

「……何なの、あの人」

「あはは……悪い人じゃないんだろうけど……！」

とにかく目的のメモリは手に入れた。テレビ塔に戻ろう。

「うん、これでちよつとは作業が早くなればいいんだけど……！」

「だな……さ、急ごうぜ！」

全員でその場を後にした……

(41) ダンボール大作戦

大須からテレビ塔の前に戻ると、変わらずフミが機械を操作に明け暮れていた。

「フミ〜！」

「お……早かったじゃん。メモリ、見つかった？」

「えっと……詳しくそうな人に譲ってもらったので……」

「そ。じゃあ早速組み込んでからちようだい」

フミは報告に特に興味を示さずにメモリを受け取ると、目の機械の一部を剥がすようにして取り除く。

「……うん、ピッタリ。これでかなり作業進むよ」

「おっしや……！ やったな、響希！」

……調べるのにはどれくらいかかる？

「ん……名古屋支局の復旧作業はすぐには行かないけど、ジュンゴの携帯の場所なら今すぐにも出せるよ」

「お、お願い！」

「あ……あと……、ジョーさん……秋江譲っていう、私たちと同じ民間人の協力者の人がいるんですけど……その人の携帯の場所って、調べられませんか？」

「あー……ちよい待ち。民間人協力者だから……ジプスに登録されるなら……うん、出来る」

「えっ……分かったの？ 凄い……流石フミ！」

「マジで……!?!」

……！ 場所は。

「あー？ どうなってるんだろこれ。そのアキエ？ とジュンゴ、同じ所にいるね。『みんなの科学館』ってトコ」

「響希、行こうぜ。ジョーさんを問い詰めるでも、ジュンゴを助けるのでも、早い方がいいだろ……!」

「うん……急ぐう……!」

そうだな、行こう……!」

「いつてらく、アタシは名古屋支局の復旧作業があるから、また何かあ

ればメールとかして。暴徒とかはアタシ居なくても別に大丈夫でしよ」

「分かった。フミも悪魔に気を付けてね」

「あーはいはい、気を付けるよ。ほら、急ぐんでしよ。さっさと行きなよ」

フミは面倒くさそうに手でヒラヒラとアイリを追い払うと、そのままパソコンへ向き直ってしまう。

未だ作業を続けるフミを残し、全員でテレビ塔を後にした……。

☆

名駅、ペルミナ。

ジョーが足を止め、地下街を見回している。

「ああ、君か。困った事に、こっちはダメみたいだ。……ちよつと休憩しよつか。名古屋つて久しぶりだからさ、つい見入っちゃうなあ。こも彼女と、よく来たよ」

と言いながらジョーは設置されているベンチに座る。どうやら雑談に興じるつもりのように、ジョーの知り合いらしい男性もそれに続いた。

「久しぶり？ そうだったのか」

「……あれ、言わなかったっけ？ 俺、名古屋出身なんだよね。あんまり帰つてないけど、一応……」

「いや……聞いた、だからその上で——」

ジョーと男が話していると、覆い被さるように男性の声がジョー達の背後から投げ掛けられる。

「お、おい……ジョー？ ジョーじゃないか!？」

ジョーに呼びかけた男性が駆け寄って来る。

「おお……？ 誰かと思えば……カッチン！」

「お前……！ 名古屋にいたのかよ！ よく無事だったなあ……！」
「やくちよつとね。カッチンも、よく無事で。」

こんな所で会えるとはねえ」

男はジョーの友人らしい。お互い笑顔で再会を喜び合っている……。

「お前、東京で何してたんだ？ 全っ然、連絡よこさないから心配してたんだぞ」

「メンゴメンゴ。仕事がバタバタしててさく。

すっごい忙しいんだ、あの会社」

「……その様子じゃ、彼女とも会ってないんだろ？」

「あゝ、いや、まあねえ？ 仕事がさ？」

「人づてに聞いたんだけど、だいぶヤバイんだって？」

最近また体調崩したって……」

「は……？ 体調を崩した……？」

ジョーの顔から余裕のある笑みが剥がれ落ち、驚愕に覆われる。寝耳に水だったようだ。

「……？ ジョー？ お前まさか何も……」

「……え？ あ……あゝそうね。うん、大変なんだよ」

その表情もすぐに誤魔化すかのように元の余裕のある笑みに上書きされたが、長い付き合いらしいカツチンと呼ばれた男には通用しなかったようだ。

「……」

「いや〜でもアレだよ。何とかなるよ、きつと。

これまでもそうだったしき……」

「……お前が支えてやれよ。ずっと会いたがってたんだぞ……じゃあ、もう行くわ。ちよつと人を待たせてな。また無事で会おうぜ……！」

カツチンは走り去っていった……

「……体調を崩した……？」

茫然自失と言った雰囲気、ジョーはその場に立ちつくす。余程シヨックを受けたらしい。隣に座っていた男は

「そこまで心配するなら、今すぐにも病院に向かった方がいい、彼女も喜ぶはずだ！」

「ああ、いや〜……。今はほら、こっちでやる事があるから。落ち着いたら行くよ、はは……」

ジョーはその言葉を嘘臭い笑みで受け流し、男を置いて先へ進んで

いってしまおう。

男性はただ、それを見送っていた。

☆

死に顔動画に映っていたのは建物の中だった。それ故に、陽射しで時刻を推測することが出来ない。既に手遅れという可能性を誰一人口にせずに、俺達はみんなの科学館に到着した。

「つ、ついたあ……！　ここにジユンゴが……」

「うん、あの……ジヨーさんも探さないと……だよね」

「で、でもこのまま入ってもどうやって助けんだ？　中の様子も分からないし……」

そうだな、何も作戦無しで入って行くのは気が引ける……見た所、出入口は複数あるからそこから手分けして侵入するとかか？

「あ……じゃあ……！　ちよつと待って……ね？」

そう言うと新田さんは科学館の入口脇に置かれていたある物を手に取る。

「あ、あの……えつと、私が暴徒の裏手に回るね。だから正面をお願い……します」

「え？　でもそれって……」

いや、新田さんの体格なら大丈夫だろう。

「うん……！」

珍しく自信ありげに微笑む新田さんの手には、ダンボールがあった。

☆

みんなの科学館——プラネタリウム。

内部では何人かの暴徒が1人の少年……ジユンゴを追い詰めていた。

「この……！　やっと追い詰めたがや！　手こずらせやがって！」

「ん……ジユンゴ、ピンチ？」

客席の端に追いやられていたジユンゴは、自分のさらに後方……左右にある出入口が開く音を聞いた。もしやさらに暴徒が……とも

思ったが、暴徒にしては足音が軽い。

「いたっ……！ 馬鹿ジュンゴ！」

罵倒と共に自分の名前を呼ぶのは、聞きなれたアイリの声。けれど、何故ここに。

「アイリ……？ どうしたの？」

「はあ!? 見たら分かるでしょ! アンタを助けに……!」

「助けにだとお……!? お前ら、さてはジプスの仲間やな!」

ジュンゴを追い詰めていた暴徒は、携帯をこちらに向けてくる。

「おわっ……やっぱこうなるのか……!」

対抗してこちらも携帯を構えると……聞き慣れた声でした。

「——はは、やっぱ来ちゃったか」

「きや……!」

対面の入口が開き、縞柄のスーツを来た男が現れる。男は何か重いものを転がす動作をすると、回り込んで入ってくる筈の新田さんが地面を転がってくる。

スーツの男は新田さんを気にもとめずに暴徒の元へ近付いて行く。

それは紛れもなく、俺達を知る秋江譲だった。

(42) 秋江譲という男

ジョーは腰に手を当て、やれやれといった風に溜息を吐く。

「まあ携帯が鳴り始めた時から何となくこうなるんじゃないかとは思ってたけど、さ。で、俺になにか用？」

「な、なにか用って……なんでジョーさん、暴徒なんかの仲間入りしちゃってんだよ！」

「なんだ、そんな事か……ほら、アレだよアレ。俺って名古屋出身だからさあ……昔の知り合いに君たちの言う暴徒？ に入らないかって誘われちゃったんだよね。理由としてはそれだけだよ」

あつけらかんと、ジョーはそう言い放つ。常に飄々とした態度を保っていたジョーは、暴徒の側に立つてもそれは変わっていないようだ。

「そ、そんな事で……！」

「そんな事って……だつてダイチくんも同じだろう？ 響希くんがジプスに入ってるから君もまあなあでジプスに居る。違かったかな？」

余裕を崩さず、ジョーは冷静にダイチに反論する。あながち間違つてはいなかったのか、ダイチは言いよどんでしまう。

「そ、それは……そうだけど……」

「だろう？ なら君は俺に対してどうこう言えないはずだ……つと。響希くんも何か言いたそうな顔してるね」

……死に顔動画は届いたか？

「いいや、届いてないよ」

そうか。

今まで考えていた事がある。俺に届いた死に顔動画は一番最初に届いた自分が死ぬ動画を除けばダイチ、ケイタ、ジュンゴの3つだ。

その全員に共通するのが……誰かしらと1回は会話をしている、という事だ。恐らく死に顔動画は、そう言った何かしらの縁がある人物の動画を送り付けてくる。どうやってかは不明だが、そこは考えても無駄だろう。

では、何故ジョーは『届いてない』と言ったのか。推測に推測を重ね

ねることになるが……恐らくは、縁が切れた相手の死に顔動画は届かないのでは無いのだろうか。

——では死に顔動画が届いてないジヨーは。

「君の考えてる事は俺も考えたよ……ま、そういう事だろうねえ」

「ど、どうすんだよ響希……！俺、ジヨーさんと戦いたくねえよ！」

「なら、ジユンゴだけ助けて逃げれば……！」

ダイチの嘆きに対してアイリが提案する。が、それは出来ない。確かにジユンゴは追い詰められてこそいるが、近くにいるから直ぐに連れて逃げ出せるだろう。だが、問題なのはジヨーに転がされたままの新田さんなのだ。

打ち所が悪かったのか、ジヨーの足元で寝転がったまま動かない彼女を放っておく訳にも行かない……非情な判断を下さなかったためには、ジヨーと戦う事は回避できない。

俺は無言で携帯を構えた。

「ん……ジユンゴも、手伝う」

「くそう……なんでだよ、ジヨーさん……！」

ジヨーとの戦闘が始まる。

☆

「ごめん……！」

短い謝罪の後に、鈍い打撃音と人が倒れる音が続く。ジユンゴはほぼ悪魔の力に頼る事無く、拳ひとつで暴徒を蹴散らしていくが……その攻撃のひとつひとつに、躊躇いが見えていた。

「カイチ！ やっっちゃって！」

ジユンゴの突撃にアイリが続く。彼らのコンビネーションは俺達が出会う前から続いていたものなのだろう。手加減をしすぎたのか、暴徒からの反撃をくらいそうになったジユンゴをアイリとカイチがカバーする。

「ん……ありがとう」

「しっかりとよね、もう……！」

☆ 2人は再び暴徒達へ向かい直る。

☆

「カマプアア！」

「ぐ……ハヌマーン！」

悪魔と悪魔が激突する。

集中雷撃
ジオダイーン！

「おっと、嵐の乱舞！」

魔法と魔法が打ち消し合う。

暴徒とジョー、響希とダイチが悪魔を駆使した熾烈な争いを繰り広げる。

「マハジオは使わないんだねえ？」

……アギダイーンツ！

正確には使えない、が正しい。それなりの範囲に雷撃を齎すマハジオを無遠慮で打ってしまえば、それは未だジョーの足元で寝ている新田さんに命中してしまう。

「うおっと……そうマジになんないでよく。もつと俺とオハナシしようじゃないか」

こちらが焦りを滲ませるのは裏腹に、ジョーが余裕のある笑みを浮かべる。新田さんという人質が居る以上、有利はどう足掻こうともあちらにある。

どうにかして彼女から離れた場所で戦いたいが、そう簡単にはさせてくれない。それ故に一進一退の攻防が続いているが、増援が来てしまえば状況はさらに不利に傾いてしまうだろう。

「でりやあああー！」

「うわあっ!?!」

思考を巡らせていると、ダイチの悲鳴が聴こえる。いつの間にかハヌマーンはカマプアアと牛頭鬼を相手にしており、不利を強いられていた。そしてダイチを守る余裕を無くしたハヌマーンは、みすみすと暴徒をダイチの元へと行かせてしまう。

くっ……白虎ッ！

奇襲用に使おうと温存していた白虎を瞬時に救出に向かわせる……が。

「はい、ペトラレイ」

白虎が暴徒の元へ辿り着くよりも先に、紫の光線が暴徒の背中を穿ち、ダイチへ襲いかかる暴徒を石に変える。

……は？

一体、誰が……思わず呆けて振り向くと、そこには仲間だった筈の暴徒に携帯を向けたジヨウの姿があった。

「いやはや、危ないところだったね響希くん」

この状況を作った元凶はいけしゃあしゃあとそんな事をのたまうと、恐らく口をポカンと空けた間抜けな顔をしている俺を見てニヤリと笑う。